

—茨城県土浦市—

神明遺跡(第5次調査)

—土浦市総合運動公園建設事業に伴う—

埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集

2005

土 浦 市
土浦市教育委員会
神明遺跡第五次調査会

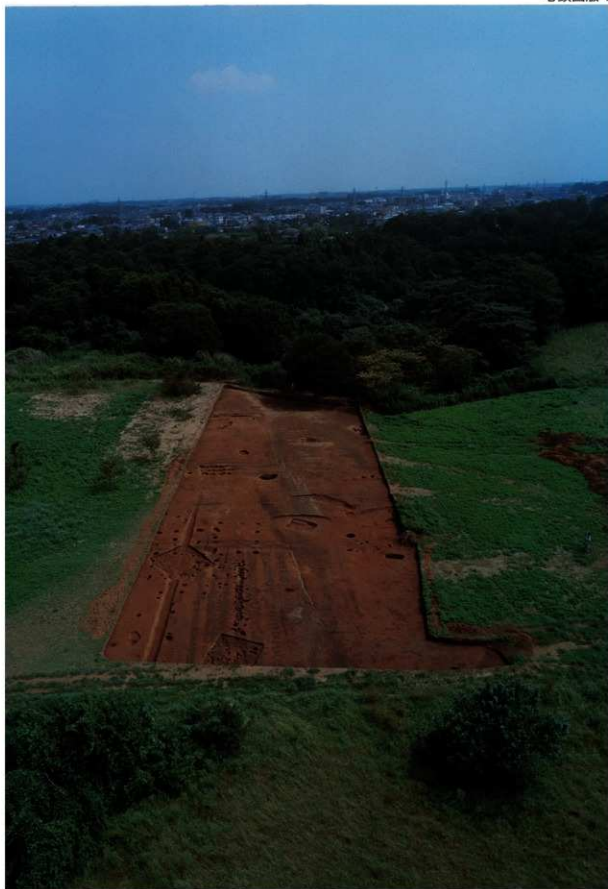
—茨城県土浦市—

しんめい い せき
神明遺跡 (第5次調査)

— 土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集 —

2005

土 浦 市
土浦市教育委員会
神明遺跡第五次調査会



1. 調査区全景



1. 12号住居跡 焼土検出状況



2. 12号住居跡出土遺物

序

土浦市は霞ヶ浦の西に位置し、筑波山より続く新治台地と筑波稲敷台地、その間を流れる桜川の下流に位置します。市内の各所には恵まれた風土によって育まれた長い歴史を物語るさまざまな文化財が今なお数多く伝えられています。

このたび、土浦市において市内北部の常名地区に市総合運動公園の建設が予定されました。当該当地にはいくつかの埋蔵文化財が存在しており、その保存につきまして関係機関と協議を行いました。結果、保存が図れない場所については発掘調査を行い、記録保存することになりました。教育委員会では平成5年度から発掘調査を進めており、今年度は神明遺跡の一部を発掘調査することになりました。

この調査によって明らかになりました数々の成果につきましては、土浦地域の歴史の解明に役立てたいと思います。

最後になりますが、今回の調査にご協力いただきました関係各位に心から厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

土浦市教育委員会
教育長 富永善文

例 言

- 1 本書は土浦市総合運動公園建設事業に伴う、土浦市大字常名2919外に所在する神明遺跡第5次調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査は神明遺跡第五次調査会(会長 須田直之)が実施した。
- 3 発掘調査は2004(平成16)年8月2日から同年9月17日まで行い、その後整理作業を行った。
- 4 発掘調査は酒井清治(駒澤大学文学部教授)が9月3日まで、以降は窪田恵一が担当した。
- 5 本書の編集は酒井清治、駒澤大学考古学研究会、黒澤春彦(上高津貝塚ふるさと歴史の広場)が担当した。
- 6 本書の執筆は文末に記した。
- 7 航空写真は㈱シン技術コンサルに委託した。
- 8 自然科学的分析について、樹種同定と植物珪酸体分析、花粉分析は植田弥生氏・鈴木茂氏(㈱パレオ・ラボ東海支店)、X線分析は小瀬戸恵美氏(国立歴史民俗博物館)に依頼した。分析費用については駒澤大学が負担した。
- 9 遺構や出土品について、倉田芳郎(駒澤大学名誉教授)、設楽博己(駒澤大学文学部助教授)、太田喜美子(駒澤大学講師)、中野晴久(常滑市民俗資料館)、伊藤嘉章(東京国立博物館)、永嶋正春(国立歴史民俗博物館助教授)諸氏にご教授頂いた。
- 10 調査及び整理では下記の機関、方々よりご協力、ご指導を賜った。記して感謝の意を表したい。(敬称略)
浅間陽 池尻篤 石塚宇紀 今村啓爾 小野寿美子 神山武万 工藤朱里 國見徹 久保田昌希
小林孝秀 駒形友也 小松崎毅彦 近藤壮悟 佐藤絵里奈 嶋田圭吾 高島裕之 高野晶文 高野麻希
立川明子 中村賢太郎 土生朗治 比田井克仁 平野武文 福田礼子 森屋雅幸 山下舞子
土浦市都市整備部公園緑地課
- 11 本遺跡の資料は上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管する。なお、記録・保管に際しては「U55」の略号を与えている。

凡 例

1. 神明遺跡の調査にあたっては、日本平面直角座標第IX系を基に、 $X = 11,410\text{m}$ 、 $Y = 31,810\text{m}$ の交点を基準点A-1として設定、そこから南北5m毎・東西5m毎の交点にグリッドポイントを設置した。
2. 遺構の呼称に使用した記号は以下の通りである。
竪穴住居跡：SI 古墳：TM 土坑：SK 溝：SD 掘立柱建物跡：SB
ピット：pit 擾乱：K 現代遺構(芋穴など)：GK
「地下式坑」・「道路状遺構」・「ピット群」は整理の便宜を優先し、本文中では記号と共にそれぞれの名称を充てることにした。
3. 土層や遺物の色調は「新版標準土色帖」22版(小山正忠・竹原秀雄編著1999日本色研株式会社)を使用した。
4. 遺構の記述は以下を原則とした。

1) 遺構の図中の表示は以下のとおりである。

竪穴住居跡  貼り床  粘土層  柱痕  石 
縄文土器 ○ 土師器 ● 土師質土器 ■ 陶器 □ 勾玉 ▲ 銭貨 △

- 2) 縮尺は、ピットは1/30、土坑が1/40、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝は1/60、遺構全体図1/250を基本としたが、必要に応じてスケールを付して縮尺を変更している。
- 3) 水系レベルは海拔高度(m)を示す。
- 4) 遺構の「主軸方向」は、竪穴住居跡の場合は、東西2つの主柱穴間を等分する軸線とし、それ以外の遺構は概ね左右対称となる長軸をそれに充てている。表記はその主軸が座標軸からみてどの方向に振れているかを角度で示した(例：N-40°-W)。
- 5) 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・古墳・地下式坑・土坑・溝・道路状遺構は検出した順に、過去の調査でつけられた番号を引き継いで、11～13号住居跡・11～16号掘立柱建物跡・1号墳・1号地下式坑・28～57号土坑・9～18号溝・1～5号道路状遺構とした。検討の結果、遺構でない判断したものを除外し、欠番が生じているが、整理の便宜を考え、当初の番号を踏襲する。16号土坑・1号溝は、図面上の対応から第3次調査時に検出したものとして、その呼称を踏襲した。
- 6) 竪穴住居跡の柱穴、掘立柱建物跡を構成する柱穴については、北西から左回りに番号をつけた。
- 7) 第57図は、1/600の地籍図「常名」を用いた。

5. 遺物の記述は以下を原則とした。

- 1) 遺物の図中の表示は以下の通りである。

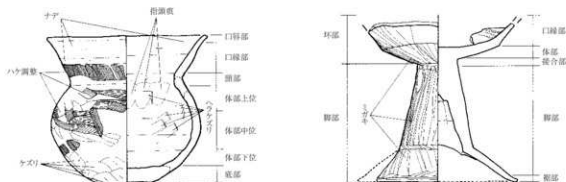
軸  転用砥面  赤彩  左記以外は注釈を付けて任意に表示を行った。

- 2) 遺物実測図の縮尺は、土器・陶磁器・砥石は1/3、勾玉・錢貨は等倍とした。
- 3) 遺物番号は本文・図面・写真図版とも一致する。
- 4) 土器の実測方法は4分割法を用い、左側1/2に外面、右側1/2に内面及び断面を記録した。また残存状況によっては土器の中心を口縁部・底部から算出し、180°回転して作図したが、この場合は中心線を一点鎖線で示した。
- 5) 拓本は中央に実測図を載せ、左側に内面、右側に外面を貼付した。遺物底部は実測図下側に貼付した。
- 6) 観察表内の記載は以下を原則とした。

- ・「器種」は、遺物の種類と、器種の判別できたものは器種を記述した。陶器については産地の判別できるもののみ産地名を記述した。
- ・「法量」については、遺物の口径・底径・器高(縄文土器は器厚、石製勾玉は孔径と重量を追加。錢貨と砥石は「計測値」の項目を設け、計測項目を記述した)を測量した。破片については、最大高を残存高とし、口径・底径は5-4)によって算出した値を復元値として測り、()で記述した。
- ・「形態・特徴」は、遺物の残存部位・形態的特徴・表面上の特徴について記述した。
- ・「製作技法・施文方法」については、成形技法・整形技法の順に記述した。整形技法については、遺物の製作手順を追って記述することを原則とした。
- ・「焼成・色調・胎土」は、以下のように判別し、表は上から焼成・色調・胎土の順に記述した。
 焼成…良好・並・不良の3段階で示した。
 色調…色調は土色帖を基本として、色調名とMunsell記号を示した。表裏の色調に違いのあるものは内面・外面の順にそれぞれの色調を示した。
 胎土…肉眼観察の結果確認できた鉱物のみを示した。
- ・「備考」については、出土位置と「形態・特徴」の項目に分類できない特徴について記述した。出土位置については遺構に伴うが遺物の座標を記録化できなかった遺物に対しては「覆土一括」、表土中より出

土した遺物については「表土」と表記し、「形態・特徴」の項目に分類できない使用痕や砥具への転用痕、型式などの特徴をその他の特徴として記述した。

7) 遺物の部位、調整は以下の図に従う。



神明遺跡第五次調査会組織

会 長	須田直之	(土浦市文化財保護審議会長)
副 会 長	石毛一美	(土浦市教育委員会教育次長)
理 事	大塚 博	(土浦市文化財保護審議委員会)
	広瀬昌則	(土浦市教育委員会参事兼文化課課長)
	来栖忠雄	(土浦市都市整備部参事兼建築指導課長)
監 事	堀越昭二	(土浦市文化財愛護の会会長)
	岩沢 茂	(土浦市教育委員会参事)
事務局 長	宇津野利雄	(上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長)
事務局次長	三須洋一	(上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長補佐)
事務局員	黒澤春彦	(上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長)
	堀部 猛	(土浦市教育委員会文化課主幹)
兼出納員	比毛君男	(上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹 事務担当)

調 査 者 名 簿

調 査 指 導	飯島武次(駒澤大学文学部教授)
主任調査員	酒井清治(駒澤大学文学部教授)
調 査 員	近藤貴徳 清地良太 林紘太郎 松谷裕子(以上駒澤大学大学院生) 窪田恵一
作 業 員	石井聖美 石丸あゆみ 植田雄己 大井和実 奥田志織 黒松旭 坂爪絵美 佐藤奈々恵 佐藤晴子 篠原恵美子 島田雅大 高橋弘成 瀧音大 中田徹 長野友洋 中村慶子 新津尚之 藤田智文 藤野一之 前山喜英 正木未央 三原翔吾 山中浩文 油布憲昭 奥儀裕美 米山喬朗(以上駒澤大学学生) 菊田眞代 平江幸子 吉田芳子 新井栄子 大坪美知子 川田光子 小松崎広子 志間信子 長嶺道子 長谷川はるみ 浜田久美子
事 務 員	鈴木ひと美

目 次

口絵

序

例言 凡例 神明遺跡第五次調査会組織 調査者名簿

目次 挿図目次 表目次 写真図版目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 周辺の環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の概要	7
第1節 調査の方法	7
第2節 調査区の設定	7
第4章 調査の記録	8
第1節 調査区の概要	8
第2節 遺構と遺物	11
1 旧石器時代	11
2 竪穴住居跡	15
3 掘立柱建物跡	26
4 ビット群	35
5 古墳	35
6 地下式坑	38
7 土坑	43
8 溝	55
9 道路状遺構	61
10 遺構に伴わない遺物及び遺構外出土遺物	67
第3節 まとめ	73
第5章 考察	75
第1節 古墳時代前期の住居跡	75
第2節 神明遺跡検出の11・12号掘立柱建物跡について	80
第6章 総括	85
付編：自然科学的分析	87
I 神明遺跡出土勾玉の自然科学的分析	88
II 神明遺跡焼失住居跡(12号住居跡)出土炭化材の樹種同定	90
III 神明遺跡の植物珪酸体	92
IV 神明遺跡産出の花粉化石	96

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	周辺の地形	3	第31図	1号地下式坑出土遺物(1)	40
第2図	周辺の遺跡	5	第32図	1号地下式坑出土遺物(2)	41
第3図	周辺の遺構配置図	6	第33図	39・41号土坑実測図	43
第4図	神明遺跡第5次調査区全体図	9	第34図	39号土坑出土遺物	43
第5図	旧石器東側調査区平面図	12	第35図	41号土坑出土遺物	44
第6図	東側調査区採取の旧石器	12	第36図	47号土坑実測図	44
第7図	旧石器西側調査区遺物分布図	13	第37図	51・53・54号土坑実測図	45
第8図	11号住居跡実測図	16	第38図	51号土坑出土遺物	45
第9図	11号住居跡出土遺物	17	第39図	56号土坑実測図	46
第10図	12号住居跡実測図	18	第40図	52号土坑実測図	46
第11図	12号住居跡炉実測図	19	第41図	52号土坑出土遺物	46
第12図	12号住居跡焼土・炭化物分布状況	19	第42図	57号土坑実測図	47
第13図	12号住居跡遺物出土状況	20	第43図	57号土坑出土遺物	47
第14図	12号住居跡掘り方実測図	21	第44図	16号土坑実測図	48
第15図	12号住居跡出土遺物	22	第45図	42号土坑実測図	49
第16図	13号住居跡実測図	24	第46図	53号土坑出土遺物	49
第17図	13号住居跡出土遺物	25	第47図	30号土坑実測図	50
第18図	5号住居跡実測図	26	第48図	36・40号土坑実測図	51
第19図	5号住居跡出土遺物	26	第49図	43・44・45号土坑実測図	53
第20図	掘立柱建物跡建物新旧関係図	26	第50図	46・48・55号土坑実測図	54
第21図	調査区北西部掘立柱建物跡検出状況	27	第51図	9号溝出土遺物	55
第22図	11号掘立柱建物跡実測図	28	第52図	9号溝実測図・コンター図	57
第23図	11号掘立柱建物跡pit 3出土遺物	29	第53図	1・11号溝実測図	59
第24図	12号掘立柱建物跡実測図	31	第54図	10号溝実測図	60
第25図	13号掘立柱建物跡実測図	32	第55図	道路状遺構全体図	63
第26図	15号掘立柱建物跡実測図	33	第56図	道路状遺構・区画図	65
第27図	16号掘立柱建物跡・38号土坑実測図	34	第57図	神明遺跡付近の明治時代地籍図	67
第28図	1号墳実測図	36	第58図	遺構外出土遺物(縄文時代)	68
第29図	1号墳石室検出状況	37	第59図	遺構外出土遺物(古墳時代)	70
第30図	1号地下式坑実測図・遺物出土状況	39	第60図	遺構外出土遺物(中世以降)	72

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	4	第13表	11号掘立柱建物跡礎石観察表	35
第2表	11号住居跡出土遺物観察表	17	第14表	12号掘立柱建物跡礎石観察表	35
第3表	11号住居跡出土勾玉観察表	17	第15表	ピット群観察表	35
第4表	12号住居跡出土遺物観察表	22	第16表	1号地下式坑出土遺物観察表	42
第5表	13号住居跡出土遺物観察表	25	第17表	1号地下式坑出土石製品観察表	43
第6表	5号住居跡出土遺物観察表	26	第18表	土坑出土遺物観察表	54
第7表	11号掘立柱建物跡pit 3出土銭貨観察表	29	第19表	9号溝出土遺物観察表	56
第8表	11号掘立柱建物跡ピット観察表	34	第20表	遺構外出土遺物(縄文時代)観察表	69
第9表	12号掘立柱建物跡ピット観察表	34	第21表	遺構外出土遺物(古墳時代)観察表	70
第10表	13号掘立柱建物跡ピット観察表	34	第22表	遺構外出土遺物(中世以降)観察表	71
第11表	15号掘立柱建物跡ピット観察表	34	第23表	神明遺跡第5次調査遺構一覧表	74
第12表	16号掘立柱建物跡ピット観察表	34			

写真図版目次

- 巻頭図版 1-1 調査区全景
2-1 12号住居跡 焼土検出状況
2-2 12号住居跡出土遺物
- P.L. 1 1. 11号住居跡 遺物出土状況(東から)
2. 11号住居跡 完掘状況(東から)
3. 11号住居跡 勾玉出土状況(東から)
4. 11号住居跡 作業風景(東から)
- P.L. 2 1. 12号住居跡 焼土検出状況(南東から)
2. 12号住居跡 完掘状況(南東から)
3. 12号住居跡 南隣遺物出土状況(南東から)
4. 12号住居跡 貯蔵穴1遺物出土状況(南東から)
- P.L. 3 1. 13号住居跡 完掘状況(南から)
2. 13号住居跡 pit 3 遺物出土状況(南から)
3. 5号住居跡 調査区内完掘状況(南東から)
- P.L. 4 1. 遺構集中地点 俯瞰
- P.L. 5 1. 12号掘立柱建物跡 礎石検出状況(南から)
2. 13号掘立柱建物跡 完掘状況(南から)
- P.L. 6 1. 1号墳 石室検出状況(南西から)
2. 1号墳 石室・掘り方完掘状況(南西から)
3. 1号地下式坑 完掘状況(南東から)
- P.L. 7 1. 39号土坑 完掘状況(東から)
2. 41号土坑 完掘状況(南から)
3. 47号土坑 完掘状況(北から)
4. 51・53・54号土坑 完掘状況(南から)
5. 56号土坑 完掘状況(東から)
6. 52号土坑 完掘状況(東から)
7. 16号土坑 完掘状況(北から)
8. 42号土坑 完掘状況(北から)
- P.L. 8 1. 30号土坑 完掘状況(東から)
2. 36号土坑 完掘状況(北東から)
3. 38号土坑 完掘状況(南から)
4. 40号土坑 完掘状況(東から)
5. 43号土坑 完掘状況(北から)
6. 44号土坑 完掘状況(南西から)
7. 46号土坑 完掘状況(北から)
8. 48号土坑 完掘状況(北から)
- P.L. 9 1. 9号溝 完掘状況(東から)
2. 1号溝 完掘状況(北から)
3. 11号溝 完掘状況(北から)
- P.L. 10 1. 道路状遺構 調査進行状況(南から)
2. 道路状遺構 Eライン土層断面(南から)
3. 調査区完掘状況(南から)
- P.L. 11 1. 11号住居跡出土遺物
2. 12号住居跡出土遺物
- P.L. 12 1. 13号住居跡出土遺物
2. 5号住居跡出土遺物
3. 11号掘立柱建物跡 pit 3 出土遺物
4. 1号地下式坑出土遺物(1)
- P.L. 13 1. 1号地下式坑出土遺物(2)
- P.L. 14 1. 土坑出土遺物 2. 9号溝出土遺物
- P.L. 15 1. 遺構外出土遺物(縄文時代)
2. 遺構外出土遺物(古墳時代)(1)
- P.L. 16 1. 遺構外出土遺物(古墳時代)(2)
2. 遺構外出土遺物(中世以降)

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

当調査は、土浦市が川口運動公園に代わり計画する新たな総合運動公園の建設事業に伴うものである。調査は1993(平成5)年から継続して行われ、昨年までに北西原遺跡(1993・1994・1995・2002年調査)、山川古墳群(1995・2003年調査)、弁才天遺跡(1996年調査)、神明遺跡(1997・2001・2002年調査)、西谷津遺跡(2002年調査)の5遺跡、合計約10.4haの本調査を済ませている。

2004(平成16)年度の調査は、まず平成16年6月7日付けで土浦市都市整備部公園緑地課長から土浦市教育委員会文化課長宛てに「総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査について」の依頼文が提出されたことに始まる。これを受けた土浦市教育委員会では、平成16年度常名地区新総合運動公園建設事業に伴う発掘調査のため、神明遺跡第五次調査会を組織した。同調査会は平成16年6月29日付けで茨城県教育委員会教育長宛てに埋蔵文化財発掘調査の届出を行い、それを受けた市教育委員会は平成16年6月30日付け土教委発840号で「埋蔵文化財発掘調査の届出について」を差出した。

これを受けた茨城県教育委員会は、文第1193号平成16年7月9日付けで「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知文を神明遺跡第五次調査会に、同日付け文第1194号で土浦市教育委員会宛てにそれぞれ通知した。

各種文書上の手続きの間、神明遺跡第五次調査会役員会は平成16年7月15日に催された。この席で調査会規約と予算案の承認が行われ、予算執行が本格化することとなった。以後、土浦市(担当課:公園緑地課)と神明遺跡第五次調査会との間で調査に関する委託契約の締結を行い、表土排除・調査前諸準備がスタートした。(比毛 君男)

第2節 調査経過

本調査前の事前準備として、表土除去を平成16年7月27日から開始し、8月4日に除去工事は終了した。8月5日から16日まで方眼測量・水準測量を行った。

発掘作業は8月2日から開始し、9月2日に遺構調査を終えた。旧石器時代の部分調査を翌3日から開始し、航空撮影を10日に、17日に器材撤収を行い、現地調査を完了した。

9月22日付けで神明遺跡第五次調査会は「発掘調査の終了の確認について」の依頼文書を土浦市教育委員会に提出し、市教委は9月24日付け土教委発第1172号で発掘調査終了の確認依頼の進達を茨城県教育委員会に行った。これを受け茨城県教育委員会は、10月7日付け文第1769号で、神明遺跡第五次調査会に対し発掘調査終了の確認を通知した。

また茨城県教育委員会は、平成16年11月8日付け文第1996号で神明遺跡第五次調査会に、同日付け文第1998号で土浦市に、埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について通知を行った。

整理作業は調査終了後の9月から平成17年3月15日まで行った。

(比毛 君男)

第2章 周辺の環境

第1節 地理的環境

土浦市は茨城県の南部、霞ヶ浦土浦入りの西に位置する。北西方向には筑波山塊が連なっており、筑波山頂は市街地から北西に約18kmの位置である。気候（平成15年度）は最高気温34.4度、最低気温-5.2度、年平均14.1度、降水量は1,308mmで、比較的過ごしやすい。東京からは北西に約60kmの位置にあり、近世以降、霞ヶ浦水運の拠点として栄えた商業都市である。交通網も発達し、鉄道ではJR常磐線、道路では常磐自動車道、国道6号線が南北に走っている。現在人口は135,000人、面積は91.6km²で、西に隣接するつくば市と並び県南の中心的な市である。他には農水業が盛んで、蓮根、グラジオラス、ワカサギなどが特産品である。特に蓮根は全国一の出荷量を誇る。

地形を見ると、市の中央に桜川が北西から流れている。桜川は栃木県との境、八溝山系に水源を持ち、筑波山系の西側を流れ霞ヶ浦に注ぐ全長約50kmの河川である。ウルム水期のころ、現在の桜川低地は古鬼怒川（現在の鬼怒川と区別するため古鬼怒川と呼ぶ）が流れていたが、2万2,3千年前頃に下館付近で西に流路を変え、土浦方面は桜川が本流となった。台地は古鬼怒川によって分断され、現在の桜川の北を新治台地、南を筑波稲敷台地と呼ぶ。新治台地は筑波山南麓から霞ヶ浦町にかけてひろがる台地で、標高は25～30mを測る。

本遺跡は桜川左岸の台地上、Y字状に延びた谷津の西側に立地する。霞ヶ浦からは約4kmに位置し、標高は約27m、桜川低地との比高差は約24mである。谷津の出口にはかつて溜池が存在しており、古くから湧水の利用が図られていた。池の南側には常名集落が形成されている。

地層は下総層群を基盤とし、下層から藪層、上泉層、上岩橋層、木下層、常総層、新期火山灰層（関東ローム層）と続く。常総層は2層に分かれ、下層は砂や砂利、上層は粘土やシルトで形成されている。関東ローム層は約2m堆積し部分的にローム漸移層がみられる。神明遺跡の関東ローム層については神明遺跡第3次調査（2002）に詳しい。本調査区の遺構確認面はローム層上面で、上層に表土が30～50cm堆積している。

（黒澤 春彦）

第2節 歴史的環境

本遺跡が立地する桜川下流域は各時代にわたり多くの遺跡が存在する。ここでは古墳時代前期と古墳、中世を中心に述べる。

古墳時代前期は、本遺跡や事業地内の北西原遺跡（3）、弁才天遺跡（6）、山川古墳群（2）から集落や方形周溝墓等が発見された。北西原遺跡と神明遺跡は同じ集落と考えられ、今までの調査で100軒以上の住居跡が検出されている。さらに北東への広がりも確認されていることから、200軒を超える住居跡の存在が予想される。

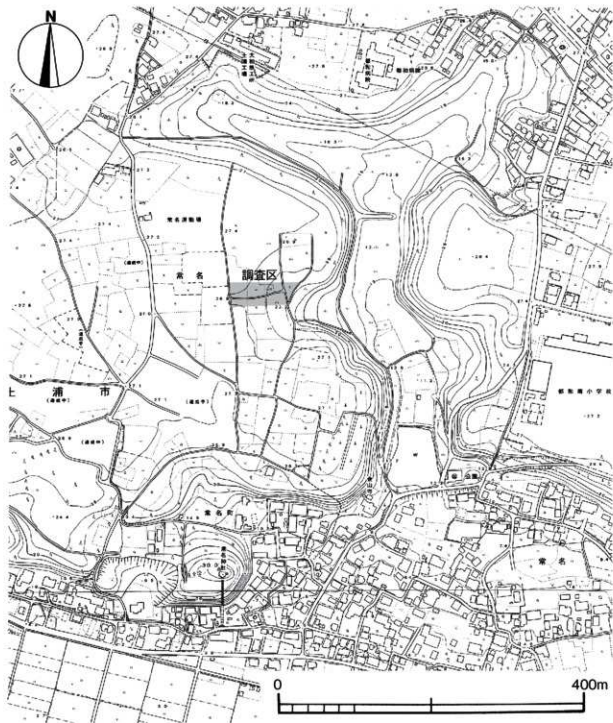
周辺では東方に存在する大宮前遺跡（9）、西真鍋遺跡（12）、殿里遺跡（13）などで確認されている。大宮前遺跡は前期前葉から後葉にかけての集落で、大塚系の壺などが出土した。また緑色凝灰岩の剥片が出土していることから玉作工房の存在が考えられる。

中期になると集落遺跡は極めて少なくなる。弁才天遺跡は前期の集落が途絶えた後、再び形成されるのは後期の6世紀になってからである。その後弁才天遺跡は7世紀から8世紀前半に最盛期を迎え、10世紀まで継続した。一方、神明遺跡、北西原遺跡では古墳時代中期から平安時代にかけての集落は存在せず、山川古墳群で平安時代の住居跡が1軒発見されただけである。次に述べるようにこの一帯は古墳が4世紀か

ら8世紀初頭まで継続して築かれたが、その後は中世までの間、遺構は希薄になる。

古墳をみると、前期古墳は北西原遺跡の南に位置する山川古墳群において、方墳や方形周溝墓が5基発見された。未調査地区でも多くの古墳の存在が予想される。第8号墳は内軸22mを測り、発見された中では大型の方墳である。北半分の調査のため全容は把握できないが、周溝内から土器棺墓が検出された。

中期古墳は山川古墳群の南、小さな谷を挟んで桜川を臨む尾根状台地に常名天神山古墳(7)が存在する。隣には湮滅した挑戦塚古墳(8)が存在していた。常名天神山は全長約90mの前方後円墳で、5世紀初頭の築造と思われる。山川古墳群からは小規模な円墳(円形周溝墓)が4基検出された。4号墳周溝からはTK208の須恵器杯が出土している。



第1図 周辺の地形(1/5,000)

第1表 周辺の遺跡一覧表

No	遺跡名	種類	主な時代	No	遺跡名	種類	主な時代
1	神明遺跡	集落跡	縄文 古前 中世	21	坂田稲荷山古墳群	古墳群	古墳
2	山川古墳群	古墳群	古墳 中世	22	屋敷付古墳	古墳	古墳
3	北西原遺跡	集落跡	縄文 古墳前	23	上坂田館跡	城館跡	中世
4	北西原古墳群	古墳群	古墳後	24	武者塚古墳群	古墳群	古墳
5	西谷津遺跡	集落跡	古前・後～平安	25	下坂田古墳群	古墳群	古墳
6	弁才天遺跡	集落跡	古前・後～平安	26	虫掛二又遺跡	包蔵地	中世
7	常名天神山古墳	古墳	古墳中	27	佐野子新田遺跡	包蔵地	中世
8	挑戦塚古墳	古墳	古墳中	28	川面遺跡	包蔵地	中世
9	大宮前遺跡	集落跡	古墳前 中世	29	佐野子宮前遺跡	包蔵地	平安 中世
10	どんどん塚	古墳	古墳	30	般若寺遺跡	寺院跡	中世
11	真鍋愛宕神社古墳	古墳	古墳	31	竜王山古墳	古墳	古墳
12	西真鍋遺跡	包蔵地	縄文 古墳前	32	穴塚寺前遺跡	中世	平安 中世
13	殿里遺跡	包蔵地	縄文 古前 平安	33	穴塚古墳群	古墳群	古墳後
14	殿里台古墳	古墳	古墳後	34	根本遺跡	包蔵地	平安 中世
15	殿里古墳	古墳	古墳	35	幕化女騎古墳	古墳	古墳
16	金山寺五輪塔	五輪塔	中世(室町)	36	高井城跡	城館跡	中世
17	アラク遺跡	包蔵地	中世	37	寄居遺跡	集落跡	古前・後 奈・平
18	石橋古墳	古墳	古墳	38	うぐいす平遺跡	集落跡	古前・奈良～中世
19	下坂田館跡	城館跡	中世	39	土浦城跡	城館跡	中世～近世
20	釈迦久保古墳群	古墳群	古墳	40	田中八幡遺跡	包蔵地	中世

後期から終末期にかけての古墳は、山川古墳群で円墳、前方後方墳、帆立貝式前方後円墳が4基検出された。主体部は箱式石棺で、3号墳は周溝にも土坑状の埋葬施設を持つ。本調査区からも箱式石棺が検出されている。7世紀後半になると古墳群は北西原古墳群(4)に移動し、墓道をもつ横穴式石室の方墳4基が確認された。西方にはみずらが出土した武者塚古墳(24)など多くの古墳が存在する。

中世になると、調査区周辺では居住地として再び利用され始める。神明遺跡からは13世紀代と思われる方形の施設が発見された。本調査区を含む館跡の北からも掘立柱建物跡や土坑、地下式坑などが検出されている。特に本調査区の掘立柱建物跡は雲母片岩がビット内に置かれ、特殊な建物の可能性がうかがえる。また、本調査区や山川古墳群古墳群2次調査区では柱穴から北宋銭が出土している。中世の遺構は広範囲にみられるが遺物は少なく、常滑や渥美産の甕、かわらけなどが出土している。

周辺の中世遺跡としては、調査区に近い金山寺(16)には室町中期の大型五輪塔、常名天神山古墳には安土桃山期の宝篋印塔がみられ、西方にはアラク遺跡(17)下坂田館跡(19)などが存在する。またこの地域には「常名城」の伝承が伝えられているが、場所など詳細は不明である。東方では、大宮前遺跡で掘立柱建物跡が検出され、常滑や白磁などが出土した。12世紀から13世紀に位置付けられる。桜川の対岸には古代末から中世初めに創建された般若寺(30)があり、その周辺には中世の遺跡が数多く存在している。

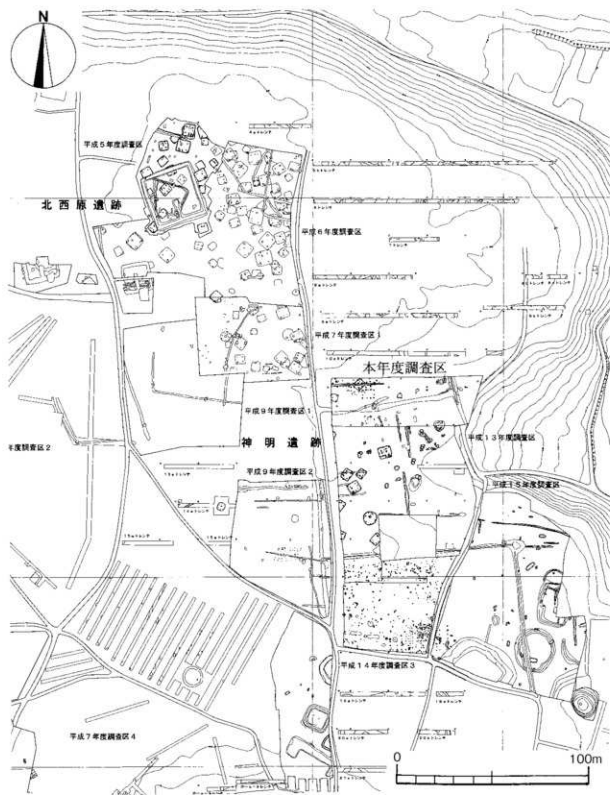
(黒澤 春彦)



第2図 周辺の遺跡(1/25,000)

参考文献

- 比毛 君男 1998 「神明遺跡(第1次・2次調査)」 土浦市教育委員会
 吉澤 悟 他 2002 「常名台遺跡群確認調査 神明遺跡(第3次調査)」 土浦市教育委員会
 比毛 君男 他 2003 「神明遺跡(第4次調査)」 土浦市教育委員会
 小川 和博 他 2004 「山川古墳群(第3次調査)」 土浦市教育委員会



第3図 周辺の遺構配置図(1/2,000)

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

本調査は平成13年度の確認調査において、11・12トレンチとして調査した地点を含むものである。試掘調査の段階で縄文時代土坑・竪穴住居跡・中世ピット群・溝が確認された。表土除去は重機により、遺構確認面まで掘り下げた。

本調査は鋤簾を用い、人力での遺構確認・精査をする事から始まった。遺構確認の結果、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・ピット群・古墳・地下式坑・土坑・溝・道路状遺構が検出され、それぞれに名称をつけた。本調査で確認した遺構は遺構一覧表(第23表)に示している。16号土坑と1号溝は、神明遺跡第3次調査時に確認されたものの延長であるとし、名称も引き継いだ。

各遺構の掘削は、一層ごと掘り下げ、遺物の出土状況及び覆土の堆積状況を記録化した。11・12号住居跡・1号墳については十字にベルトを設定して4分割し、道路状遺構・10号溝ではトレンチを設定し、また1・9・11号溝では数箇所ベルトを設定し、それ以外の遺構・付属施設では長軸を半截して土層観察を行った。土層断面図は、基本的に南・東側土層断面を使用することにした。

各遺構および遺構全体の平面図は、トータルステーションを用いて、適宜、上端・中端・下端を測量し、平面座標を記録した。1号墳に関しては、トータルステーションでX軸・Y軸の基線を定めて、10cm×10cm間隔のメッシュを設定して、平面座標を記録した。

1号地下式坑では、見通し図を作成し、断面形態を詳細に観察した。

遺構の土層断面図・平面図・遺物出土状況図などの図面は、1/10または1/20を基本縮尺として作成した。

出土遺物は、基本的に各遺構から出土したものについては、平面座標はトータルステーション、標高はレベルを用いて計測し、三次元的に遺物出土状況を記録し、取り上げた。記録化できなかったものに関しては、各遺構の一括遺物とし、調査区内の遺構外から出土した遺物は表土一括遺物とした。

遺構の記録写真には、6×7判・35mm判カメラを使用した。6×7判カメラではモノクロームフィルムを、35mm判カメラではモノクロームフィルム・カラーポジフィルムを用いて、基本的に各遺構の遺構確認写真、土層断面写真、遺物出土状況写真、完掘写真及び遺跡全景写真の撮影を行い、多くの情報を記録できるように努めた。遺構全体の航空写真の撮影は委託事業で行った。

(中田 徹)

第2節 調査区の設定

神明遺跡第5次調査区の設定にあたっては、まず調査区外に日本平面直角座標第IX系を基に、X = 11,410m、Y = 31,810mの交点(旧座標)を任意の点A-1として設置し、そこから真北へ南北の基線を延ばし、これに直交する東西線を基準とした。次に遺跡の調査区内に5m×5mのグリッドを組み、北から1～8の整数、西からA～Rのアルファベットを振り分けた。グリッドの呼称は北西のグリッドポイントで表現することとした(例：A-1グリッド)。

ベンチマークの設定は業者に委託し、本遺跡の調査区外、標高27.108mの地点に設定した。

(中田 徹)

第4章 調査の記録

第1節 遺跡の概要

神明遺跡は、桜川低地からY字状に貫入する開折谷の西側に広がる台地上に位置する。この台地は、東側に小支谷を抱えるため凹字形を呈しており、今回の調査地は神明遺跡の中央、凹字形の窪み部分に相当する。調査面積は東西約25m×南北約80mの約2,000㎡である。本調査区は、西側に平坦地があり、1ライン(第4図)から東へと傾斜し、埋没谷に至る地形となっている。平成9・13・14年度に発掘調査が行われており、今回は第3次調査区の北側に接し、平成13年度確認調査時の11・12トレンチを含む範囲を調査した。試掘調査時にトレンチからは、土坑・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝が検出され、縄文時代中期後半の深鉢形土器・ロクロ成形の灯明皿などが出土している。16号土坑と1号溝は第3次調査時に南側が調査されており、本調査時には北側が確認された。3次調査時に確認された5号住居跡も本調査に伴い拡張したため、追加報告する。

検出した遺構は、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡5棟、ピット群、古墳1基、地下式坑1基、土坑19基、溝5条、道路状遺構5条である。これを時期で見ると、縄文時代・古墳時代・中世・近現代の4時代の遺構群に分けることができる。

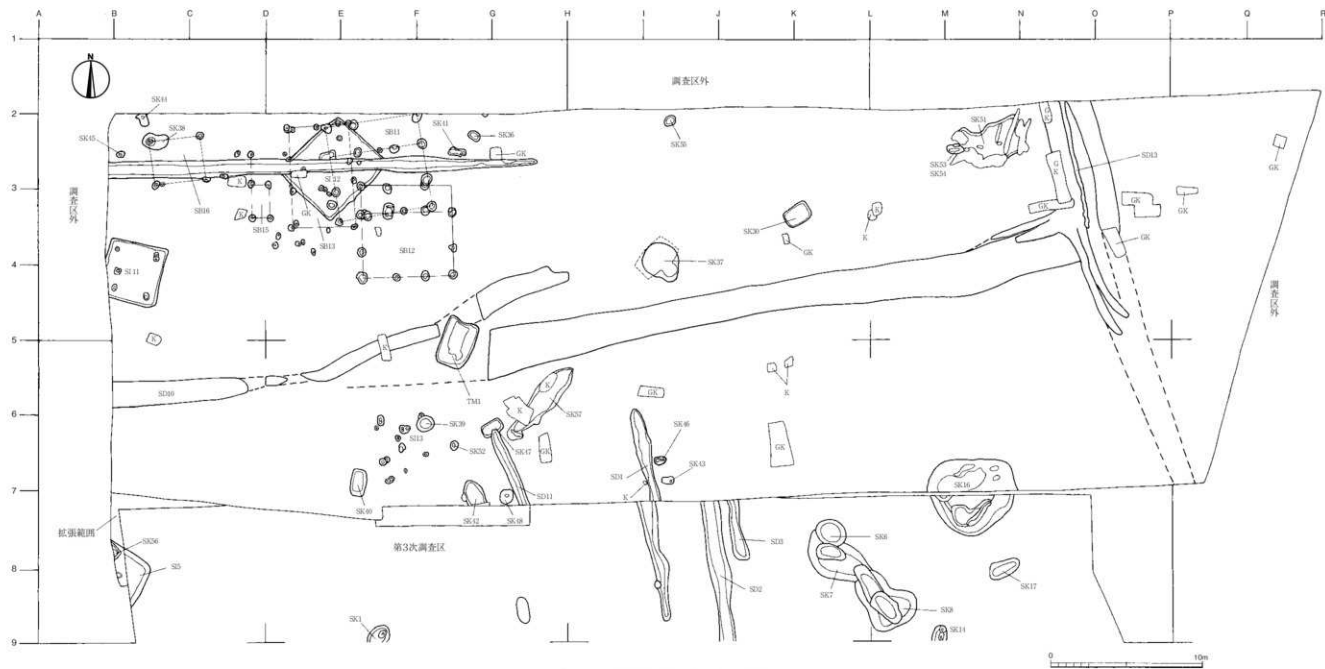
縄文時代の遺構は、土坑が4基検出された。それぞれ中期の縄文土器が出土しているが、詳しい時期・性格は不明である。また各遺構は位置的に離れており、関連性は不明である。

古墳時代の遺構は竪穴住居跡3軒、古墳1基、土坑2基が検出された。竪穴住居跡は調査区西側の平坦地に集中している。12号住居跡は覆土から焼土・炭化物を検出しているため焼失住居である。時期は埴・高坏などの遺物から前期後葉と思われる。11号住居跡は緑泥石製の勾玉が出土している。土師器の特徴から前期前半、13号住居跡は埴の特徴から前期後半と推測した。1号墳は墳丘・周溝が確認されず、埋葬施設のみが検出された。石室は多量の筑波山系の雲母片岩で構成されており、人為的と考えられる破壊を受けていた。遺物は土師器の小破片のみである。時期や形態については、遺存状況が悪いため断定はできないが、掘り方で確認できる壁溝や全体を覆っている裏込め等から、終末期の箱式石棺と考えられる。

中世の遺構は、掘立柱建物跡5棟、地下式坑1基、溝2条、土坑4基、ピット群が検出された。掘立柱建物跡、ピット群は遺跡北西部に集中している。11・12号掘立柱建物跡からは礎石が出土しており、版築によって固めた上に存在すること、版築の厚さが違うことから、柱の高さを合わせるためや、柱を安定させるために置かれたと推測できる。石材のほとんどが1号墳と同じ、筑波山系の雲母片岩で、一部で砂岩が使用されている。11号掘立柱建物跡pit 3から、中国北宋の銭貨「元豊通寶」(初鑄1078)が出土した。それぞれの重複から、掘立柱建物跡の前後関係を推定すると16→12→11→13・15号掘立柱建物跡の順になる。12号掘立柱建物跡と9号溝は、主軸方向がほぼ同じであり並存していたと考えられる。1号地下式坑からは多くの遺物が出土したが、床面からの遺物の出土はなく、貯蔵や埋葬の形跡はみられない。遺物は、天井崩落土の上に流れ込んだ覆土中から中世陶器が出土した。遺物から天井崩落時期は、14世紀前半から15世紀前半の間であると思われる。

近現代の遺構は、道路状遺構5条、溝4条が検出された。道路状遺構は遺跡東部を南北に走る1号道路状遺構に、東西に走る2・3号道路状遺構が交差し、T字状を呈する。道路状遺構は明治20年代の地籍図にそれと同定できる地境、道路として記載されている。

(中田 徹)



第4図 神明遺跡第5次調査区全体図

第2節 遺構と遺物

1 旧石器時代

(1) 調査に至る経緯

常名台遺跡群では、西谷津遺跡を除く北西原遺跡、神明遺跡、山川古墳群、弁才天遺跡の4遺跡で、年度毎に細分された地点として調査が実施され、後期旧石器時代前半期から後半期、そして縄文時代草創期に至る石器群が検出されている。2001年度の調査までは後世の遺構内覆土中からの検出であったが、2002年度の神明遺跡(第4次調査)[窪田2003]と2003年度の山川古墳群(第2次調査)[窪田2004]では本来の包含層である関東ローム層中から、31,000年前から14,000年前頃までの石器製作跡(石器ブロックと呼称する)を4基検出した。また、後期旧石器時代前半期の炉跡遺構を検出してAMS手法による高精度14C年代測定を実施した。その結果、31,500年前頃の遺構と判定した[バリノ・サーベイ2004]。

これまでの包含層内の調査は、遺構確認作業中に石器の検出があったことが契機となっていたが、旧石器時代の包含層に対しては掘乱行為となる後世の遺構構築がなされていない、遺存状況の選り良好な石器群資料の検出を目指し、埋没過程の途中に石器遺物よりも移動・拡散範囲が広い炭化物の分布範囲の把握に努めた。炭化物の散布場所を確認して調査区とすることで石器ブロックの検出に繋がったのが、神明遺跡(第4次調査)の槍先形尖頭器石器群の製作地点と山川古墳群(第2次調査)のⅨ層段階の石器ブロックである。筆者の経験ではあるが、武蔵野台地の調査でも炭化物の散布範囲の把握は石器ブロック検出に一定の有効性を確認している。

今回の調査においても、後世の遺構調査中にメノウ製の剥片1点を採取した場所を東側調査区に、第12号住居跡脇にて炭化物の散布を認めた場所を西側調査区と、2ヶ所を旧石器時代調査区とした。

(2) 調査の方法

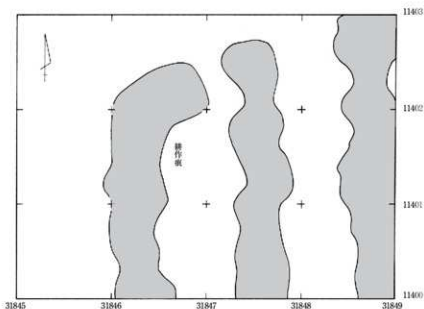
現地調査では包含層であるローム層を鋤簾により削り下げる作業を行った。包含層内から検出した資料は、遺り方測量による平面位置の記録とオートレベルを使用した水準測量を実施した。掘削作業によって成形した調査区壁を利用して、堆積包含層部分の考古層序区分作業を行い写真撮影したボジから層序図を作成した。

今回の調査区は東西に長い形状で、東側は開析谷に向かって傾斜している地形である。この傾斜が風成ロームの堆積開始時期からの地形であったものか考えるために、風成堆積ローム層下部の常総粘土層上面の標高値を計測してみた。計測地点は地下式坑壁面、粘土探掘坑(第3次調査時の第16号土坑)壁面、調査区東側に露出した常総粘土層理面の3ヶ所で、特に観察のために新たな試掘坑を設定し掘削することはしなかった。計測作業の結果、3地点ともすべて24.7mの標高値を示した。調査区東側の常総粘土層露出地点付近は、表土層を除去するとすぐに粘土層が露出する状況であった。このことから神明遺跡東側の開析谷に向かう緩傾斜面地形は、常総粘土層形成の最終段階までは水平面であり風成ローム層堆積もほぼ同様に水平堆積していたが、後に東側に形成された開析谷に向かって順次ローム層が流出するなどして失われ、調査区では長さ60m以上の緩やかな傾斜地形が形成されたと考えられる。そうなると、後期旧石器時代の遺物包含層である立川ローム層は標高26m以上でなければ残存していないことになり、旧石器時代の調査範囲を考える際にも一定の目安となる。同様な地形は未調査範囲にも認められることから、今後の調査でさらに確認地点を増やし、堆積から現在までの経年変化と遺存環境を観察できれば遺跡の形成をより深く考える機会となるだろう。

(3) 調査の成果

東側調査区(調査面積12㎡、調査深度0.4mで8層下部に達する。第5図)

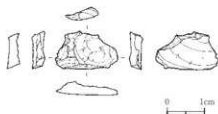
メノウ製剥片1点を採取したことから設定した調査区である。地形は緩傾斜面で、南北に並列する近年の畝があり、調査面積の50%を耕作により改変を受けていて掘削深度も9層(立川ローム第X層相当)に達しているなど、遺存状態は良好ではなかった。調査では、畝内の耕作土を最初に除去してから、ローム部分の削平を鋤簾によって行った。作業の結果、炭化物散布箇所を検出や人工遺物の追加検出には至らなかった。



第5図 旧石器東側調査区平面図(S=1/40)

石器(第6図)

半透明で白色のメノウ製の剥片で長さ9.9mm、幅16.5mm、厚さ3.1mm、重量0.5gである。剥離時の打面を残して、剥離角は117度である。背面構成は平行する剥離面が2面認められ、素材剥片に対して二次加工を施した際に生じた調整剥片と考える。



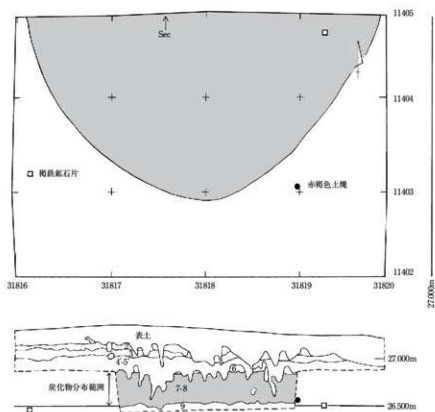
第6図 東側調査区採取の旧石器(S=1/1)

西側調査区(調査面積10.92㎡、調査深度0.5mで9層上部に達する。第7図)

現地調査開始後に、炭化物の散布を確認したことから設定した。この部分は調査着手時点の表土除去作業によって、すでに6層(立川ローム第VI層相当)下部に達しており、縄文時代以降の遺構確認面が7層(立川ローム第VII層相当)上面の状態であった。遺構確認面は、ローム層の硬質部内に軟質部が斑状に露出する状態であった。北側の壁面には3層からの層序が観察できたが、炭化物は軟質部にも分布するが硬質部の方が分布密度は高く、確認面以深に分布の中心が埋没していると判断した。削平作業は数cm単位に行い、9層上部まで削平した。9層には炭化物の散布がほとんど認められず、分布範囲の中心が8層(立川ローム第IX層相当)付近であったことを確認した。炭化物の検出サイズは最大5mm角までで、1mm角が最も多かった。平面分布範囲は調査区の南側では密度は低く、北側の限界に向かって密度が高くなる。調査区北際は当初の調査範囲の北側限界でもあり、それ以上は調査区の拡張を行わなかった。検出状況から

炭化物の分布範囲がさらに北側に広がっている可能性は高い。今後の北側の隣接範囲の調査の際には、分布範囲の追跡調査が行われることを望む。

この調査区では、赤褐色 (Munsell notation 10R5/4) を呈する土塊 1 点、褐鉄鉱礫片 2 点を検出して位置を記録した。3 点は平面分布では炭化物の散布密度の薄い範囲で、包含層位は 8 層下部である。赤褐色土塊は 12mm 角のサイズで、微細な白色粒子を内包している。現状で重量は 0.9g を測る。一部を検出時に傷付けてしまったが、埋没時の表面は細かい凹凸が多く、まさに「土塊」状態であった。内部を観察したが、気泡状の微細な空隙はなく赤色スコリヤや焼土塊とは異なる物と判断した。その他には、最大で 20mm 大の円礫を多数検出したが、検出位置は記録しなかった。円礫の石材種は、石英斑岩と砂岩が主体で僅かにチャートを含む構成である。



第7図 旧石器西側調査区遺物分布図(S=1/40)

(4) 小 結

今回の調査では2003年度のような石器集中箇所への検出に至らなかったが、炭化物片の比較的濃厚な散布地点を1ヶ所検出した。確認した層位は8層を中心として7層上位まで拡散していた。散布範囲は北側に広がる様相を示し、南側半分程の検出作業となった。北側隣接箇所の調査を実施する際に散布範囲を完掘することになる。石器は伴件していなかったが、赤褐色土塊1点と褐鉄鉱礫片を検出した。赤褐色土塊は2003年度の調査で検出した炉跡遺構に伴っていた焼土とは差異があり、自然の形成物ではなく、近年北海道や上越地方で検出事例が相次いでいる赤色や黒色の顔料資料 [小熊 2003・福井2003] と類似する可能性を考慮している。北側の調査の際にも注意すべき資料である。

この炭化物散布範囲の時期は8層(立川ローム第IX層相当)が本来の包含層であったと考えているが、この層位は周辺で多数検出している、頁岩類を使用するナイフ形石器を中心としたA T火山灰降灰期以前の石器群の包含層と考えている層位で、時期的には近いものと考えている。北側隣接範囲ばかりではなく未調査部分も含めて、今後の調査に期待したい。

(註) 土層註記は、山川古墳群(第2次調査)の第3章第5節「基本層序と地質環境」を参照のこと。

【参考文献】

- 窪田 恵一 2003 「神明遺跡(第4次調査) 第6章 第2節 遺構と遺物 1. 旧石器時代の調査」『山川古墳群
確認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡(第6次調査) 神明遺跡(第4次調査) - 土浦市総合運
動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7集-』土浦市・西谷津遺跡調査会・
土浦市教育委員会
- 窪田 恵一 2004 「第3章 第6節(1) 旧石器時代の調査」『山川古墳群(第2次調査) - 土浦市総合運動公園
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集-』土浦市・土浦市教育委員会・山川古
墳群第二次調査会
- バリノ・サーベイ株式会社 2004 「付編1. 山川古墳群出土炭化物の放射性炭素年代測定」『山川古墳群(第
2次調査)』
- 小熊 博史 2003 「新潟県荒沢遺跡出土の赤色顔料とその利用形態」『旧石器考古学64』旧石器文化談話会
- 福井 淳一 2003 「北海道における旧石器時代の顔料」『旧石器考古学64』旧石器文化談話会

2 竪穴住居跡

11号住居跡〔第8・9図 P.L. 1-1～4・11-1〕

位置 調査区の中央部西際、A-3・4、B-3・4グリッドにかけて位置する。南西隅の一部分が調査区外に広がっている。11号住居跡の北東部には12号住居跡があり、南東部には13号住居跡が位置している。

規模と形状 南北軸3.86m、東西軸3.76mの方形を呈し、主軸方向はN-72°Wを示す。

壁はやや外傾して立ち上がっている。未調査区西壁の土層断面で掘り込みを確認しようとしたが、広範にわたる攪乱により明瞭には確認できなかった。壁溝は最大幅0.06m、最小幅0.01m、床面からの深さは0.07mを測り、未調査区を除き壁際に沿ってほぼ全周していた。

床は耕作痕と思われる攪乱により大部分が破壊を受けていた。残存した床は、掘り込んだ地山面をそのまま利用している箇所と貼り床を施している箇所がある。貼り床は、床面北側に厚く施されており、南側に向けて徐々に薄くなる傾向がみられ、東壁中央の床面には一部硬化面が確認できた。

攪乱の下より柱穴と思われるピットを4本検出した。いずれも壁際ないし隅に寄っていた。北西隅のpit1は直径0.29m、深さは0.29mを測り、覆土は2層に分けられる。西壁際南西隅のpit2は直径0.44m、深さは0.37m、覆土は2層に分けられる。南東隅に位置するpit3は直径0.45m、深さは0.45m、覆土は3層に分けられる。北東隅のpit4は直径0.29m、深さは0.28mを測り、覆土は2層に分けられる。以上4本の柱穴の覆土は対応している。

炉 炉は西壁に寄った位置に1基確認した。床面を掘り込んで作った地床炉で、平面は不整形円形を呈し、長軸0.48m、短軸0.28m、生活面からの深さは0.14mを測る。2層に分けられ、1層は締まりの強い焼土粒子を含む赤褐色土である。2層は焼土層であり、硬化した焼土ブロックを多量に含む明赤褐色土をなす。この層は強く被熱を受けたものと考えられる。

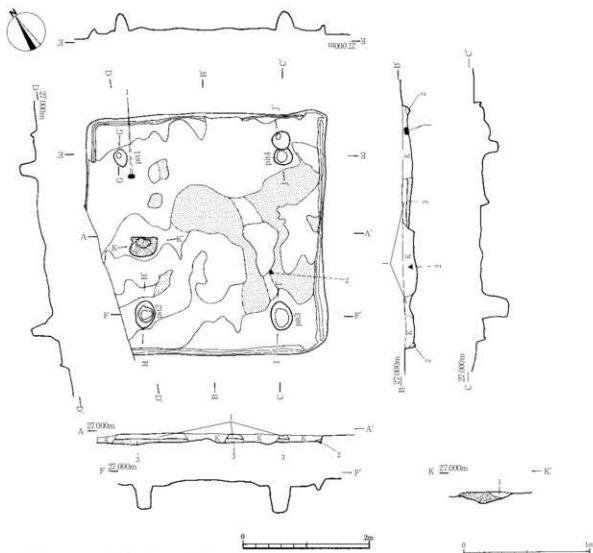
覆土 貼り床を含め3層に分けられ、攪乱の下の壁際には三角堆積土が見られた。床上では表土の他に褐色土と黒褐色土が2層、床下では黄褐色土の貼り床が1層確認できた。

遺物 遺物は縄文土器・土師器・内面黒色土器・常滑産陶器・石製勾玉が出土している。しかし、遺物の大半は耕作痕と考えられる攪乱からの出土である。図示し得た遺物は2点で、ともに床面直上ないし僅かに浮いた位置から出土した。

土師器壺(1)は口縁部から胴部にかけての破片であり、pit1の南側から出土している。口縁部は粘土紐を作り、胴部の内面に貼り付け接合している。頸部内面の接合部にはナデ調整が見られ、胴部外面にはハケ目調整が施されている。2は緑泥石製の勾玉であり、pit3の北側から出土している。コの字状を呈し、一部に風化が見られ、頸部にキズを有する。孔径は表面・裏面ともに0.10cmを測り、穿孔は両面から行われ、内部で孔の食い違いが若干確認できる。図示し得なかったが、外面にハケ目調整が施されている土師器壺の胴部も出土している。

所見 本住居跡は、大半が耕作痕と思われる攪乱により破壊を受け、また一部が調査区外に存在し、その他の付属施設などは検出できなかったため、不明な点が多い。しかし、本調査区から検出されている住居跡の規模・出土遺物の様相から同時期に営まれたとは考えにくい。ゆえに、本住居跡の時期は、住居規模・1の特徴から古墳時代前期前半に営まれたとするのが妥当であると考えられる。

(大井 和実)

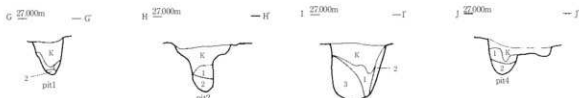


層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	棕色(7.5YR4/6)	普通	やや強い	ロームプロッタ3%含
2	黒褐色(2.5YR3/2)	あり	やや強い	ロームプロッタ5%含
3	黄褐色(10YR4/6)	なし	強い	黒色粒子5%含

※ロームプロッタの色調 褐色(10YR4/6)
黒色粒子の色調 黒褐色(10YR2/2)

層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	赤褐色(2.5YR4/6)	やや強い	強い	焼土 焼土粒子1%, 黒色粒子1%含
2	明赤褐色(2.5YR5/8)	なし	強い	焼土 焼土粒子1%含

※焼土粒子-プロッタの色調 赤褐色(2.5YR4/6)
黒色粒子の色調 黒褐色(10YR2/2)



pit1 層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	明褐色(7.5YR5/8)	普通	やや強い	黒色粒子10%含
2	黄褐色(10YR5/8)	やや強い	普通	なし

※黒色粒子の色調 黒褐色(10YR2/2)

pit2 層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	明褐色(7.5YR5/8)	普通	やや強い	黒色粒子10%含
2	黄褐色(10YR5/8)	やや強い	普通	なし

※黒色粒子の色調 黒褐色(10YR2/2)

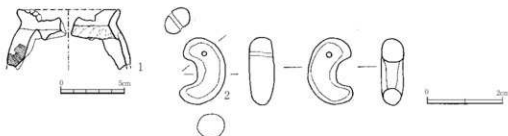
pit3 層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	明褐色(7.5YR5/8)	普通	やや強い	黒色粒子10%含
2	明褐色(7.5YR5/8)	普通	やや強い	黒色粒子15%含
3	明褐色(7.5YR3/4)	やや強い	普通	ロームプロッタ3%含

※ロームプロッタの色調 褐色(10YR4/6)
黒色粒子の色調 黒褐色(10YR2/2)

pit4 層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	明褐色(7.5YR5/8)	普通	やや強い	黒色粒子10%含
2	黄褐色(10YR5/8)	やや強い	普通	なし

※黒色粒子の色調 黒褐色(10YR2/2)

第8図 11号住居跡実測図



第9図 11号住居跡出土遺物

第2表 11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・特徴	製作技法・施工方法	焼成・色調・胎土	備考
第9図 1	土師器 壺	口径：(7.9) 底径：— 残存高：4.7	壺口縁部から体部の 破片。	粘土紐作り。貼り付け口縁。 外面にハケ調整。 内面は接合部横方向ナデ。	並 浅黄橙 (10YR8/4) 石英1%含	床面直上

第3表 11号住居跡出土勾玉観察表

図版番号	器種	法量 (cm・g)	形態・特徴	製作技法	石材・色調	備考
第9図 2	石製勾玉	最大長：1.8 最大幅：1.2 最大厚：0.6 孔径：0.1 重量：1.8	背部は丸みを帯びており、腹部はコの字 状を呈する。 断面形も全体的に丸みを帯びている。 頸部にキスが見られる。 孔は中央左付近で不連続となっている。	両面穿孔。	石材：緑泥石 色調：オリブグリーン (7GY4/4.5)	覆土

12号住居跡〔第10図～第15図 P.L. 2-1～4・11-2〕

位置 調査区の北西側、C-2・3、E-2・3グリッドにかけて位置する。

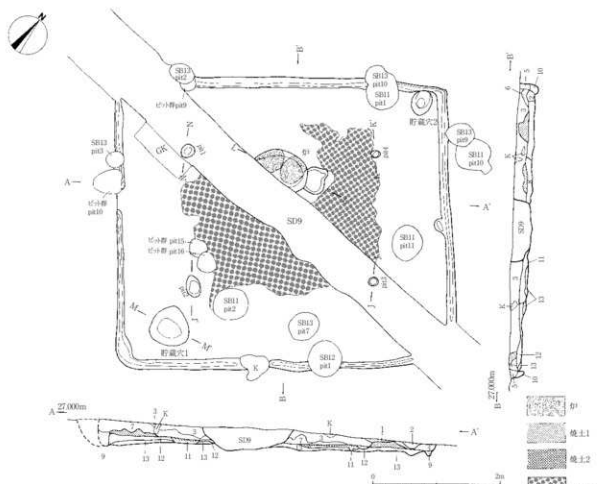
重複関係 全体が13号掘立柱建物跡、東側で11・12号掘立柱建物跡と重複する。また西隅から東隅に向かって9号溝と重複し、床面および炉の一部が破壊されている。

規模と構造 平面形は南北軸4.65m、東西軸5.13mの長方形を呈し、主軸方向はN-45°-Wである。壁は最深部で0.30mを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は西側の一部を除き、全体に巡っており、床面から深さ0.09m、幅0.11mを測り、底面は断面U字状を呈する。

床はほぼ平坦で、貼り床が北側の一部を除き全面に施されている。最も厚いところで0.30mであった。11・12・13層の3層が貼り床で、うち11層は硬化面であり一部被熱している。13層はほぼ全体に見られ、壁付近に12層が13層の上に面をなす。これは建て替えによるものではなく、床を平坦にするために施されたと考えられる。pit 1～4の柱穴で囲まれた範囲に硬化面が確認でき、東側と南側の一部が被熱していた。掘り方は西側壁際付近で深い。掘り方確認の際、北側・西側・南側の3ヶ所の壁付近で溝が確認できたが性格は不明である。

貼り床面からpit 2・4、重複する9号溝の底面からpit 1・3の計4本の柱穴を確認した。西隅付近のpit 1は直径0.21m、深さ0.35mを測り、覆土は2層に分かれる。南隅付近のpit 2は直径0.51m、深さ0.51mを測り、覆土は3層に分かれる。東隅付近のpit 3は直径0.14m、深さ0.31mを測り、覆土は2層に分かれる。北壁付近のpit 4は直径0.11m、深さ0.46mを測り、覆土は1層に褐色土、2層に黒褐色土の堆積がみられた。各柱穴の覆土は1・2層において対応している。

貯蔵穴 南隅付近と北隅付近に1ヶ所ずつ貯蔵穴を確認した。南側の貯蔵穴1は、直径0.61m、深さ0.61m

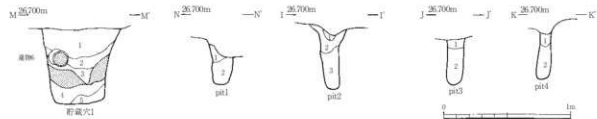


12号住居跡

層位	色調	粘性	締り	含有物
1	黒褐色(10YR2/3)	やや軟	やや強	なし
2	黒褐色(10YR2/3)	やや軟	普通	焼土粒子10%含
3	黒褐色(10YR3/2)	やや軟	強	焼土粒子10%含
4	暗褐色(10YR3/4)	なし	やや強	ロームブロック含
5	褐色(7.5YR4/4)	あり	やや強	ロームブロック2%含
6	黒褐色(10YR2/3)	やや軟	やや強	ローム粒子1%含
7	暗褐色(10YR3/3)	あり	普通	ロームブロック2% 焼土粒子1%含
8	褐色(7.5YR4/6)	なし	普通	焼土粒子7%含
9	暗褐色(10YR3/4)	なし	普通	ロームブロック2%含

層位	色調	粘性	締り	含有物
10	褐色(7.5YR4/4)	あり	普通	ロームブロック2%含 焼土粒子10%含
11	暗褐色(2.5YR3/6)	なし	強	焼土粒子5%含 ロームブロック1%含
12	黒褐色(10YR2/3)	なし	強	焼土粒子7%含 焼土粒子1%含
13	褐色(10YR4/6)	なし	強	なし
14	暗赤褐色(10R3/6)	なし	強	なし
15	暗赤褐色(2.5YR3/6)	なし	強	なし

※ローム粒子・ブロックの色調 褐色(10YR4/6)
焼土粒子・ブロックの色調 赤色(10R4/8)



貯蔵穴1

層位	色調	粘性	締り	含有物
1	暗褐色(10YR3/4)	あり	普通	ロームブロック7% 焼土ブロック2%含
2	褐色(7.5YR4/4)	あり	やや強	焼土ブロック1%含
3	褐色(7.5YR4/4)	あり	普通	焼土ブロック2%含
4	暗赤褐色(5YR3/2)	なし	やや強	焼土粒子2%含
5	暗褐色(7.5YR3/2)	普通	やや強	焼土粒子1%含
6	明赤褐色(5YR5/8)	なし	やや強	黒色粒子3%含

※ロームブロックの色調 褐色(10YR4/6)
焼土粒子・ブロックの色調 赤色(10R4/8)
暗褐色(10YR2/2)

pit1

層位	色調	粘性	締り	含有物
1	暗褐色(10YR3/4)	やや軟	強	ローム粒子5%含
2	褐色(10YR4/6)	あり	強	焼土粒子1%含

pit2

層位	色調	粘性	締り	含有物
1	暗褐色(10YR2/2)	なし	強	ローム粒子3% ロームブロック2%含
2	暗褐色(10YR3/4)	やや軟	強	ローム粒子5%含
3	褐色(10YR4/6)	あり	強	焼土粒子1%含

pit3

層位	色調	粘性	締り	含有物
1	ローム粒子・ブロックの色調 褐色(10YR4/6)	なし	強	ローム粒子5%含
2	暗褐色(10YR3/4)	やや軟	強	焼土粒子1%含
3	褐色(10YR4/6)	あり	強	なし

pit4

層位	色調	粘性	締り	含有物
1	焼土粒子の色調 赤色(10R4/8)	なし	強	ローム粒子5%含
2	褐色(10YR4/6)	あり	強	焼土粒子1%含

※ローム粒子・ブロックの色調 褐色(10YR4/6)
焼土粒子の色調 赤色(10R4/8)

第10図 12号住居跡実測図

で、5層と焼土層1層に分層され、4層と3層の間は焼土1がある。最下層の5層は黒褐色土、4層は赤褐色土であり、これらには焼土粒子が微量含まれ、焼土1の一部が混入したと考えられる。北隅付近の貯蔵穴2は、貼り床の下より検出され、直径0.24m、深さ0.21mを測る。覆土は、黒褐色土が堆積しており、貯蔵穴1のような焼土粒子などの含有は見られなかった。

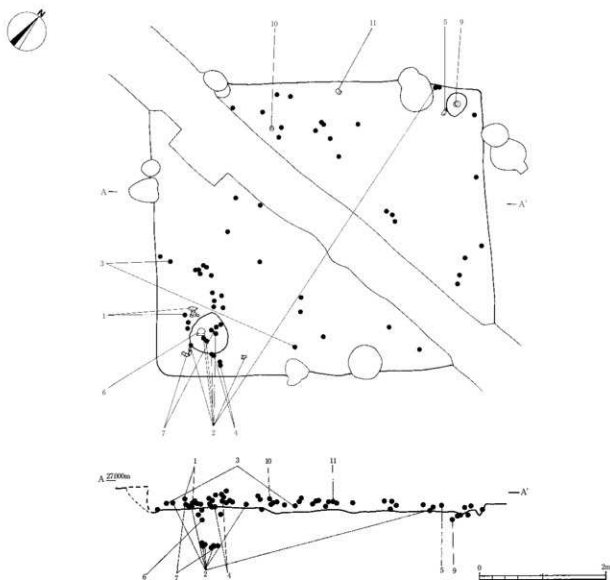
炉 炉は中央よりやや北側に位置し、南側が9号溝により破壊されている。残存する北側に2ヶ所の焼土範囲を確認した。規模は東西に0.84m、南北に0.46mで、深さは最深部で0.06mを測り、平面は楕円形を呈する。西側焼土範囲は東西0.30m、南北0.30m、厚さ0.07mを測る。東側焼土範囲は東西0.30m、南北0.42m、厚さ0.05mを測る。以上より、炉は2ヶ所の焼土範囲から窺うことができ、形状から地床炉と考えられる。炉の東側には被熱した土層が確認されているが、炉との直接的な関係は不明である。



第11図 12号住居跡炉実測図



第12図 12号住居跡焼土・炭化材分布状況

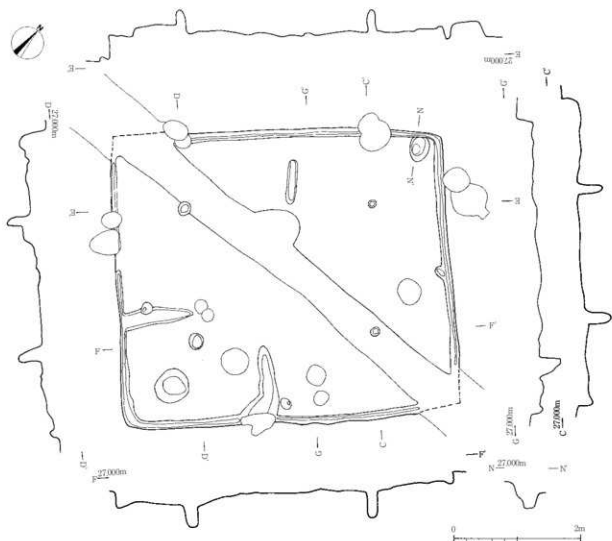


第13図 12号住居跡遺物出土状況

覆土 覆土は13層に分層され、焼土粒子・焼土ブロックを含む黒褐色土の3・7層がほぼ全体に堆積している。覆土には焼土層が2層あり、焼土1は壁際に堆積する5層や壁溝に堆積する9・10層の上に堆積し、住居の火災の際になんらかの形で入り込んだと考えられる焼土である。焼土2は被熱した床面である。炭化木材が遺構北側と東側の床面直上、もしくは焼土上で確認された。

遺物 遺物出土状況の全体的な傾向をみると、東隅付近では出土量が少なかったが、他の箇所では満遍なく出土し、南隅付近に比較的多い。遺物の器種は高坏や埴が多く、土師器小破片などが出土した。

図示し得た遺物の総数は11点である。高坏は5点(1・2・3・4・5)あり、1は床面から出土し、坏部の2は、床面・壁溝・貯蔵穴からそれぞれ小片が出土した。脚部の5は北隅の炭化木材近くの覆土から出土した。3は覆土中、4は床面から出土した。埴は4点(6・9・10・11)で、10は床面直上から、6は貯蔵穴1から焼土が詰まった状態で出土し、9は貯蔵穴2から出土した。体部の11は覆土中から出土した。その他に8が貯蔵穴1から出土し、7が覆土中から出土した。図示し得なかったが、他にも土師器が出土し



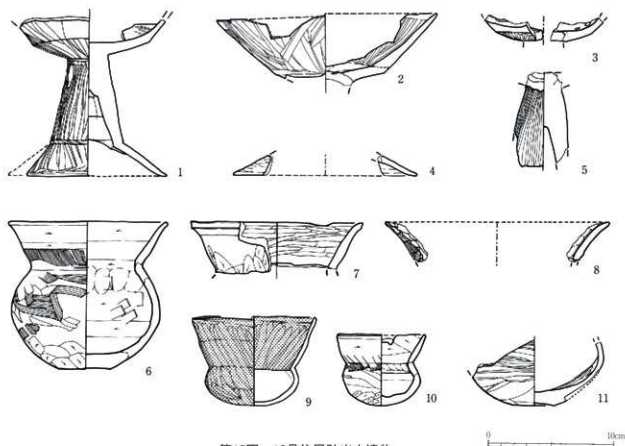
第14図 12号住居跡掘り方実測図

ている。

所見 本住居跡は、廃棄された後、壁際の褐色土層である5層、壁溝の9・10層が堆積した段階で火災が発生したと考えられる。この時点での堆積は壁際付近のみであったため、中央の床面の大部分が被熱したと考えられる。

時期について、高坏は1・3で裾部が台形状に開く点、埴は4・6で口径が体部径より大きく口縁部が長い点、体部が楕円形を呈する点より古墳時代前期後葉に属するものと考えられる(註1)。

(石丸 あゆみ)



第15図 12号住居跡出土遺物

第4表 12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・特徴	製作技法・施工方法	焼成・色調・胎土	備考
第15図 1	土篩器 高坏	口径：— 底径：(12.4) 残存高：12.5	坏部は外反する。 脚部は脚部下端に 向かってなだらかな ハの字状に開く。	粘土紐作り。 脚部内面に棒状の工具で押した穴が残る。 外面坏部から脚部にかけて縦方向ミガキ。内 面坏部横方向ミガキ。脚部横方向ヘラケスリ の後縦方向ナデ。裾部内外面横方向ナデ。	並 赤褐(5YR4/6) 石英3%。 白雲母1%含	床面直上
第15図 2	土篩器 高坏	口径：(17.4) 底径：— 残存高：5.6	高坏坏部破片。 坏部下端で屈曲し、 口縁部に向かって直 線的に延びる。	粘土紐作り。 外面はヘラケスリ後、口唇部横方向ナデ。 その後ハケ調整後、縦方向ミガキ。 接合部付近横方向ナデ。 内面は横方向ナデの後、縦方向ミガキ。	並 赤褐(5YR4/8) 石英2%。 白雲母1%含	床面直上
第15図 3	土篩器 高坏	口径：— 底径：— 残存高：2.0	高坏坏部破片。 坏部下端に稜を持つ。	粘土紐作り。 外面は稜以下に斜方向ミガキ。 接合部横方向ナデ。内面は横方向ミガキ。	並 褐(7.5YR4/4) 石英1%含	床面直上
第15図 4	土篩器 高坏	口径：— 底径：(14.6) 残存高：1.5	高坏脚部破片。 脚部下位はなだら かに開く。	粘土紐作り。 外面は縦方向のケスリの後、裾部横方向ナデ。 その後横方向ミガキ。内面横方向ナデ。	並 赤褐(5YR4/6) 石英1%含	床面直上
第15図 5	土篩器 高坏	口径：— 底径：— 残存高：7.4	高坏脚部破片。 脚部は柱状を呈する。	粘土紐作り。 ホゾ方式での坏部との接合部残存。外面縦方 向ミガキ。内面横方向ヘラケスリ。	並 黒(5YR3/1) 石英1%。 長石1%含	床面直上
第15図 6	土篩器 埴	口径：12.3 底径：4.1 器高：11.6	底部はやや上げ底 で、体部は球状を呈 する。口縁部は外 反する。	粘土紐作り。 外面は頸部縦方向のハケ調整後、横方向ナ デ。体部は縦・横・斜方向ハケ調整後、体部 下位から底部にかけて横方向ヘラケスリ。 内面は体部・口縁部横方向ナデ 頸部に指頭痕有り。	並 明赤褐 (2.5YR5/8) 石英7%、白雲母 1%、長石1%、 白色粗砂3%含	貯蔵穴1 覆土

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・特徴	製作技法・施文方法	焼成・色調・胎土	備考
第15図 7	土師器 甕	口径：(13.5) 底径：— 残存高：4.1	壺口縁部破片。 外反する。外面の 一部黒斑有り。	粘土紐作り。 口唇部は横方向ナデ。 外面は横方向ナデの後、縦方向ヘラケスリ。 内面は横方向ナデの後、横方向ミガキ。	良好 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 石英3%。 白雲母1%含	覆土
第15図 8	土師器 甕	口径：(17.6) 底径：— 残存高：3.1	壺口縁部破片。	粘土紐作り。 外面は斜方向のハケ調整後、口唇部横方向ナ デ。その後縦方向ミガキ。内面は横方向ナデ。	並 赤褐色(5YR5/6) 石英3%。 白雲母1%含	覆土一括
第15図 9	土師器 埴	口径：9.8 底径：1.9 器高：7.0	体部は扁平な球形 を呈する。口縁部 は2段の膨らみを有 する。赤彩されてい る。	粘土紐作り。 口唇部は内外面に横方向ナデ。 外面は体部ヘラケスリ後、体部外面・口縁部 内外面縦方向ミガキ。 内面は体部横方向ナデ。	並 赤褐色(5YR4/8) 石英4%。 白雲母1%。 白色粗砂3%含	貯蔵穴2 覆土
第15図 10	土師器 埴	口径：6.9 底径：— 器高：5.6	体部は球形を呈す る。	粘土紐作り。 外面頸部ハケ調整後、体部ヘラケスリ。その後 横・斜方向ミガキ。内面体部と口縁部内外面に 横方向ナデ。口縁部の一部に斜方向ナデ。	並 明褐色(7.5YR5/6) 石英4%。 白雲母2%。 白色粗砂3%含	床面直上
第15図 11	土師器 埴	口径：— 底径：3.1 残存高：5.2	底部は上げ底で、 体部は扁平な球形 を呈する。	粘土紐作り。 外面は横方向ミガキ。内面は底部付近ヘラケ スリの後、体部横方向ナデ。	良好 褐色(7.5YR4/6) 石英2%含	床面直上

13号住居跡〔第16・17図 P L, 3-1~2・12-1〕

位置 調査区南西E-6グリッドに位置し、本住居跡北東部では、1号墳を検出した。

規模と構造 激しい削平を受けたため、壁・床が存在せず、炉とピットのみ確認された住居跡である。規模・平面形状ともに確認できなかった。柱穴と考えたピットの位置関係から、建て替えが行われたと判断したため、主軸方向は古いピットの対応のN-5°Wから、新しいピットの対応のN-9°Wに変わる。

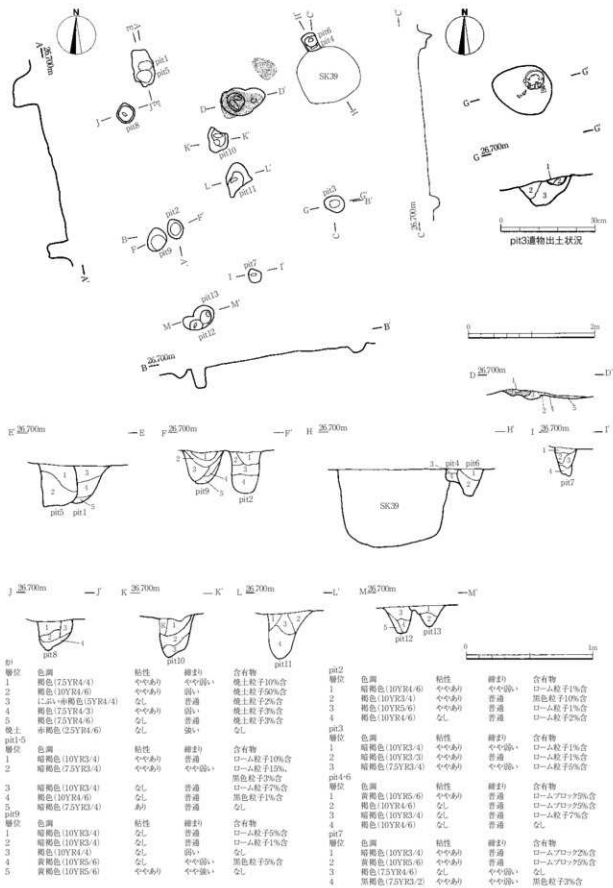
主柱穴は合計6本、4ヶ所で確認したが、そのうち北側のpit1・5とpit4・6の2ヶ所で切り合っており、建て替えの可能性がある。pit1-pit2-pit3-pit4という対応が古く、pit5-pit2-pit3-pit6という対応が新しい。それぞれの主柱穴の平面規模と遺構確認面からの深さは、北西のpit1で直径0.32m、深さ0.30mを測る。南西のpit2で直径0.26m、深さ0.38mを測る。南東のpit3で直径0.31m、深さ0.13mを測る。北東のpit4で直径0.21m、深さ0.11mを測る。pit5はpit1を切り、直径0.30m、深さ0.34mを測る。pit6はpit4を切り、直径0.23m、深さ0.21mを測る。pit3を除く主柱穴の覆土は自然堆積と判断した。古い対応のpit1・4の覆土は、暗褐色土と褐色土を中心に堆積している。新しい対応のピットのうちpit5・2・6の覆土は古い対応の覆土と似ており、暗褐色土・褐色土・黄褐色土が主に堆積している。pit3の覆土については、締まりを基準に3層まで分層しているが、締まりを除けば暗褐色の単一土層と考えても差し支えない堆積となっている。

出入り口は炉と柱穴の位置関係から南側想定し、中心軸からやや外れているが、住居の南側中央から検出されたpit7を出入り口に伴うピットと判断した。平面規模は直径0.18m、遺構確認面からの深さは0.23mを測る。覆土は、pit7が壁から近い位置にあったと考えられるために、主柱穴の覆土と4層のみ堆積が異なっているが、1層から3層までの堆積は対応している。

炉 炉は住居の主軸上、北壁に寄った位置に並列して2基確認された。平面規模と遺構確認面からの深さは、西側の炉で直径0.50m、深さ0.09mを測り、東側の炉は直径0.40m、深さ0.05mを測る。切り合い関係から、東側の炉が新しい。主軸の移動とは違だが、底面の土が被熱していたため、流れ込みなどではなく2基の炉と判断した。覆土の堆積状況としては西側の炉は褐色・赤褐色の土であるが、東側の炉はほぼ褐色土のみである。

その他のピット 主柱穴と出入り口に伴うピットのほかに、pit8からpit13まで6本のピットを検出した。そのうち、pit12・13において切り合い関係を確認した。切り合いの土層から、pit13が新しいと判断した。

覆土 確認できなかった。



第16図 13号住居跡実測図

pit8				
層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	明褐色(10YR7/6)	ややあり	普通	黒色プロッタ3%含
2	褐色(7.5YR4/6)	ややあり	やや強い	黒色粒子7%含
3	褐色(7.5YR4/1)	ややあり	普通	なし
4	明褐色(7.5YR5/6)	なし	強い	なし

pit10				
層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	暗褐色(10YR3/4)	なし	やや強い	ローム粒子1%含
2	褐色(10YR4/4)	なし	普通	ローム粒子1%含
3	褐色(10YR4/6)	なし	やや強い	ローム粒子3%含

pit11				
層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	黒褐色(7.5YR3/2)	ややあり	普通	ローム粒子10%含
2	暗褐色(10YR3/2)	ややあり	やや強い	ローム粒子3%含
3	暗褐色(10YR2/3)	ややあり	やや強い	ローム粒子1%含
4	灰黒褐色(10YR2/6)	なし	やや強い	黒色粒子1%含

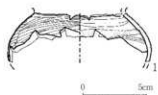
pit12・13				
層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	暗褐色(10YR3/3)	なし	やや強い	ロームプロッタ5%含
2	暗褐色(10YR3/3)	ややあり	普通	ローム粒子3%含
3	暗褐色(7.5YR3/4)	なし	やや強い	ローム粒子3%含
4	暗褐色(7.5YR3/4)	ややあり	普通	ローム粒子7%含
5	褐色(7.5YR4/6)	あり	普通	黒色プロッタ3%含

半焼土粒子の色調 赤褐色(2.5YR4/6)
 ローム粒子・プロッタの色調 褐色(10YR4/6)
 黒色粒子・プロッタの色調 黒褐色(10YR2/2)

遺物 pit3の東側、3層の上に土師器冢の胴部(1)が逆位で出土し、pit11の底面近くから土師器が出土している。その他にピットの覆土内から縄文土器が出土している。

本住居から出土した遺物で図示し得たものはpit3から出土した土師器冢1点のみである。pit11から出土した土師器は図示し得なかったが、ハケ目調整が施されている。

所見 炉の覆土の堆積状況から、本住居跡の建て替えに伴って、炉の位置の変更が行われたと考えられる。その他のピットに関しては、主柱穴の覆土と堆積状況が似ているものもあるが、住居床面から掘り込まれているのが分からないため、住居付近のピットとして扱うに留めた。本住居は出土遺物である冢(1)の胴部形状・調整から、古墳時代前期後半に営まれていたものと考えられる(註1)。



第17図 13号住居跡出土遺物

(長野 友洋)

第5表 13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	形態・特徴	製作技法・施工方法	焼成・色調・胎土	備考
第17図 1	土師器 冢	口径：— 底径：— 残存高：3.9	冢体部破片。 球形を呈する。	粘土紐作り。 外面は横方向ミガキ。内面は大きい単位の後、小さい単位での横方向ミガキ。	並 にぶい赤褐色(5YR4/4) 石英1%、白雲母2%含	pit3 覆土

5号住居跡(第18・19図 P.L. 3-3・12-2)

位置 調査区南西隅、A-7、B-7グリッドにかけて位置する。本遺構は2001年度の調査によって北東隅部の記録を作成した遺構である。本調査では、前回の未調査範囲の西側を0.80m拡張して一部を調査した。

炉 前回調査の際に認識した硬化面と同一の標高面で1基確認された。平面は楕円形のようなのだが、現在の農道下に未調査区があり西隅は未調査部分に残るため、正確な規模は不明である。床面を僅かに掘り窪め、0.08mほどの厚さで粘土を貼り付け、炉床面としている。地床炉とは異なり、焼き締まり程度は弱く軟質で断面観察の作業は容易であった。

貯蔵穴 北壁際に1基確認した。平面規模は、東西1.00m、南北0.60m、確認面からの深さ0.50mの長楕円形を呈する。覆土は暗褐色土を主体に4層から構成され、土師器を2点出土した。

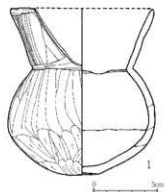
遺物 覆土中から縄文土器4点、土師器5点、炉の南側から土師器が出土している。

(窪田 恵一)



層位	色調	含有物	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	炭化物	表土・耕作土
2	黒褐色(10YR2/2)	ローム粒子	
3	黒褐色(10YR2/3)	炭化物粒子	ローム粒子
4	黒褐色(7.5YR2/3)	炭化物粒子	ローム粒子
5	暗褐色(7.5YR3/4)	ローム粒子	
6	黒褐色(10YR2/3)	ローム粒子	
7	暗褐色(7.5YR3/3)	ロームブロック	
8	暗褐色(7.5YR3/4)	ロームブロック	
9	褐色(7.5YR3/4)	ロームブロック	
10	明赤褐色(2.5YR5/6)		
11	黒褐色(7.5YR3/2)	ローム粒子	縄文時代の遺物を含む

第18図 5号住居跡実測図



第19図 5号住居跡出土遺物

第6表 5号住居跡出土遺物観察表

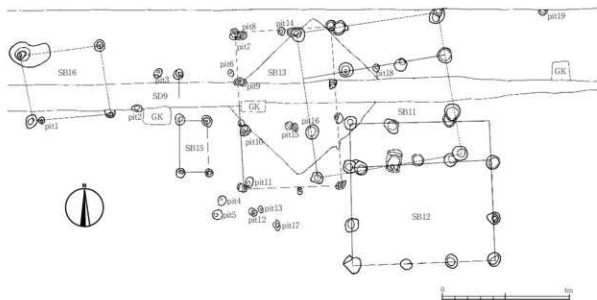
図版番号	器種	法量 (cm)	形態・特徴	製作技法・施文方法	焼成・色調・胎土	備考
第19図 1	土師器 罎	口径：(10.9) 底径：2.5 器高：13.1	底部は上げ底で、 やや扁平な球形 を呈する。	粘土練作り。 内外面とも口唇部横方向ナデ。外面は口 縁部から体部中位縦方向ヘラムガキ後、 体部下位縦方向ヘラケズリ。内面横方向 ナデ。口縁部は縦方向ミガキ。	並 橙(7.5YR6/6) 石英3%、 白雲母1%含	覆土一括

3 掘立柱建物跡

各掘立柱建物跡の新旧関係と時期については下図のとおりである。



第20図 掘立柱建物跡建物新旧関係図



第21図 調査区西北部堀立柱建物跡検出状況

11号掘立柱建物跡〔第22・23図 P.L.4・12-3〕

位置 調査区西部北西側、D-2・3、F-2・3、G-2・3グリッドにかけて位置する。

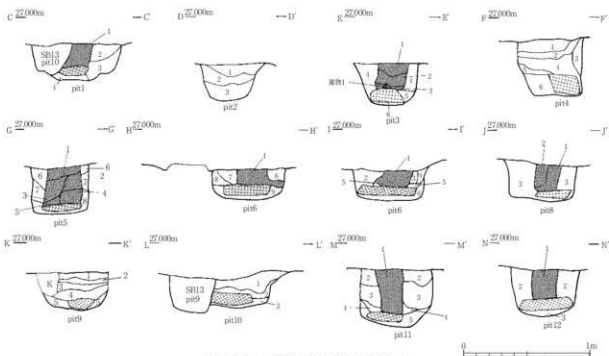
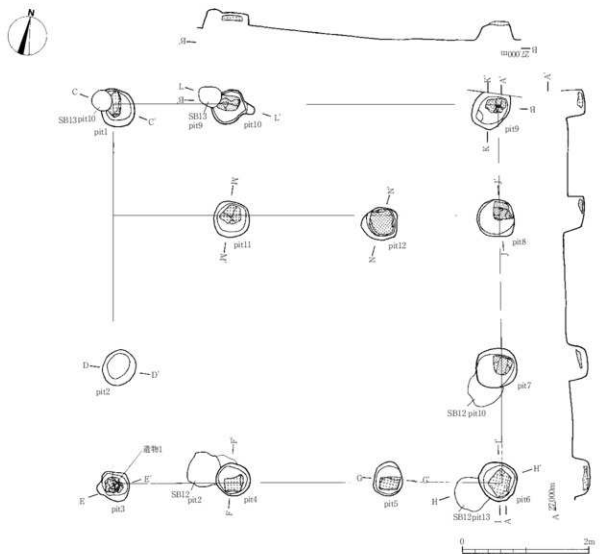
重複関係 12・13号掘立柱建物跡と重複する。

規模 桁行6.16m、梁行6.00mの3間×3間で、平面は正方形を呈する。身舎は桁行6.16m、梁行4.20mの3間×2間の構造となっている。また、北側に1間(1.74m)の庇が延びている。主軸方向はN-86°-Wである。

柱穴 長軸0.52～0.70m、短軸0.46～0.66m、遺構確認面からの深さは0.23～0.45mである。柱穴間寸法は桁行1.20～1.92m、梁行1.20～1.80mである。pit4～6・10・12には雲母片岩が、pit3・7～9・11には砂岩が版築の上に据えられており、礎石として利用されていた。礎石の長径・短径・厚さ・重さはほぼ同一であった。また礎石の下面にはいずれも加工痕が見られ、pit13の礎石のみ上面に加工痕が見られた。礎石面の標高は全体で26.40～26.62mで、北側から東側のpit1・6・8～10・12で26.52～26.62m、西側から南側のpit3・5・11で26.40～26.45mをそれぞれ測る。全体的に礎石面の標高が低い東側の地形は、谷に向かって傾斜をしている。

覆土 礎石の入っていたpit1・3～6・8・11・12で柱痕を確認した。pit1では4層を確認した。1層が柱痕の層で、2・3層が詰め土の層、礎石の下の4層はやや強い締まりがあった。pit3では5層を確認した。4層は詰め土の層で、1～3層は柱痕の層、5層は版築の層である。pit5では8層を確認した。6・7層が詰め土の層で、1～5層が柱痕の層となっており、8層が版築の層となっている。pit6では9層を確認した。1層が柱痕の層で、礎石の下にある9層は版築の層である。pit8では3層を確認した。3層が詰め土の層で、1・2層が柱痕の層である。pit11では5層を確認した。2・3・4層が詰め土の層で、1層が柱痕の層、5層は版築の層であった。pit12では3層を確認した。2層が埋め土の層で、1層が柱痕の層である。

遺物 pit3の礎石上から銅銭(1)が1点と、各ピットから縄文土器・土師器が数点出土している。出土した銅銭の表側には元豊通寶(初铸1078年)の銘があり磨耗している。裏側は磨耗が激しい。縄文土器・土師器はいずれも小破片のため図示し得ない。



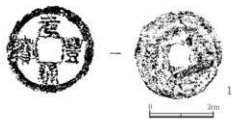
第22图 11号掘立柱建物跡实测图

pit1 解位		色調	粘性	締まり	含有物	2	褐色 (10YR4/6)	ややあり	普通	黒色粒子15%含					
1	褐色 (10YR4/4)	なし	普通	普通	ロームブロック7%含	3	褐色 (10YR4/6)	なし	強い	ロームブロック7%含					
2	褐色 (10YR4/6)	なし	やや弱い	普通	ロームブロック10%含	4	褐色 (10YR4/6)	なし	やや強い	ローム粒子3%含					
3	暗褐色 (10YR3/6)	ややあり	弱い	普通	ロームブロック15%含	5	暗褐色 (5YR2/4)	ややあり	やや強い	なし					
4	暗褐色 (10YR3/3)	ややあり	やや強い	普通	ロームブロック3%含	6	褐色 (10YR4/6)	なし	強い	なし					
						7	褐色 (10YR4/6)	普通	強い	黒色粒子20%含					
						8	暗褐色 (10YR3/4)	なし	弱い	黒色粒子2%含					
						9	黄褐色 (10YR5/6)	なし	やや弱い	なし					
pit2 解位		色調	粘性	締まり	含有物										
1	黒褐色 (10YR2/3)	なし	強い	普通	ローム粒子10%含	pit8 解位									
2	褐色 (10YR4/4)	なし	強い	普通	黒色粒子7%含	1	褐色 (10YR4/4)	ややあり	やや弱い	普通	褐色 (10YR4/6)	粘性	締まり	含有物	
3	暗褐色 (10YR3/4)	ややあり	強い	普通	ロームブロック10%含	2	暗褐色 (10YR3/3)	ややあり	やや弱い	普通	褐色 (10YR4/6)	ややあり	やや強い	普通	ローム粒子15%含
						3	褐色 (10YR4/6)	普通	普通	普通	褐色 (10YR4/6)	ややあり	やや強い	普通	ローム粒子2%含
pit3 解位		色調	粘性	締まり	含有物	pit9 解位									
1	褐色 (10YR4/4)	ややあり	普通	普通	ロームブロック7%含	1	褐色 (10YR4/6)	なし	強い	なし					
2	黒褐色 (10YR2/3)	普通	やや弱い	普通	ローム粒子2%含	2	暗褐色 (5YR2/3)	なし	やや強い	なし					
3	暗褐色 (10YR3/4)	普通	普通	普通	ロームブロック1%含	3	褐色 (10YR4/4)	なし	強い	黒色粒子20%含					
4	褐色 (10YR4/6)	普通	普通	普通	なし	4	暗褐色 (10YR3/2)	ややあり	やや強い	ローム粒子5%含					
5	暗褐色 (10YR3/3)	普通	やや弱い	普通	ロームブロック2%含	5	暗褐色 (10YR3/2)	ややあり	やや強い	ローム粒子3%含					
6	褐色 (10YR4/6)	あり	強い	なし	なし										
pit4 解位		色調	粘性	締まり	含有物	pit10 解位									
1	黒褐色 (7.5YR2/2)	ややあり	普通	普通	ロームブロック3%含	1	暗褐色 (10YR2/3)	なし	やや弱い	普通	褐色 (10YR4/6)	粘性	締まり	含有物	
2	暗褐色 (10YR3/4)	ややあり	やや弱い	普通	ロームブロック15%含	2	暗褐色 (10YR2/3)	なし	普通	普通	褐色 (10YR4/6)	ややあり	やや強い	普通	ローム粒子3%含
3	暗褐色 (10YR3/3)	ややあり	弱い	普通	ロームブロック7%含	3	暗褐色 (10YR2/4)	なし	普通	普通	褐色 (10YR4/6)	ややあり	やや強い	普通	ローム粒子1%含
4	暗褐色 (10YR2/2)	あり	弱い	普通	ロームブロック2%含	4	暗褐色 (10YR3/4)	なし	やや強い	普通	褐色 (10YR4/6)	ややあり	やや強い	普通	ローム粒子3%含
5	暗褐色 (10YR3/4)	あり	弱い	普通	ロームブロック2%含										
6	褐色 (7.5YR4/2)	なし	弱い	なし	なし										
pit5 解位		色調	粘性	締まり	含有物	pit11 解位									
1	暗褐色 (10YR3/3)	なし	普通	普通	ローム粒子15%含	1	黒褐色 (10YR2/2)	なし	やや弱い	普通	褐色 (10YR4/6)	粘性	締まり	含有物	
2	黒褐色 (10YR2/2)	普通	弱い	普通	ローム粒子5%含	2	暗褐色 (10YR3/2)	なし	普通	普通	褐色 (10YR4/6)	ややあり	やや強い	普通	ローム粒子1%含
3	暗褐色 (10YR2/3)	普通	やや弱い	普通	ローム粒子7%含	3	暗褐色 (10YR3/3)	ややあり	やや弱い	普通	褐色 (10YR4/6)	ややあり	やや強い	普通	ローム粒子2%含
4	褐色 (10YR4/4)	ややあり	強い	普通	ローム粒子10%含	4	暗褐色 (10YR2/2)	あり	やや強い	普通	褐色 (10YR4/6)	ややあり	やや強い	普通	ローム粒子10%含
5	黒褐色 (10YR2/2)	あり	やや弱い	普通	ローム粒子2%含	5	暗褐色 (10YR2/2)	ややあり	強い	普通	褐色 (10YR4/6)	ややあり	やや強い	普通	ローム粒子15%含
6	褐色 (10YR4/4)	なし	やや強い	普通	黒色粒子10%含										
7	暗褐色 (10YR3/3)	なし	やや強い	普通	ロームブロック3%含	pit12 解位									
8	暗褐色 (10YR2/2)	ややあり	普通	普通	ロームブロック7%含	1	褐色 (7.5YR4/4)	ややあり	普通	普通	褐色 (10YR4/6)	粘性	締まり	含有物	
pit6 解位		色調	粘性	締まり	含有物	2	暗褐色 (10YR2/2)	あり	やや弱い	普通	褐色 (10YR4/6)	ややあり	やや強い	普通	黒色ブロック7%含
1	黒褐色 (10YR2/3)	なし	普通	普通	ロームブロック3%含	3	褐色 (7.5YR4/4)	ややあり	普通	普通	褐色 (10YR4/6)	ややあり	やや強い	普通	黒色ブロック3%含

※ローム粒子・ブロックの色調 褐色 (10YR4/6)
黒色粒子の色調 黒褐色 (10YR2/2)

所見 時期は、重複する12号掘立柱建物跡と13号掘立柱建物跡とのピットの切り合い関係から、12号掘立柱建物跡よりも新しく、13号掘立柱建物跡よりも古いので、13世紀中頃から後半と考えられる。建物の性格は不明であるが、12号掘立柱建物跡と同様に、北庇を伴う建物であることと、規模がほぼ同じであることから、12号掘立柱建物跡の建て替えであったと考えられる。加工しやすい雲母片岩と砂岩が使用されていた礎石は規格を描いていた可能性がある。

(石井 聖美)



第23図 11号掘立柱建物跡 pit3出土遺物

第7表 11号掘立柱建物跡 pit 3 出土銭貨観察表

図版番号	銭貨名	計測値(mm・g)							初鋳年	材質	備考
		外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字厚	重量			
第23図 1	元豊通寶	24.0	18.5	8.0	6.0	0.7	0.4	2.7	1078	銅	pit3 覆土

12号掘立柱建物跡〔第24図 P.L. 5-1〕

位置 調査区北西部、E-2・4、F-2～4グリッドにかけて位置する。

重複関係 11号掘立柱建物跡と重複する。

規模 桁行6.14m、梁行6.00mの3間×3間で、平面は方形を呈する。身舎は桁行6.14m、梁行4.20mで3間×2間であり、庇は北側に1間(1.80m)延びている。主軸方向はN-89°-Wである。

柱穴 長軸0.43～1.00m、短軸0.43～0.56m、遺構確認面からの深さは0.13～0.43mである。柱穴開寸法は桁行1.31～1.34m、梁行1.24～1.80mである。pit1・2・6～9・11・13に礎石が検出された。礎石の材質は雲母片岩であり、表面に加工痕を確認した。礎石面の標高は26.57～26.84mである。pit1の礎石は割られ、一方を反転させて据えられていた。礎石の下には版築が確認されており、厚さは0.01～0.27mである。庇の一部をなすと考えられる北東角のピットは検出できなかった。

覆土 pit6～9・11で柱痕を確認した。pit7・9では3層を確認し、1層は柱痕の層で、2層は詰め土であるとされる。3層は版築の層である。pit6・8では4層を確認した。pit9同様の堆積をしているが、詰め土の層は2層に分かれる。pit11では6層を確認した。2・5層は詰め土の層で、6層は版築の層である。4層が柱痕の層である。各ピットの版築の層は、ロームブロックを主体に黒色粒子が混入している締まりの強い層である。

遺物 縄文土器が数点出土しているが、いずれも小破片であり、図示し得ない。

所見 ピットの切り合い関係から、11号掘立柱建物跡より以前に構築されている。また、主軸が9号溝とほぼ平行するため、同時期の遺構と考えられ、9号溝から出土した土師質土器より13世紀前半から中頃に構築されたと考えられる。版築に関しては、柱穴を掘削する際に、かきだした土を固め、施されたと考えられる。礎石に関しては、礎石の裏面に加工痕が確認でき、厚さ、重さ、大きさがほぼ同一であることから、ある程度の規格性があつたと考えられる。pit1の礎石は人為的に割られ、一方が反転して据えられていたが、その目的は不明である。

(三原 翔吾・新津 尚之)

13号掘立柱建物跡〔第25図 P.L. 5-2〕

位置 調査区北西側、D-2・3、E-2・3グリッドにかけて位置する。

重複関係 12号住居跡、11号掘立柱建物跡と重複する。

規模 桁行6.40m、梁行4.00mの3間×2間で、平面は長方形を呈する。主軸方向はN-1°-Wである。

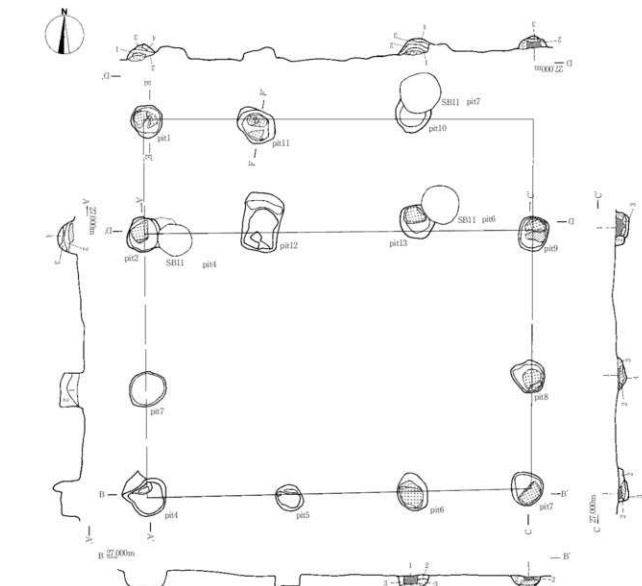
柱穴 長軸0.26m～0.54m、短軸0.16m～0.44m、遺構確認面からの深さは0.16m～0.42mである。柱穴開寸法は桁行1.12m～2.40m、梁行1.12m～2.12mである。

覆土 pit4・9で柱痕を確認した。pit4では5層を確認した。3層は柱痕の層であつた。pit9では8層を確認した。3～7層は詰め土の層で、2層は柱痕の層である。8層にはやや強い締まりがあつた。

遺物 縄文土器と土師質土器が数点出土したが、小破片のため図示し得ない。

所見 時期は、重複する11号掘立柱建物跡のピットとの切り合い関係から、11号掘立柱建物跡よりも新しいため、13世紀後半から14世紀前半と考えられる。性格は不明である。

(石井 聖美)

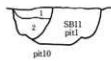
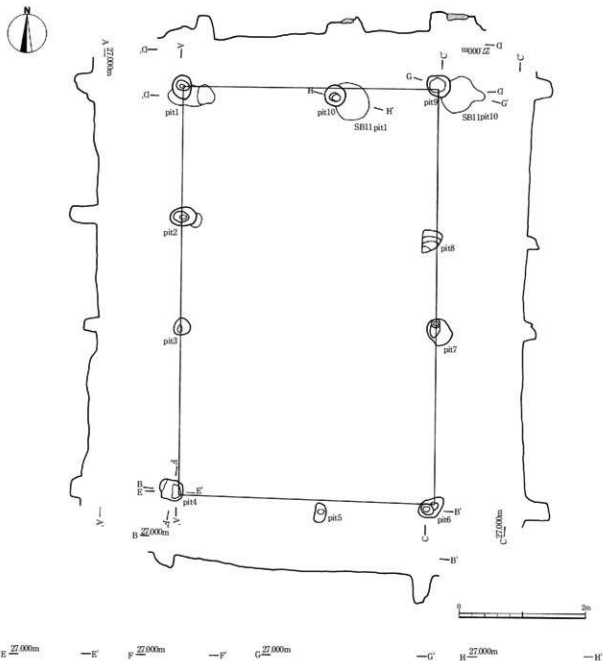


pit1 層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	黒褐色(10YR3/2)	なし	やや強い	ローム粒子1%含
2	黒褐色(7.5YR2/3)	なし	強い	ローム粒子1%含
3	黒褐色(7.5YR2/3)	なし	強い	ローム粒子7%含
4	褐色(7.5YR4/3)	なし	普通	ローム粒子1%含
5	黒褐色(7.5YR3/3)	なし	強い	ローム粒子3%含
pit2 層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	暗褐色(7.5YR3/3)	ややあり	強い	ロームブロック20%含
2	暗褐色(7.5YR3/4)	ややあり	強い	ローム粒子10%含
3	黒褐色(7.5YR3/2)	ややあり	強い	ローム粒子5%含
4	褐色(10YR4/6)	なし	強い	黒色粒子15%含
pit3 層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	暗褐色(7.5YR3/3)	なし	強い	ロームブロック10%含
2	暗褐色(7.5YR3/4)	なし	強い	ロームブロック15%含
pit6 層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	黒褐色(10YR2/3)	なし	普通	ローム粒子15%含
2	褐色(10YR4/4)	なし	普通	黒色粒子10%含
3	暗褐色(10YR3/3)	ややあり	普通	ロームブロック5%含
4	暗褐色(10YR3/2)	なし	強い	ローム粒子5%含
pit7 層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	黒褐色(10YR2/3)	なし	普通	黒色粒子10%含
2	黒褐色(10YR2/2)	なし	普通	ローム粒子10%含
3	褐色(10YR4/6)	なし	強い	黒色粒子10%含
pit8 層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	黒褐色(10YR2/3)	なし	普通	ローム粒子5%含
2	暗褐色(7.5YR3/3)	なし	強い	ローム粒子25%含
3	暗褐色(10YR3/3)	なし	普通	ロームブロック10%含
4	暗褐色(10YR4/4)	なし	やや強い	ロームブロック7%含
5	暗褐色(7.5YR3/4)	なし	強い	ローム粒子5%含

pit9 層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	黒褐色(10YR2/3)	なし	やや強い	ローム粒子10%含
2	暗褐色(10YR3/3)	ややあり	強い	ロームブロック15%含
3	黒褐色(7.5YR3/2)	なし	強い	ローム粒子5%含
pit11 層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	黒褐色(10YR2/3)	なし	やや強い	なし
2	暗褐色(10YR4/6)	なし	普通	普通
3	暗褐色(7.5YR3/3)	普通	普通	ローム粒子10%含
4	暗褐色(10YR3/4)	なし	普通	普通
5	暗褐色(10YR3/4)	ややあり	普通	ロームブロック7%含
6	黒褐色(10YR2/3)	なし	やや強い	なし
pit13 層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	暗褐色(7.5YR3/2)	なし	強い	ローム粒子15%含
2	暗褐色(7.5YR3/3)	なし	強い	ローム粒子25%含
3	暗褐色(7.5YR3/4)	なし	強い	ロームブロック5%含
4	黄褐色(10YR5/6)	なし	強い	黒色粒子10%含

※ローム粒子・ブロックの色調 暗褐色(10YR4/6) 黒色粒子の色調 暗褐色(10YR2/2)

第24図 12号掘立柱建物跡実測図



pit4

層位

層位	色調	粘性
1	暗褐色(10YR3/3)	なし
2	黄褐色(10YR5/6)	やや強い
3	暗褐色(10YR3/4)	なし
4	暗色(10YR4/6)	あり
5	暗褐色(10YR3/4)	なし

pit10

層位

層位	色調	粘性
1	暗褐色(10YR3/4)	なし
2	暗褐色(10YR3/4)	やや強い

層位	色調	粘性	締り	含有物
1	暗褐色(10YR3/3)	やや強い	なし	なし
2	暗褐色(10YR3/4)	やや強い	なし	黒色粒子10%含
3	暗褐色(10YR2/2)	なし	なし	ロームブロック7%含
4	暗褐色(10YR2/2)	なし	なし	黒色粒子13%含
5	暗褐色(10YR3/4)	普通	なし	ロームブロック10%含

pit9

層位

層位	色調	粘性	締り	含有物
1	褐色(10YR4/4)	ややあり	普通	ロームブロック7%含
2	暗褐色(10YR2/2)	ややあり	弱い	ロームブロック7%含
3	暗褐色(10YR3/3)	なし	やや強い	ローム粒子9%含
4	暗褐色(10YR2/2)	なし	やや強い	ロームブロック10%含
5	暗褐色(10YR3/4)	ややあり	普通	ローム粒子1%含
6	褐色(10YR4/6)	なし	普通	黒色粒子10%含
7	暗褐色(10YR2/3)	ややあり	普通	ローム粒子5%含
8	黄褐色(10YR3/3)	なし	やや強い	ローム粒子9%含

※ローム粒子・ブロックの色調 褐色(10YR4/6)
黒色粒子の色調 暗褐色(10YR2/2)

第25図 13号掘立柱建物跡実測図

15号掘立柱建物跡〔第26図〕

位置 調査区北西部北壁側、B-2・3、C-2・3、D-2・3グリッドにかけて位置する。

重複関係 9号溝と重複する。

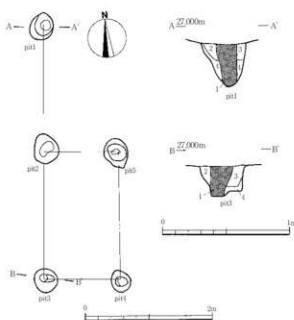
規模 桁行4.00m、梁行1.20mを測り、平面は南北に長い長方形を呈する2間×1間の建物跡である。主軸方向はN-1°-Wである。

柱穴 長軸は0.35～0.37m、短軸0.15～0.21m、遺構確認面からの深さは0.22～0.32mである。柱穴間寸法は桁行が2.00m、梁行が1.00mである。pit 1とpit 5の間に柱穴は検出できなかった。柱痕はpit 1・3で確認された。底面では柱を据えていたと考えられる硬化面は確認できなかった。

覆土 pit 1は4層を確認した。1層は柱痕の層であり、2～4層が柱を固定した詰め土である。pit 3は4層を確認した。1層は柱痕の層であり、2～4層が柱を固定した詰め土である。他のピットは自然堆積である。

遺物 出土していない。

所見 時期は、13号掘立柱建物跡と主軸方向がほぼ同じであるので、13号掘立柱建物跡と同じく、13世紀後半から14世紀前半であると考えられる。また13号掘立柱建物跡と近接しているの、13号掘立柱建物跡の付属施設であった可能性がある。



pit1		pit3		pit5	
層位	色調	粘性	締まり	含有物	
1	褐色 (10YR4/4)	ややあり	普通	ローム粒子3%含	
2	灰褐色 (10YR3/2)	ややあり	やや強い	ローム粒子7%含	
3	灰褐色 (10YR3/4)	ややあり	普通	ローム粒子3%含	
4	灰褐色 (10YR4/3)	ややあり	普通	ローム粒子5%含	
pit3		pit5		pit1	
層位	色調	粘性	締まり	含有物	
1	明褐色 (7.5YR5/6)	ややあり	やや強い	ローム粒子7%含	
2	灰褐色 (10YR3/3)	普通	やや強い	ローム粒子10%含	
3	褐色 (7.5YR4/3)	普通	普通	なし	
4	褐色 (7.5YR4/4)	ややあり	やや強い	なし	

●ローム粒子の色調 褐色 (10YR4/6)

第26図 15号掘立柱建物跡実測図

(近藤 貴徳)

16号掘立柱建物跡〔第27図〕

位置 調査区北西部北壁側、B-2・3、C-2・3グリッドにかけて位置する。

重複関係 9号溝と重複する。

規模 桁行3.40m、梁行2.80mの1間×1間の建物跡で、平面は長方形を呈する。主軸はN-88°-Wである。

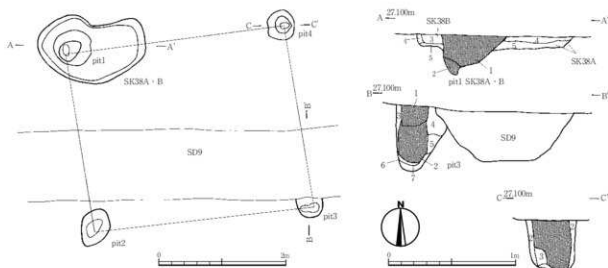
柱穴 長軸0.40～0.44m、短軸0.40～0.46m、遺構確認面からの深さは0.40～0.42mである。柱穴間寸法は桁行3.40～3.50m、梁行2.80～2.90mである。柱痕はpit 3・4で確認できた。柱を据えられていたと考えられる硬化面は強く縮まり、全てのピットで確認できた。

覆土 pit 3は7層を確認した。1・2層が柱痕の層であり、3・4・5層は柱を固定する詰め土である。pit 4は4層を確認した。1層は柱痕の層である。2層は柱を固定する詰め土である。

遺物 縄文土器が1点出土しているが、小破片のため図示し得ない。

所見 pit 3が9号溝に切られており、9号溝の時期が13世紀前半から中頃と考えられているので13世紀前半以前と考えられるが、詳細な時期・性格は不明である。

(近藤 貴徳)



pit 1 : 38号土坑A・B

層位	色調	粘性	織まり	含有物
1	黒褐色(10YR3/4)	普通	なし	なし
2	黒褐色(10YR3/2)	普通	普通	ロームブロック3%含
3	黒褐色(10YR3/3)	普通	やや強い	なし
4	褐色(7.5YR4/3)	普通	やや強い	なし
5	黄褐色(10YR5/8)	普通	やや強い	なし

pit 4

層位	色調	粘性	織まり	含有物
1	明褐色(10YR3/4)	ややあり	普通	ロームブロック10%含
2	褐色(7.5YR4/4)	ややあり	普通	ローム粒子3%
3	明褐色(10YR3/4)	普通	なし	ロームブロック9%含
4	褐色(10YR4/4)	普通	やや強い	なし

pit 3

層位	色調	粘性	織まり	含有物
1	黒褐色(7.5YR2/2)	ややあり	やや強い	ロームブロック1%含
2	黒褐色(7.5YR2/1)	あり	やや強い	ロームブロック2%含
3	黒褐色(10YR3/4)	ややあり	強い	ロームブロック7%含
4	黒褐色(10YR3/4)	ややあり	強い	なし
5	黒褐色(10YR2/2)	あり	普通	なし
6	黒褐色(10YR3/2)	あり	やや強い	なし
7	黒褐色(10YR3/4)	あり	やや強い	なし

※ローム粒子・ブロックの色調(10YR4/6)

第27図 16号掘立柱建物跡・38号A・B土坑実測図

第8表 11号掘立柱建物跡ピット観察表

pit 番号	平面形	計測値 (cm)			備考
		長径	短径	深さ	
1	円形	56	50	29	礎石レベル26.630m 版築3cm
2	円形	58	50	28	
3	円形	52	40	32	礎石レベル26.642m 版築2~9cm
4	円形	52	50	39	礎石レベル26.450m 版築1cm
5	円形	52	46	36	礎石レベル26.400m 版築2~15cm
6	円形	62	60	23	礎石レベル26.550m 版築4~10cm
7	円形	70	66	33	礎石レベル26.510m
8	円形	62	56	29	礎石レベル26.520m 版築3cm
9	楕円形	68	54	30	礎石レベル26.560m 版築1~7cm
10	円形	60	48	29	礎石レベル26.590m 版築3~5cm
11	円形	60	54	45	礎石レベル26.450m 版築3~11cm
12	円形	58	50	37	礎石レベル26.560m 版築5cm

第10表 13号掘立柱建物跡ピット観察表

pit 番号	平面形	計測値 (cm)			備考
		長径	短径	深さ	
1	楕円形	54	30	23	
2	楕円形	42	30	42	
3	円形	26	24	16	
4	楕円形	52	44	18	柱痕
5	楕円形	30	16	26	
6	楕円形	46	22	39	
7	楕円形	42	30	25	
8	楕円形	36	30	33	
9	円形	36	34	23	柱痕
10	楕円形	30	20	29	

第9表 12号掘立柱建物跡ピット観察表

pit 番号	平面形	計測値 (cm)			備考
		長径	短径	深さ	
1	円形	52	47	43	礎石レベル26.710m 版築11cm
2	円形	56	51	27	礎石レベル26.770m 版築17cm
3	円形	59	53	26	埋土を受ける。版築残存厚27cm
4	不整形	63	55	27	埋土を受ける
5	円形	43	43	16	埋土を受ける
6	楕円形	61	49	21	礎石レベル26.710m
7	楕円形	56	53	19	礎石レベル26.850m
8	楕円形	53	49	13	礎石レベル26.730m 版築1cm
9	円形	57	52	21	礎石レベル26.690m 版築6cm
10	不整形	64	52	34	埋土を受ける
11	不整形	66	49	38	礎石レベル26.570m 版築5cm
12	不整形	100	56	19	埋土を受ける
13	円形	53	53	25	礎石レベル26.840m

第11表 15号掘立柱建物跡ピット観察表

pit 番号	平面形	計測値 (cm)			備考
		長径	短径	深さ	
1	円形	35	40	33	柱痕
2	不整形	50	38	25	
3	円形	43	35	25	柱痕
4	円形	32	30	13	
5	円形	42	30	10	

第12表 16号掘立柱建物跡ピット観察表

pit 番号	平面形	計測値 (cm)			備考
		長径	短径	深さ	
1	円形	57	50	40	硬化面有り
2	不整形	60	44	43	
3	円形	33	31	52	硬化面有り
4	円形	40	32	40	硬化面有り

第13表 11号掘立柱建物跡礎石観察表

pit番号	計測値 (cm・kg)				平面形	表面	裏面	備考
	長径	短径	厚さ	重さ				
pit1	31	24	7.5	11.5	長方形		加工痕有り	
pit3	32	29	7.5	10	方形		加工痕有り	砂岩
pit4	30.5	22.5	8	12.5	方形		加工痕有り	
pit5	30	23	7.7	10.5	方形	赤色を呈する	加工痕有り・赤色を呈する	
pit6	36.5	32	7	18	五角形		加工痕有り	
pit7	29	26	6.5	8.5	正方形		加工痕有り	砂岩・3つに割れる
pit8	27	23	6	9	正方形		加工痕有り	砂岩
pit9	27	19	8	7.5	方形		加工痕有り	砂岩・4つに割れる・角に加工痕
pit10	41	24	5	7	台形		加工痕有り	
pit11	31	25	11	14	楕円形		加工痕有り	砂岩・3つに割れる
pit12	44	34	8	21.5	楕丸三角形	加工痕有り	加工痕有り・赤色を呈する	

第14表 12号掘立柱建物跡礎石観察表

pit番号	計測値 (cm・kg)				平面形	表面	裏面	備考
	長径	短径	厚さ	重さ				
pit1	35.5	33	6.5	12	楕丸三角形		加工痕有り	裏表逆に入る
pit2	34	26	9	9	不定形		加工痕有り	やや赤い
pit6	40.5	27	7.5	16	楕丸三角形		加工痕有り	
pit7	33	29.5	7	11.5	長方形		加工痕有り	
pit8	35	33	5	12	方形		加工痕有り	
pit9	36.5	24	6.5	10.5	楕丸方形	赤色を呈する	加工痕有り・赤色を呈する	
pit11	34	32	6.5	9.5	楕丸三角形	赤色を呈する	加工痕有り・赤色を呈する	
pit13	36	26	7	11	楕丸三角形		加工痕有り	

4 ビット群

調査区北西部、B-2～4、C-2～4、D-2～4、E-2～4、F-2グリッドにかけて位置する。ビット群は、19基確認されたが、建物となる対応がみつけれなかったため、長軸・短軸・深さ、平面形を記すに留める。

第15表 ビット群観察表

pit番号	平面形	計測値 (cm)			備考
		長径	短径	深さ	
1	円形	30	28	36	
2	楕円形	44	26	23	
3	楕円形	36	34	23	
4	円形	33	38	27	
5	円形	42	40	20	
6	円形	30	22	25	
7	円形	—	—	9	13号掘立柱建物跡pit1とpit8に切られる
8	円形	24	—	6	
9	楕円形	—	—	25	

10	楕円形	44	36	23	
11	円形	42	30	10	
12	円形	32	23	33	
13	円形	28	19	22	
14	円形	34	28	24	
15	円形	26	24	19	pit16に切られる
16	楕円形	29	26	41	
17	楕円形	30	22	30	
18	円形	30	30	23	
19	円形	38	—	20	

5 古墳

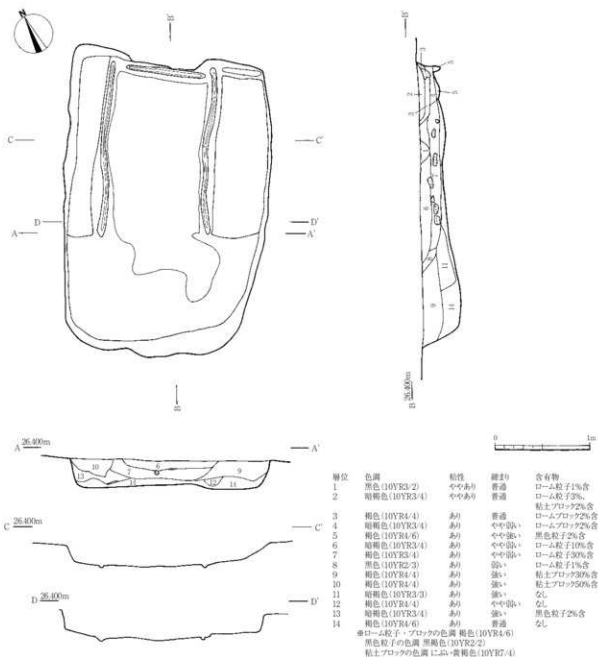
1号墳(第28・29図 P.L.6-1～2)

位置 調査区中央部、F-4・5グリッドにかけて位置する。

規模と形状 墳丘及び周溝は確認できないが、埋葬施設のみ確認した。確認面の規模は、長軸2.98m、短軸2.14m、深さ0.41mを測り、平面はほぼ長方形を呈する。石室は破壊を受けており、原形を留めていない。主軸方向はN-73°Eである。

埋葬施設 埋葬施設はローム層を掘り込み、掘り方を造り、その中に石室を構築したとみられる。

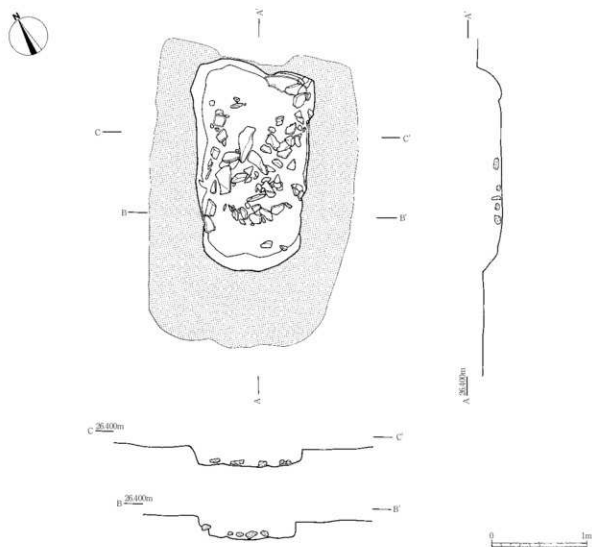
石室の規模は、長軸2.19m、短軸1.02m、遺構確認面からの深さは0.19mを測る。底面は中央部より南に向かって深く掘られ、北側はほぼ水平となっている。底面に石室の奥壁・側壁の石を据えたこととみられる溝を確認した。両側壁の溝の長さは1.82～1.72m、幅は0.04～0.06m、奥壁の溝は長さ0.82m、幅0.05mを測る。底



第28図 1号墳実測図

面からの深さは0.03～0.07mを測る。奥壁の溝は一直線で、両側壁の溝はやや重んで延びており、奥壁の溝を挟んで掘られている。底面には、石室に使用されたとみられる雲母片岩の石片が多量に確認された。大きさは小破片から40cm程度のものがあり、石室の構築材としてどの部分に使用されていたかは不明である。
裏込め 裏込めは9～13層に確認できた。9・10層は、白色粘土ブロックを多量に含んでいる。11・13層は締まりが強く、色調も9・10層と同様のため裏込めと判断した。12層は14層を切っており、側壁の溝と判断した。

覆土 1～8層は石室が破壊を受けた際に堆積したとみられる。6層に石片が多く含まれ、2・3層にも同じレベルに石片が含まれている。その他の層も色調・締まり・含有物がほぼ同様のため同時期に堆積したとみられる。



第29図 1号墳石室検出状況

遺物 土師器の小破片が出土したが図示し得ない。

所見 本古墳からは墳丘及び周溝は検出されなかった。削平が激しく、また石室もかなり破壊を受けていたため不明な点が多い。掘り方から判断すると、石棺の周囲に裏込めが施されていることや、羨道・墓道が存在しないと考えられることから、箱式石棺である可能性が高い。床面に残されている石材が割られていること、また少ないことから自然に崩壊したのではなく、人為的に破壊されたと考えられる。時期は、石室構造から古墳時代終末期に構築されたと判断した(註2)。

(前山 喜英)

6 地下式坑

1号地下式坑〔第30・31・32図 P.L. 6-3・12-4・13-1〕

位置 調査区の中央部で、H-3・4、I-3・4グリッドにかけて位置する。

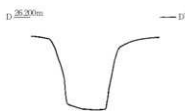
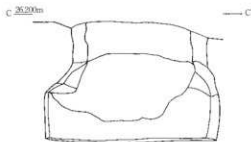
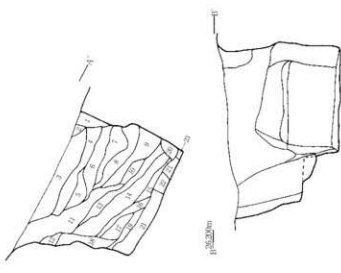
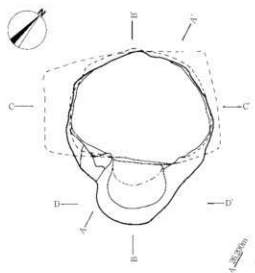
規模と構造 1号地下式坑は竪坑と主室からなる地下式の施設であり、主室天井部は崩落している。確認面の規模は、南北を主軸とし2.77m、東西を短軸とし2.47mを測る。主軸方向はN-41°-Wである。竪坑は主室南壁の中央やや東よりの位置で南壁から突出する形で構築されており、平面は円形を呈する。主室は東西を長辺に持ち、西側は東側より比べてやや短いため、不整長方形を呈する。

竪坑の規模は上端南北0.73m、上端東西1.08m、下端南北0.71m、下端東西0.93m、遺構確認面からの深さ1.38mを測り、底部から垂直に立ち上がる壁を持つ円筒形を呈する。構築時の加工痕や出入り用の階段などの施設などは検出されなかった。主室の規模は、南北1.76m、東西2.72m、底部から天井部までの高さは、壁際天井部開始部分で1.08m、天井残存部の最大高は1.26mである。遺構確認面からの深さは、1.98mである。主室の四方の壁は残存しており、ほぼ垂直に立ち上がる。北東角の一部は天井部との境目が確認でき、壁から緩やかな弧を描くように構築されている。壁からの継ぎ目が未確認の箇所においても、緩やかに弧を描き天井部を形成することが推定でき、おそらく天井部は一つの頂点を持つドーム状の形態をなすと考えられる。

竪坑と主室には段が存在し、主室が竪坑より低い位置に存在する。その高低差は0.56mを測る。ただし、竪坑底面の一部は欠損しているため、推定値として提示する。竪坑底面の一部と主室は粘土層を削り貫いて構築しており、主室の壁は床面から高さ約50cmより以下に白色粘土層が見られる。

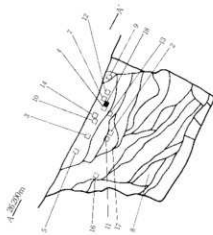
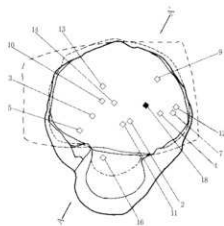
覆土 1層は縦に垂直に堆積した土であり、攪乱の可能性が高い。2層から5層は、天井崩落によりできた窪地の堆積土である。6層以下の天井崩落土とは異なる土である。6層から10層は、特大のロームブロックを含む締まりの強い土や壁に付着していた黒色土、流れ込みの土が交互に堆積している状況からも、断続的に天井が崩落していった痕跡であると考えられる。11層から14層は竪坑からの流れ込んだ土であり、15層から17層は天井崩落土と解釈しているが、黒色土の混入も見られるため、竪坑の壁や天井の崩落土が混在していると考えられる。18層は遺構外からの流れ込みの土であり、竪坑の入口部分からの最初の流れ込みであると考えられる。19層は土質より壁の崩落土であり、20層は白色粘土が含有していることより、壁の一部が崩落したものである。20層から23層は非常に締まりが強い土であり、底部と面していた部分の土には黒色土の付着が見られた。これらの層は最初の天井崩落土であると考えられる。主室底面全体に覆い被さるように堆積しており、最初の崩落で厚さ20cm程の天井の一部が崩落したと考えられる。

遺物 土師質土器・陶器・石製品が出土している。遺物は、主に天井崩落より表土沈下のためできた窪地の堆積土から出土している。土師質土器(18)は小皿であり、非口ロク成形である。口縁部に横ナデ、体部に指頭痕があり、内面は全面に横ナデを施している。(4)は鉢の口縁部であり、在地産である。陶器は渥美、常滑、瀬戸・美濃の製品が出土している。渥美産は3点(14・15・16)出土している。14は砥ぎ道具としての転用が確認される。常滑産は、12点(1・2・3・5・6・7・8・9・10・11・12・13)出土しており、この中で生産時期の明確な遺物は5点(5・7・8・10・11)である。8は常滑産の甕であり、頸部から胴部にかけての部位である。割れ口には磨耗した痕跡があり、砥具として転用したと考えられる。中野編年(註3)の6b期に相当すると考えられる。10・11は外面に格子状の押印文が見られ、その形状より中野編年の4期に相当すると考えられる。13はナデ調整の際、木口状工具やヘラ状工具を使用した痕跡が見られる。5は片口鉢である。外面は縦方向のヘラケズリをなし、口縁部に横ナデを施した後、注口が作られてい



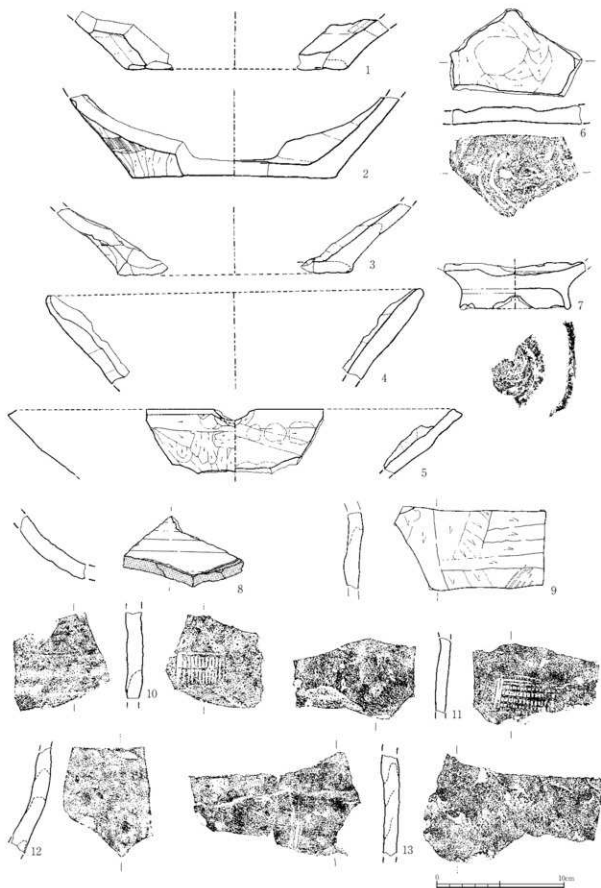
層位	色調	粘性	締り	含有物	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	なし	普通	ローム粒子 15%含	
2	黒褐色(10YR2/2)	なし	普通	ローム粒子 5%含	
3	黒褐色(10YR2/2)	なし	普通	ローム粒子 5%含	
4	黒褐色(10YR2/2)	なし	やや強い	ロームブロック 10%含 ローム粒子 10%含	
5	黒色(10YR1/7.1)	なし	普通	なし	
6	黒褐色(7.5YR2/3)	なし	普通	ローム粒子 10%含 ロームブロック 23%含	
7	褐色(10YR4/4)	なし	やや強い	黒色粒子 7%含	天井崩落土
8	褐色(10YR4/4)	なし	普通	なし	
9	褐色(10YR4/4)	なし	やや強い	黒色粒子 3%含	天井崩落土
10	褐色(10YR4/4)	なし	やや強い	ロームブロック 20%含	天井崩落土
11	黒褐色(10YR2/2)	なし	普通	ローム粒子 3%含 ロームブロック 1%含	
12	暗褐色(10YR3/4)	ややあり	やや強い	ローム粒子 2%含	
13	黒褐色(10YR2/2)	なし	やや強い	ロームブロック 2%含	
14	褐色(10YR4/6)	なし	やや強い	ロームブロック 1%含	
15	褐色(10YR4/6)	ややあり	普通	ロームブロック 10%含	
16	暗褐色(10YR3/4)	なし	やや強い	黒色粒子 20%含	
17	褐色(10YR4/4)	なし	やや強い	ロームブロック 7%含	
18	暗褐色(10YR3/4)	なし	やや強い	ロームブロック 20%含	
19	褐色(10YR4/6)	ややあり	普通	ロームブロック 20%含	壁面崩落土
20	明黄褐色(10YR7/6)	あり	やや強い	ロームブロック 20%含	壁面崩落土
21	褐色(10YR4/6)	あり	強い	なし	天井崩落土
22	暗褐色(10YR3/4)	なし	普通	ロームブロック 30%含	天井崩落土
23	褐色(10YR4/6)	あり	強い	ロームブロック 10%含	天井崩落土

※ローム粒子・ブロックの色調 褐色(10YR4/6)
黒色粒子の色調 黒褐色(10YR2/2)
粘土ブロックの色調 土に黄褐色(10YR7/4)

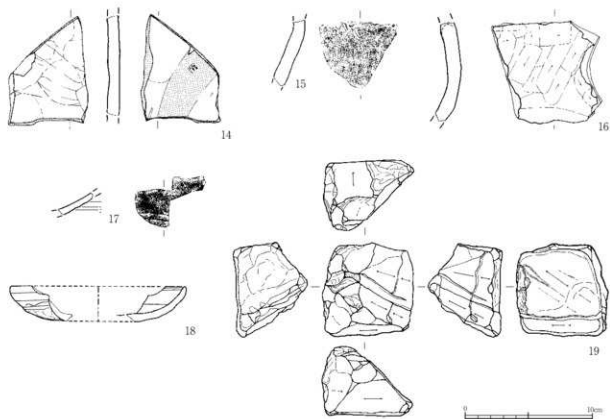


第30図 1号地下式坑実測図・遺物出土状況





第31圖 1号地下式坑出土遺物 (1)



第32図 1号地下式坑出土遺物(2)

る。内面にはナデ調整を施している。中野編年より6b~7期に位置すると考えられる。7は片口鉢の底部であり、高台を持つ。高台の高さは1.70cmを測り、内湾気味である。遺物の形状から片口鉢I類であると判断でき、中野編年より5~6a期に位置すると考えられる(註4)。瀬戸の平塚副部片(17)が1点出土している。内外面に灰軸が施されており、貫入が見られる。外面にロクロ目をヘラケズリにより消した痕跡が見られる。時期は15世紀代に相当すると考えられる(註5)。石製品は砥石(19)である。ほぼ全面を利用して研磨した痕跡が見られる。

所見 1号地下式坑に直接関係する遺物は確認されていないため、詳しい性格を知ることはできない。しかし、地下式坑の土層堆積状況と出土遺物状況から使用終了時期については追究することができる。

最初の天井崩落土(20~23層)と底面の間に間層がないことから、使用終了直後に天井が崩落した可能性を指摘できる。全ての天井崩落が終了した時期は、完全な天井崩落后に自然堆積した5層の下部から出土した17より、15世紀前半以前と考えられる。17層出土の8は砥具として二次的使用が確認されており、中野編年における6b期の生産時期と二次的使用の時期を考慮すると、おそらく8は14世紀前半に流れ込んだ可能性を指摘することができる。以上より地下式坑の天井崩落時期は、14世紀前半から15世紀前半の間に位置すると考えられる。

ゆえに地下式坑の使用終了時期は、最初の天井崩落が使用終了直後に起きていること、天井崩落土が含まれる6層から17層にかけての堆積が14世紀前半から15世紀前半に位置することから、18・19層の薄い天井崩落土を考慮しても14世紀前半以前と考えられる。

(林 紘太郎)

第16表 1号地地下式坑出土遺物観察表

図版番号	器種	量目 (cm)	形態・特徴	製作技法・施文方法	焼成・色調・胎土	備考
第31回 1	陶器 (常滑) 鉢	口径：－ 底径：(17.2) 残存高：4.5	底部破片。 内外面全体自然釉付着。	粘土結作り。 外面横方向ヘラケズリ。 内面横方向ナデの後、横方向ヘラケズリ。	不良 襷(10YR4/4) 赤褐色(10YR6/8) 石英2%含	覆土一括
第31回 2	陶器 (常滑) 鉢	口径：－ 底径：(16.2) 残存高：6.7	鉢の体部から底部にかけての破片。 体部外面に濃の襷が残る。 底面離れ砂の痕有り。	粘土結作り。 外面は大きい単位の縦方向ケズリの後、小さい単位の斜方向ケズリ。 内面横方向ナデ。	良好 襷(7.5YR4/6) 石英3%含	覆土 内側磨耗。
第31回 3	陶器 (常滑) 鉢	口径：－ 底径：(18.7) 残存高：5.4	鉢体部から底部にかけての破片。 底面離れ砂の痕有り。	粘土結作り。 外面横方向ヘラナデ。 内面横方向ナデ。	良好 灰襷(7.5YR5/2) 石英2%、長石1%、 礫1%含	覆土
第31回 4	陶器 鉢	口径：(29.4) 底径：－ 残存高：7.0	鉢口縁部破片。	粘土結作り。 内外面ともに横方向指ナデ。口縁部に指頭痕有り。	並 襷(7.5YR6/6) 石英4%、金髪母1%含	覆土一括
第31回 5	陶器 (常滑) 片口鉢	口径：(34.3) 底径：－ 残存高：5.1	片口鉢口縁部破片。	粘土結作り。口縁部の一部を外反させ片口を作る。 口縁部押圧により粘土結接着後、縦方向ハケ調整。 その後横方向ナデ。 口唇部、内面とも横方向ナデ。	良好 灰襷(10YR5/2) 石英2%含	覆土 使用痕有り。
第31回 6	陶器 (常滑) 鉢	口径：－ 底径：－ 残存高：1.6	鉢底部破片。 内面全体自然釉付着。	粘土結作り。 内面指ナデ。	良好 灰オリーブ(7.5Y5/3) 石英2%、 黒色粗砂3%含	覆土一括
第31回 7	陶器 (常滑) 片口鉢	口径：－ 底径：(8.8) 残存高：4.5	片口鉢底部から高合部に かけての破片。	ロク口成形(左回転)。 底部右回転ヘラケズリ。底部と高合部をキザミ目による貼り付け後、接合部ナデ。	良好 色調：褐灰(10YR5/1) 石英3%、長石1%、 礫1%含	覆土
第31回 8	陶器 (常滑) 甕	口径：－ 底径：－ 残存高：7.5	甕胴部から胴部にかけての破片。 頸部は外反する。外面全体自然釉付着。	粘土結作り。 内面頸部横方向ナデ。 胴部に指頭痕有り。	良好 紺赤襷(5YR3/2) 白色粗砂5%、礫2%含	17層一括 証具として転用された痕有り。
第31回 9	陶器 (常滑) 甕	口径：－ 底径：－ 残存高：6.0	甕胴部破片。 やや内湾する。	粘土結作り。 外面にヘラ状工具によるナデ。一部ナデ消し。内面は横方向ナデ。	良好 栗褐(7.5YR3/1) 石英2%、長石1%含	覆土
第31回 10	陶器 (常滑) 甕	口径：－ 底径：－ 残存高：7.9	甕胴部破片。 内面全体自然釉付着。	粘土結作り。 内外面ともに横方向ナデ。 外面に格子状の押印文。	良好 オリーブ灰(10Y6/2) 石英2%、礫1%含	覆土
第31回 11	陶器 (常滑) 甕	口径：－ 底径：－ 残存高：6.5	甕胴部破片。 内面全体自然釉付着。	粘土結作り。 外面ナデの後、格子状の押印文。	良好 襷(7.5YR4/6) 石英1%含	覆土
第31回 12	陶器 (常滑) 甕	口径：－ 底径：－ 残存高：8.4	甕胴部破片。 内湾する。	粘土結作り。 内外面ともに横方向指ナデ。 内面の一部には縦方向ナデ。	良好 ぶい褐色(7.5YR6/3) 石英3%、礫1%含	覆土
第31回 13	陶器 (常滑) 甕	口径：－ 底径：－ 残存高：7.8	甕胴部破片。	粘土結作り。 外面縦方向ハケ調整後、粘土をナデつけている。その後外面斜方向ヘラナデ。内面木口状工具による横方向ナデ。内面粘土貼り付け後横方向ナデ。	ぶい褐色(7.5YR5/4) 石英3%、礫1%含	覆土
第32回 14	陶器 (瀬美) 甕	口径：－ 底径：－ 残存高：7.8	甕胴部破片。	粘土結作り。 外面の一部押印文。内面は押圧の後、横・斜方向ナデ。	良好 襷(7.5YR4/1) 石英2%、礫1%含	覆土 証具として転用された痕有り。
第32回 15	陶器 (瀬美) 甕	口径：－ 底径：－ 残存高：5.1	底部破片。	粘土結作り。 外面縦方向ヘラケズリの後、横方向ナデ。内面横方向ナデ。	良好 襷(7.5YR6/1) 石英2%、礫1%含	覆土一括
第32回 16	陶器 (瀬美) 甕	口径：－ 底径：－ 残存高：7.7	甕胴部破片。 内湾する。	粘土結作り。 外面は指頭押圧の後、横方向ナデ。内面横方向指ナデ。	良好 紺灰色(N3/0) 石英1%含	覆土
第32回 17	陶器 (瀬戸) 平埴	口径：－ 底径：－ 残存高：1.7	平埴体部破片。	ロク口成形。 外面の一部縦方向ケズリ。	良好 灰オリーブ(7.5Y6/2) 石英1%含	覆土一括
第32回 18	土師質 土器 皿	口径：(15.7) 底径：－ 残存高：2.7	皿口縁部から体部にかけての破片。 内湾しながら立ち上がる。体部は中位から屈曲する。	手捏ね。 外面は体部縦方向ナデの後、体部下位を指による押圧。 内面は横方向ナデ。	並 淡黄褐色(10YR8/4) 黒色粗砂3%含	覆土

第17表 1号地下式坑出土土製品観察表

図版番号	器種	計測値 (cm・g)				石材	備考
		最大長	最大幅	最大厚	重量		
第32図 19	碓石	7.3	7.0	5.2	331.0	砂岩	1層一括 ほぼ全面に砥痕が見られる。

7 土坑

原則として時代順に記載する。

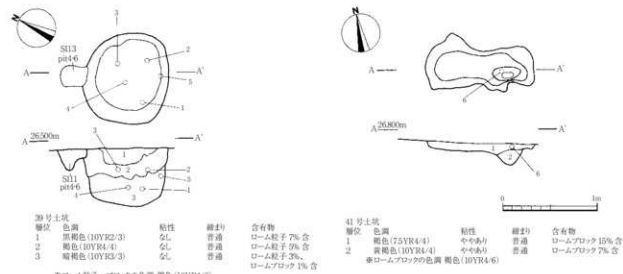
39号土坑〔第33図 P.L. 7-1・14-1〕

位置 調査区南西部南壁付近、E-6、F-6 グリッドにかけて位置する。

重複関係 13号住居跡 pit 4・6 と重複する。

規模と形状 長軸0.92m、短軸0.96m、遺構確認面からの深さは0.61mを測る。平面は円形、断面は鍋状を呈する。長軸方向はN-25°-Wである。

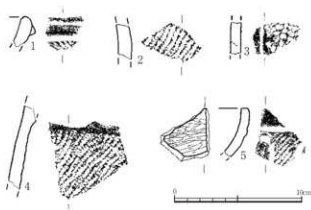
覆土 凹レンズ状堆積であり、自然堆積を呈する。



第33図 39・41号土坑実測図

遺物 縄文土器が2・3層から10点出土しており、このうち図示し得た遺物は5点である。

1はLRの単節縄文が施されており、口縁部に突帯が貼り付けられている。5はRLの縄文が施されたのに、沈線がめぐらされている。内面はミガキが施されている。2はLRの縄文が施されている。胎土中に雲母が含まれている。3は縄文と沈線が施されている。胎土中に雲母を含む。胎土には雲母・長石・石英が含まれている。4はRLの縄文が施されている。内面は無調整である。これらの縄文土器は特徴から加曾利E式と考えられる。



第34図 39号土坑出土遺物

所見 時期は堆積状況から、13号住居跡pit4・6よりも古いことや出土遺物などから縄文時代中期後半以降であると考えられるが、詳細な時期・性格は不明である。

(近藤 貴徳)

41号土坑〔第33・35図 P.L. 7-2・14-1〕

位置 調査区北西部、F-2グリッドに位置する。

規模と形状 長軸1.17m、短軸0.34m、遺構確認面からの深さは0.21mを測り、平面は不整形円形を呈する。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は円形で緩い傾斜をなし一部が深く落ち込む。長軸方向はN-75°-Wである。

覆土 ロームブロックを含んだ褐色土が主体で、凹レンズ状の堆積を呈するため自然堆積であると判断した。

遺物 覆土中から縄文土器が2点出土したが、図示し得た遺物は1点である。

6は、内面にミガキ調整、外面には単節縄文LRが施され、胎土には石英を多量に含む。

所見 出土遺物から本土坑の時期は縄文時代であると判断されるが詳細な時期・性格は不明である。

(大井 和実)



第35図 41号土坑出土遺物

47号土坑〔第36図 P.L. 7-3〕

位置 調査区中央部南側、F-6、G-6グリッドにかけて位置し、11号溝に切られている。

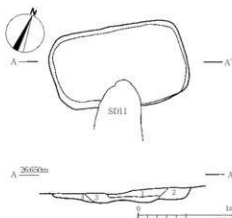
規模と形状 長軸1.42m、短軸0.88m、遺構確認面からの深さは0.14mを測り、平面は隅丸長方形を呈する。底面にはやや起伏が見られ、壁面は外傾しながら立ち上がる。長軸方向はN-31°-Wである。

覆土 流れ込みによる自然堆積である。にぶい黄褐色と褐色の4層からなり、1層にのみロームブロックを確認することができた。

遺物 縄文土器が数点出土しているが、小破片のため図示し得ない。

所見 時期は堆積状況と出土遺物から判断して、縄文時代と考えられる。性格は不明である。

(石井 聖美)



層位	色調	粘性	織り	含有物
1	にぶい黄褐色 (10YR4/5)	あり	普通	ロームブロック ローム粒子15%含
2	褐色(7.5YR4/4)	あり	やや強い	ローム粒子7%含
3	褐色(7.5YR4/4)	あり	やや強い	ローム粒子20%含
4	にぶい黄褐色 (10YR4/5)	あり	普通	ローム粒子15%含

※ローム粒子・ブロックの色調 褐色(10YR4/6)

第36図 47号土坑実測図

51号土坑〔第37・38図 P L. 7-4・14-1〕

位置 調査区北部、M-2グリッドに位置する。

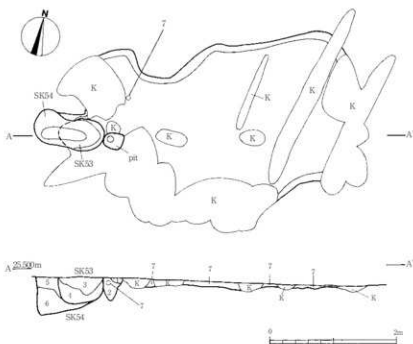
重複関係 53・54号土坑に切られている。

規模と形状 53・54号土坑・風倒木痕・耕作痕に3分の1程度破壊されているため、正確な規模は不明であるが、残存部で長軸3.50m、短軸2.30m、遺構確認面からの深さは0.12mを測る。平面は不整形を呈する。底面は若干凹凸が見られ、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。長軸方向はN-79°-Eである。

覆土 褐色土の単一層である。

遺物 覆土中から縄文土器が出土した。そのうち図示し得た遺物は1点である。

7は深鉢形土器体部で、単節LRの縄文が施されている。また、視乱層から中世陶器(8)が出土している。8は渥美産で、砥具に転用されている。



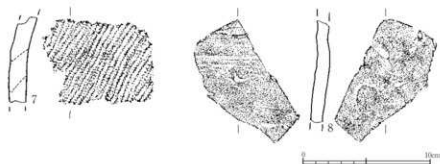
層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	暗褐色(T5YR2/4)	ややあり	やや強い	ローム粒子 7%含
2	褐色(T5YR4/4)	普通	普通	なし
3	にじみ赤褐色(5YR4/4)	ややあり	普通	ローム粒子 2%含
4	褐色(T5YR4/3)	ややあり	普通	ローム粒子 10%含
5	にじみ赤褐色(5YR4/3)	ややあり	やや強い	ローム粒子 3%含
6	暗赤褐色(5YR2/4)	ややあり	やや強い	なし
7	褐色(T5YR4/6)	ややあり	普通	なし

※ ローム粒子の色調 褐色(10YR4/6)

第37図 51・53・54号土坑実測図

所見 出土遺物から時期は縄文時代以降であるが、性格は不明である。

(正木 未央)



第38図 51号土坑出土遺物

56号土坑〔第39図 P.L.7-5〕

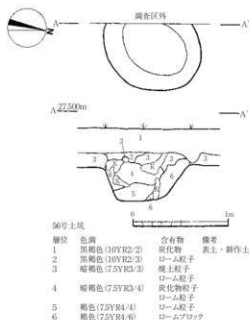
位置 調査区南西部、A-7・B-7グリッドにかけて位置する。
規模と形状 長軸1.00m、短軸0.96m、遺構確認面からの深さ0.36mを測り、平面は楕円形を呈する。壁は緩く外傾し、底面はほぼ平坦である。関東ローム層漸移層まで削平しての遺構確認面であるため、漸移層上面を確認面とすれば、0.50mの深さになる。長軸方向はN-36°Eである。

覆土 褐色土を主体とした5層から構成される。

遺物 縄文土器が1点出土している。

所見 覆土の状態と出土遺物から、縄文時代以降であると判断した。

(窪田 恵一)



56号土坑

層位	色調	含有物	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	炭化物	残土・耕作土
2	黒褐色(10YR2/3)	ローム粒子	
3	暗褐色(7.5YR3/3)	焼土粒子	
4	暗褐色(7.5YR3/4)	炭化物粒子	ローム粒子
5	褐色(7.5YR4/4)	ローム粒子	
6	褐色(7.5YR4/6)	ローム粒子	ロームブロック

第39図 56号土坑実測図

52号土坑〔第40・41図 P.L.7-6・14-1〕

位置 調査区南西部、F-6グリッドに位置する。

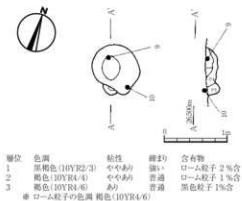
規模と形状 南側でピットを切っている。長軸0.55m、短軸0.48m、遺構確認面からの深さは0.14mを測り、平面は円形を呈する。底面は不整形の小さな窪みがあり、壁は外傾しながら立ち上がる。長軸方向はN-29°Wである。

覆土 ピットの堆積土である3層が堆積した後、52号土坑が掘り込まれ、2層、1層の順に堆積した。

遺物 2層から3層にかけて土師器が出土した。そのうち図示し得たものは2点である。

所見 出土遺物は古墳時代前期の特色がみられるが、性格は不明である。

(中村 慶子)

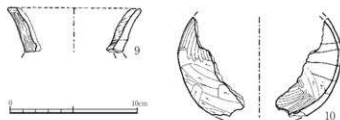


52号土坑

層位	色調	粘性	硬さ	含有物
1	黒褐色(10YR2/3)	やや多い	強い	ローム粒子 2%含
2	褐色(10YR4/4)	やや多い	普通	ローム粒子 1%含
3	褐色(10YR4/6)	多い	普通	黒色粒子 1%含

※ ローム粒子の色調 褐色(10YR4/6)

第40図 52号土坑実測図



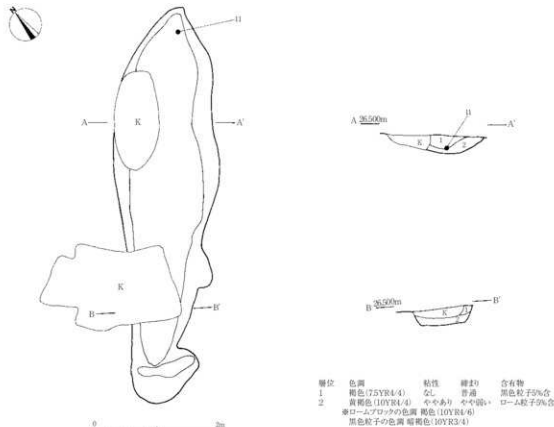
第41図 52号土坑出土遺物

57号土坑〔第42・43図 L P. 14-1〕

位置 調査区中央南側、G-5・6、H-5グリッドにかけて位置する。

規模と形状 本土坑は北西側の数ヶ所が攪乱を受けている。長軸5.60m、短軸0.70m、遺構確認面からの深さは0.28mを測り、平面は長楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに外傾している。長軸方向はN-40°-Eである。

覆土 北西側が数ヶ所攪乱を受けているため明瞭には確認できなかったが、2層が確認でき、1層は黑色粒子を含む褐色土、2層はローム粒子を含む黒褐色土であった。



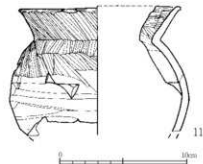
第42図 57号土坑実測図

遺物 縄文土器・土師器・土師質土器・鉄軸陶器が出土しているが、大半の遺物が攪乱から出土した。また、覆土中から出土したもので図示し得た遺物は1点のみで、同一の層からは縄文土器2点が出土している。

土師器甕(11)は、口縁部内外面及び体部外面にハケ目調整を施し、胴部は丸みを帯びている。

所見 本土坑の時期は、出土した土師器甕によって、古墳時代前期後半(註1)であると判断できる。しかしその性格は不明である。

(石井 聖美)



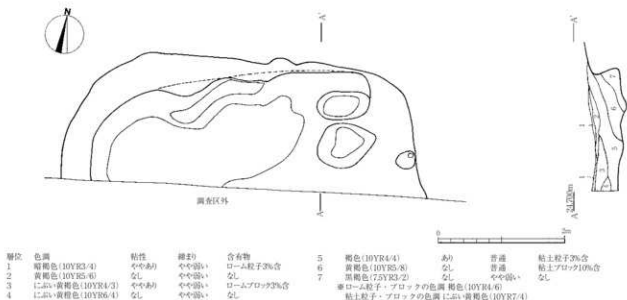
第43図 57号土坑出土遺物

16号土坑〔第44図 P.L.7-7〕

位置 調査区南東部、L-7、M-7、N-7グリッドにかけて位置し、神明遺跡第3次調査時に南側部分の調査を行っている。

規模と形状 長軸5.58m、短軸2.04m、遺構確認面からの深さは0.82mを測り、平面は長方形を呈する。底面はローム層下のスコリアを含む粘土層に達しており、平坦であるが部分的に楕円形や不整形な凹凸がみられる。北西から北側の壁は緩い傾斜の後、垂直に近い角度で掘り込まれているが、東側はなだらかな傾斜となっていた。また北側の壁は、遺構確認面より0.20～0.30mの深さから粘土採掘のためと思われる水平方向への溝状の横掘りも認められた。長軸方向はN-91°Eである。

覆土 2～7層の不自然な傾斜堆積や褐色土と黄褐色土が互層になっている堆積状況から人為的な堆積と判断した。神明遺跡第3次調査報告との土層対応は、本土坑の1層が第3次調査報告の1層と、3層が3層と、5層が6層と対応する。なお、4層は第3次調査報告のA-A'ライン土層断面図上に確認できないため、5層が堆積した後にできた凹凸に、部分的に堆積した第3次調査報告の7層と類似した層であると判断した。



第44図 16号土坑実測図

遺物 覆土中から縄文土器・土師器・中世陶器・中世瓦・椀形鉄滓が出土したが、小破片のため図示し得ない。

所見 本土坑は、底面の粘土層まで達する掘り込みや北壁にみられる水平方向の溝状の横掘りから、縦方向から水平方向に転ずる掘り方という粘土採掘坑の特徴を認めることができた。また時期については、今回の調査では時期を決定する良好な資料が出土していないが、第3次調査時出土の遺物から中世の遺構と考えられる。

(植田 雄己)

42号土坑〔第45図 P L. 7-8〕

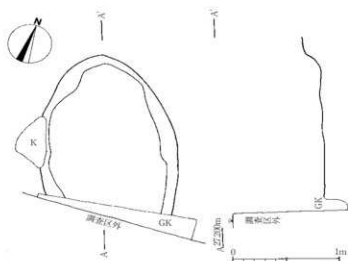
位置 調査区西南部、F-6・7グリッドにかけて位置する。

規模と形状 土坑の南側は、後世の掘乱により切られているため、正確な規模は不明である。残存部で長軸1.57m、短軸1.28m、遺構確認面からの深さは0.16mを測り、平面は不整形円形を呈する。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。長軸方向はN-12°-Wである。

遺物 上層から縄文土器、底面直上から土師質土器の口縁部が出土したが、小破片のため図示し得ない。

所見 時期は、底面直上から土師質土器が出土しているため、中世と考えられる。性格は不明である。

(藤野 一之)



第45図 42号土坑実測図

53号土坑〔第30・46図 P L. 7-4・14-1〕

位置 調査区北部、M-2グリッドに位置する。

重複関係 51・54号土坑を切っている。

規模と形状 上端だけ確認することができ、長軸0.72m、短軸0.48m、遺構確認面から深さは0.42mを測る。平面は楕円形を呈する。底面は緩い傾斜をなし、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向はN-85°-Eである。

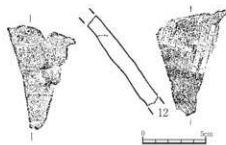
覆土 当初、54号土坑とともに一つの土坑と考えていたが、土層断面から二つの土坑と判明した。流れ込みによる自然堆積である。

遺物 覆土中から縄文土器・陶器が出土した。そのうち図示し得た遺物は1点である。

陶器(12)は常滑産であり、肩部で、外面に押印文施文ののちに、縦方向のヘラナデが施されている。内面には横方向の指ナデが施されている。

所見 出土遺物から時期は中世以降であるが、性格は不明である。

(正木 未央)

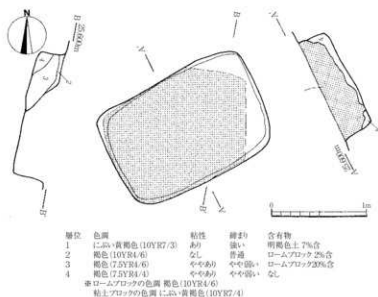


第46図 53号土坑出土遺物

30号土坑〔第47図 P.L. 8-1〕

位置 調査区中央部、J-3・K-3グリッドにかけて位置する。

規模と形状 長軸1.71m、短軸1.21mで、遺構確認面からの深さは、0.36mを測り、平面は隅丸長方形を呈する。底面は若干凹凸が見られるがほぼ平坦であり、壁面はわずかに外傾して立ち上がる。長軸方向はN-61°-Eである。



第47図 30号土坑実測図

覆土 1層は粘土層、2～4層は褐色土層である。2・3層は北東部中心に堆積が確認できる。4層は自然堆積と考えられる。2・3層は北東部のみにとまって堆積することから、人為的な堆積と考えられる。粘土層は褐色土が堆積後に人為的に堆積する。粘土層は拳大の粘土ブロックが主であったが明褐色土も多く含んでいた。

遺物 出土していない。

所見 本調査区内に粘土採掘坑(16号土坑)が検出されている。16号土坑で採掘した粘土を貯蔵した土坑である可能性も考えたが、堆積状況から当初の使用目的は粘土を入れることではないと思われる。

また、粘土に明褐色土を多く含んでおり良質の粘土とはいえないことより、粘土の貯蔵土坑の可能性は低いと考えられる。年代・性格ともに不明である。

(清地 良太)

36号土坑〔第48図 P.L. 8-2〕

位置 調査区北西部、F-2グリッドにかけて位置する。

規模と形状 規模は長軸0.78m、短軸0.53m、遺構確認面からの深さは0.15mを測り、平面は楕円形を呈する。底面は緩い傾斜をなし、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。長軸方向はN-54°-Wである。

覆土 本土坑は地山を掘り込んで作られている。1・2層は焼土粒子と黑色粒子を含んだ赤褐色土が主体である。焼土層は強く被熱しブロック状に硬化しているため、その上面が火床と考えられる。

遺物 出土していない。

所見 本土坑の性格は規模や覆土から判断すると炉と考えられる。しかし、周辺の遺構との関連性は特にみられず、また時期を決定する遺物の出土がないため、年代は不明である。

(大井 和実)

40号土坑〔第48図 P.L. 8-4〕

位置 調査区南西部、E-6・7グリッドにかけて位置する。

規模と形状 長軸1.65m、短軸0.88m、遺構確認面からの深さは0.49mを測り、平面は長方形を呈する。底

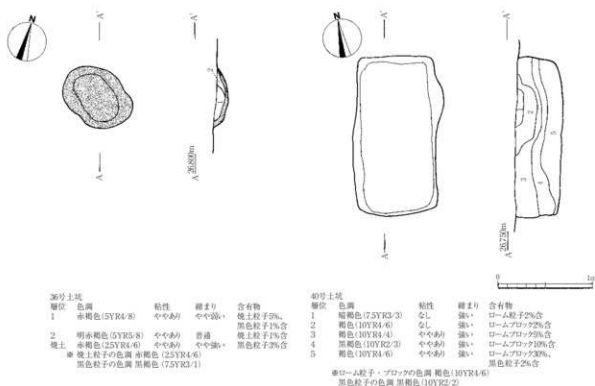
面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。長軸方向はN-2°-Eである。

覆土 土坑内に堆積していた土は、人為的な堆積で版築により固く締まっていた。特に4層のロームブロックは版築のため押し潰されていた。土層断面から、版築は2回に分けて行われた可能性があり、1回目は3層までを版築し、その後1・2層を再度版築したと判断できる。

遺物 覆土中から縄文土器・土師器が出土したが、小破片のため図示し得ない。

所見 時期を決定する良好な遺物の出土はないため、時期は不明である。また、本土坑は何らかの付属施設とも考えられるが、性格は不明である。

(藤野 一之)



第48図 36・40号土坑実測図

38号土坑A・B〔第27図 P L. 8-3〕

位置 調査区北西部北壁側、B-2グリッドに位置する。

重複関係 16号掘立柱建物跡pit 1と重複する。

規模と形状 長軸1.65m、短軸1.02m、遺構確認面からの深さは0.42mを測る。平面は勾玉状で、断面は盆状を呈するが、一部が深く落ち込む。長軸方向はN-96°-Wである。38号土坑A・Bは一つの土坑と考えられており、平面上では各土坑を識別することはできなかったが、土層断面から各遺構を確認した。

覆土 4・5層が38号土坑A、3層が38号土坑Bである。1・2層が16号掘立柱建物跡pit 1である。

遺物 出土していない。

所見 層位から16号掘立柱建物跡よりも古いと考えられるが、詳細な時期は不明である。また、各土坑の新旧関係は38号土坑Aが古く、38号土坑Bが新しいと考えられる。性格は不明である。

(近藤 貴徳)

43号土坑〔第49図 P L. 8-5〕

位置 調査区中央部南側、H-7グリッドに位置する。

規模と形状 長軸0.76m、短軸0.40m、遺構確認面からの深さは0.36mを測り、平面は隅丸長方形を呈する。底面は中央から西側はほぼ平坦であるが、東側は一段深く掘り込まれていた。壁は外傾して立ち上がっている。長軸方向はN-90°-Eである。

覆土 流れ込みによる自然堆積で、凹レンズ状を呈する。

遺物 出土していない。

所見 時期・性格はともに不明である。

(石井 聖美)

44号土坑A・B・C〔第49図 P L. 8-6〕

位置 調査区北西部北壁、B-2グリッドに位置する。北隅が調査区外となっている。

規模と形状 長軸0.87m、短軸0.50m、遺構確認面からの深さは0.22mを測る。平面は不整形で、断面は皿状であるが北側が深く掘り込まれている。長軸方向はN-33°-Wである。44号土坑A・B・Cは当初一つの土坑と考えられており、平面上では各土坑を識別することはできなかった。しかし、土層断面から各遺構を確認した。

覆土 3層の暗褐色の層が44号土坑Aである。2層の褐色の層が44号土坑Bである。1層の締まりの強い褐色の層が44号土坑Cである。

遺物 出土していない。

所見 時期・性格に関しては不明であるが、堆積の順序から44号土坑Aが最も古く44号土坑Cが最も新しいと考えられる。

(近藤 貴徳)

45号土坑〔第49図〕

位置 調査区北西部西壁側、B-2グリッドに位置する。

規模と形状 規模は長軸0.54m、短軸0.10m、遺構確認面からの深さは0.06mを測る。平面は楕円形、断面は皿状を呈する。長軸方向はN-85°-Wである。

覆土 1層のみの自然堆積である。

遺物 出土していない。

所見 時期・性格は不明である。

(近藤 貴徳)

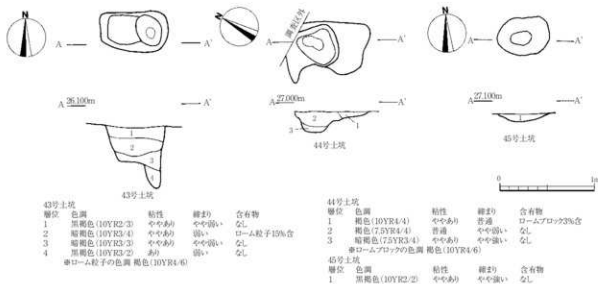
46号土坑〔第50図 P L. 8-7〕

位置 調査区中央部南側、H-7グリッドに位置する。

規模と形状 長軸0.76m、短軸0.52m、遺構確認面からの深さは0.23mを測り、平面は楕円形を呈する。底面はやや起伏が見られ、西側から東側にかけて緩やかに傾斜している。壁は外傾して立ち上がっている。長軸方向はN-90°-Eである。

覆土 流れ込みによる自然堆積である。3層に多量のロームブロックが確認できた。

遺物 出土していない。



第49図 43・44・45号土坑実測図

所見 時期・性格はともに不明である。

(石井 聖美)

48号土坑〔第50図 P.L. 8-8〕

位置 調査区中央部南縁、F-7、G-7グリッドにかけて位置する。

規模と形状 長軸0.98m、短軸0.86m、遺構確認面からの深さは0.12mを測り、平面は円形を呈する。底面は全体的に平坦であるが、中央部が一段深く掘り込まれている。壁は外傾して立ち上がり、西側の壁は東側の壁に比べてなだらかに傾斜していた。長軸方向はN-31°-Eである。

覆土 流れ込みによる自然堆積である。

遺物 出土していない。

所見 時期・性格はともに不明である。

(石井 聖美)

55号土坑〔第50図〕

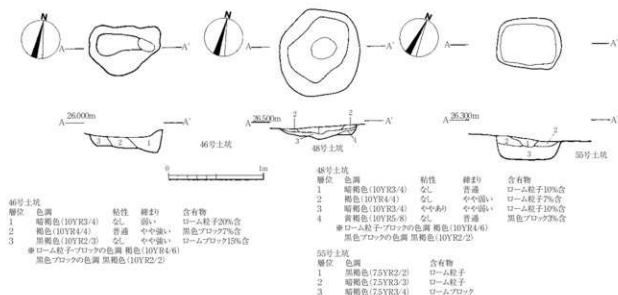
位置 調査区中央北側、I-2グリッドに位置する。

規模と形状 長軸0.67m、短軸0.53m、遺構確認面からの深さ0.24mを測り、平面は隅丸方形を呈する。壁面は僅かに外傾し、底面は平坦である。長軸方向はN-68°-Eである。

覆土 黒褐色土を主体として3層から構成される。

遺物 縄文土器2点、土師器2点が出土している。

(窪田 恵一)



第50図 46・48・55号土坑実測図

54号土坑〔第37図 P L, 7-4〕

位置 調査区北部、M-2グリッド、N-2グリッドにかけて位置する。

重複関係 51号土坑を切り、53号土坑に切られている。

規模と形状 53号土坑に切られているため正確な規模は不明であるが、下端長軸0.70m、下端短軸0.19m、遺構確認面からの深さ0.60mを測る。平面は楕円形を呈する。底面は緩い傾斜をなし、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向はN-91°Eである。

覆土 53号土坑と同一の土坑としていたが、土層断面より2つの土坑であった。流れ込みによる自然堆積である。

遺物 出土していない。

所見 51・54号土坑との切り合いから、51号土坑より新しく、53号土坑より古いことは判断できるが、正確な時期は不明である。また、性格も不明である。

(正木 未央)

第18表 土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	流量 (cm)	形態・特徴	製作技法・施文方法	焼成・色調・胎土	備考
第34図 1	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 残存高：2.4 器厚：0.8～1.4	深鉢口縁部破片。	粘土紐作り。 口縁部外面に1条の突帯を貼り付け後、突帯部ナデ。 単節縄文 (RL) 縦回転。	不良 黒褐 (7.5YR3/2) 黒褐 (7.5YR3/2) 石英2%、長石1%、 金雲母1%含	SK39 覆土
第34図 2	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 残存高：2.5 器厚：1.0～1.1	深鉢体部破片。	粘土紐作り。 単節縄文 (RL) 縦回転。	並 にぶい黄褐 (10YR5/4) 褐 (10YR4/4) 石英1%、金雲母1%含	SK39 覆土
第34図 3	縄文土器	口径：— 底径：— 残存高：2.5 器厚：0.8	体部破片。	粘土紐作り。 外面に単節縄文 (LR) 斜回転と縦位の沈線文が施文。	並 にぶい赤褐 (5YR5/3) にぶい黄褐 (10YR5/4) 石英2%、金雲母1%、 白雲母1%含	SK39 覆土

第34回 4	縄文土器 深鉢	口径：－ 底径：－ 残存高：6.5 器厚：0.9～1.1	深鉢体部破片。	粘土紐作り。 単筋縄文 (RL) 縦回転の後、隆帯を1条貼り付ける。 隆帯部ナデ。	不良 黒褐 (10YR3/2) にぶい黄褐 (10YR4/3) 石英5%、金雲母3%含	SK39 覆土
第34回 5	縄文土器 深鉢	口径：－ 底径：－ 残存高：3.8 器厚：0.5～0.8	深鉢口縁部破片。 やや内湾する。	粘土紐作り。 単筋縄文 (RL) 縦回転後、口縁部下に横位沈線文施文。 その後、弧状の沈線文2条施文。 内面に横方向ミガキ。	並 黒褐 (7.5YR2/2) 黒褐 (7.5YR2/2) 石英2%、金雲母1%含	SK39 覆土加曾利 E I ~ E II 式期。
第35回 6	縄文土器 深鉢	口径：－ 底径：－ 残存高：4.2	深鉢体部破片。	粘土紐作り。 内面に斜方向ミガキ。 単筋縄文 (LR) 斜回転。	並 浅黄橙 (10YR8/4) 石英3%、 白色粗砂3%含	SK41 覆土
第38回 7	縄文土器 深鉢	口径：－ 底径：－ 残存高：6.7 器厚：1.3～1.5	深鉢体部破片。	粘土紐作り。 単筋縄文 (RL) 縦回転。	並 黄褐 (10YR5/6) にぶい黄褐 (10YR5/3) 石英2%、金雲母1%、 白雲母1%、長石2%含	SK51 覆土
第38回 8	陶器 (濠美)	口径：－ 底径：－ 残存高：7.9	体部破片。 内面に爪の痕が見られる。	粘土紐作り。 内外面は横方向指ナデ。	良好 褐灰 (10YR4/1) 石英1%含	SK51 攪乱一括 磁具として 転用された 痕有り。
第41回 9	土師器 壺	口径：(10.6) 底径：－ 残存高：3.5	壺口縁部破片。 わずかに外反する。	粘土紐作り。 外面は縦方向ミガキ。 内面は横方向のハケ調整の後、横方向ミガキ。	並 明黄褐 (10YR6/6) 石英1%含	SK52 覆土
第41回 10	土師器 埴	口径：－ 底径：－ 残存高：8.4	埴体部破片。 扁平な球形を呈する。	粘土紐作り。 外面ヘラケズリの後、上端ミガキ。 内面一部ヘラケズリ。 その後下端ミガキ。	並 暗褐 (10YR3/3) 石英5%含	SK52 覆土
第43回 11	土師器 壺	口径：(12.6) 底径：－ 残存高：10.1	壺体部は丸みを帯び、口縁部は外反する。	粘土紐作り。 内外面ともに口唇部横方向ナデ。 外面は口縁部から体部中位にかけて斜方向ハケ調整。口縁部中位横方向ナデ。体部中位から下位にかけて横方向ヘラケズリ。内面は口縁部横方向にハケ調整。体部横方向ナデ。	並 橙 (7.5YR6/6) 石英3%、長石1%、 白雲母1%、 白色粗砂3%含	SK57 覆土
第46回 12	陶器 (常滑) 壺	口径：－ 底径：－ 残存高：7.2	壺胴部破片。	粘土紐作り。 外面は縦方向ヘラナデの後、押印文。 内面は横方向指ナデ。	良好 褐灰 (10YR5/1) 石英1%含	SK53 覆土一括 磁具として 転用された 痕有り。

8 溝

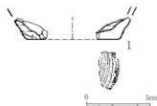
原則として時代順に記載する。

9号溝〔第51・52回 P L. 9-1・14-2〕

位置 調査区北部西際、B-2・G-2グリッドにかけて東西方向に走り、西側は調査区外に続いている。

重複関係 9号溝と12号住居跡・13号掘立柱建物跡pit2・16号掘立柱建物跡pit3は重複している。切り合いと遺物から判断すると、各遺構の構築順は12号住居跡→16号掘立柱建物跡→9号溝→(11号掘立柱建物跡)→13号掘立柱建物跡の順である。

規模と形状 調査区西際からの長さは28.40m、最大幅は1.15m、最小幅は0.33m、遺構確認面からの深さは0.45mを測る。調査区西壁で一部掘り込みが確認できたが、上層が耕作されているため、当時の掘り込み面は



第51回 9号溝出土遺物

確認できなかった。西側の断面は逆台形を呈し、東に向かうとともにU字形に変わる。南側よりも北側の立ち上がりのほうが緩やかである。底面は東に緩やかに傾斜している。主軸方向はN-88°Eであり、ほぼ東西方向に軸を合わせている。

覆土 東側は上層が削平されている。立ち上がりが緩やかな北側からの流れ込みが強い自然堆積である。

遺物 覆土中から縄文土器・土師器・土師質土器が出土した。そのうち図示し得たものは土師質土器(1)のみで、7層から出土した。1は底部が厚く、内底面に同心円状の回転ナデを残し、体部は直立気味に立ち上がる。比毛君男氏の編年(註6)に従い、13世紀前半と判断した。底面直上ではないが、本遺構の時期を決定する資料とした。

所見 12号掘立柱建物跡に隣接し、主軸方向もほぼ同じであることから、本遺構は12号掘立柱建物跡に伴う区画溝であった可能性が高い。また、本遺構をまたく形で11号掘立柱建物跡が建てられている。このことは11号掘立柱建物を建てた時点では本遺構は埋まっていたことを示す。時期は、重複関係と土師質土器から13世紀前半前後から13世紀中頃であると考えられる。

(中村 慶子)

第19表 9号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・特徴	製作技法・施工方法	焼成・色調・胎土	備考
第51図 1	土師質土器 小皿	口径：一 底径：(7.1) 器高：1.7	小皿底部破片。 体部外面下端工具痕有り。	口クロ(左回転)。底部回転余切。	並 にぶい焼(7.5YR5/4) 石英1%、白色粗砂3%含	覆土

1号溝(第53図 P.L.9-2)

位置 調査区中央部南際、I-6グリッドからI-7グリッドにかけて南北方向に走っている。

規模と形状 北側端から調査区の南際までの長さは6.10m、最大幅1.12m、最小幅0.56m、遺構確認面からの深さ0.13mを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに外傾して立ち上がっている。

主軸方向 N-13°Wである。

覆土 流れ込みによる自然堆積で、凹レンズ状を呈している。

遺物 出土していない。

所見 時期は、第3次調査で既に調査された溝の延長上の遺構であることと、覆土の状況から判断して近世以降と考えられる。性格は地境溝と考えられ、明治20年頃的地籍図からも窺える。また、第3次調査での長さを含めた全長は13.90mである。

(石井 聖美)

11号溝(第53図 P.L.9-3)

位置 調査区中央部南際、G-6グリッドからG-7グリッドにかけて南北方向に走っており、47号土坑を切っている。

規模と形状 北側端から調査区の南際までの長さは5.30m、最大幅0.70m、最小幅0.48m、遺構確認面からの深さ0.23mを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに外傾して立ち上がっている。

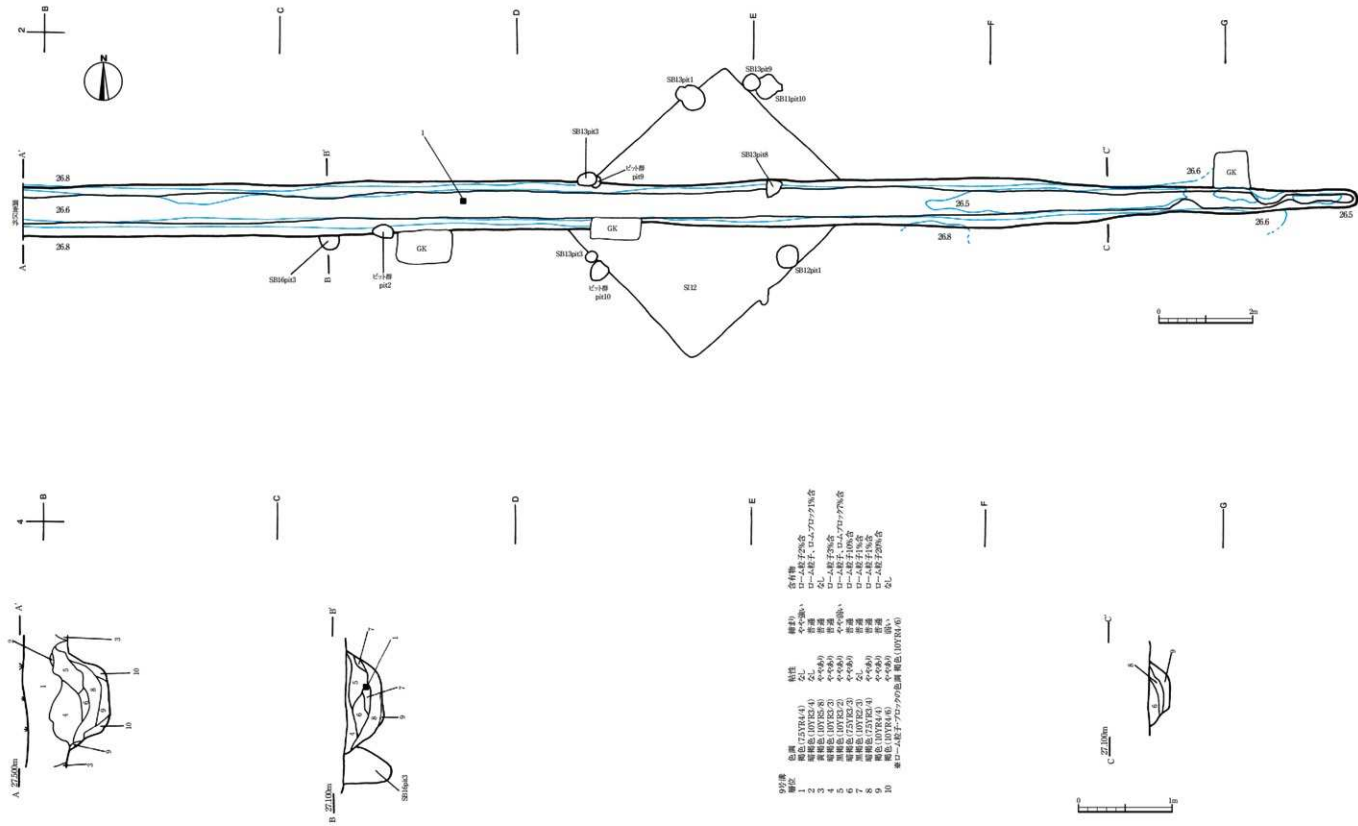
主軸方向 N-23°Wである。

覆土 流れ込みによる自然堆積で、凹レンズ状を呈する。4層を確認したが、1層は南際のB-B'ライン土層断面にのみ見られ、北側のA-A'ライン土層断面では確認することができなかった。

遺物 出土していない。

所見 時期は、覆土の状況から判断して近世以降と考えられる。1号溝にほぼ並行するように走っているため、同様に地境溝の可能性があるが、明治20年頃的地籍図上に本溝と重なるものが窺えないため、性格は不明というに留める。

(石井 聖美)



第52図 9号溝実測図・コンター図

9号溝

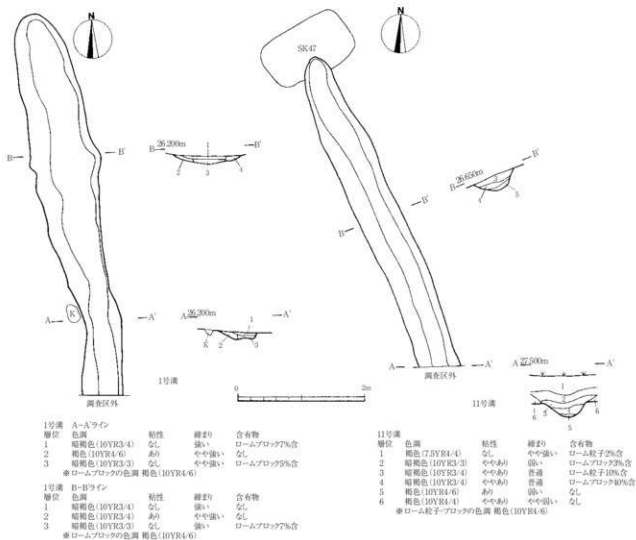
標記	色標	性質	種別
1	10731(4)	なし	コ-4号子ノミ
2	10732(4)	なし	コ-4号子ノミ
3	10733(8)	なし	コ-4号子ノミ
4	10734(2)	なし	コ-4号子ノミ
5	10735(2)	なし	コ-4号子ノミ
6	10736(2)	なし	コ-4号子ノミ
7	10737(3)	なし	コ-4号子ノミ
8	10738(4)	なし	コ-4号子ノミ
9	10739(4)	なし	コ-4号子ノミ
10	10740(6)	なし	コ-4号子ノミ

色標 10731(4) 10732(4) 10733(8) 10734(2) 10735(2) 10736(2) 10737(3) 10738(4) 10739(4) 10740(6)

性質 10731(4) 10732(4) 10733(8) 10734(2) 10735(2) 10736(2) 10737(3) 10738(4) 10739(4) 10740(6)

種別 10731(4) 10732(4) 10733(8) 10734(2) 10735(2) 10736(2) 10737(3) 10738(4) 10739(4) 10740(6)





第53図 1・11号溝実測図

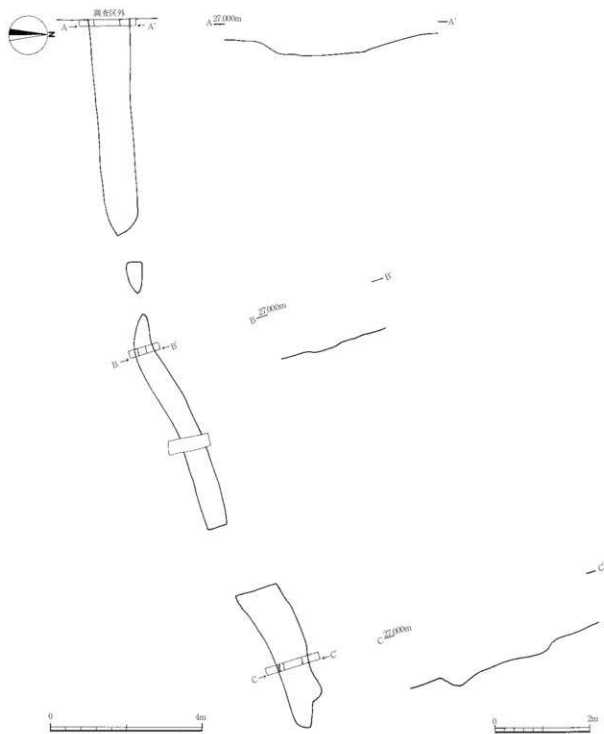
10号溝〔第54図〕

位置 調査区中央部西際、A-5からG-4グリッドにかけて東西方向に走り、西側は調査区外に続く。

規模と形状 本溝は重機による削平が激しいため、数ヶ所で途切れ消滅する。そのため正確な規模は不明である。確認可能な範囲は、調査区西壁からの長さ30.3m、最大幅1.75m、最小幅0.50m、遺構確認面からの深さは最大で0.19mを測る。底面は一部凹凸が見られるがほぼ平坦で、壁は南側より北側の方が緩やかに立ち上がる。調査区西壁において一部掘り込みを確認したが、上層は耕作痕により当時の掘り込み面は確認できなかった。また西壁では2・3号道路状遺構の硬化層と思われる層が本溝より高いレベルで確認できた。10号溝と2・3号道路状遺構の覆土を観察した結果、10号溝の方が2・3号道路状遺構よりも古いと判断した。F-4グリッドでは重機による削平が激しく確認できなかったため、1号溝との切り合い関係は不明である。

覆土 1層を確認した。締まりの弱い暗褐色の単一土層であった。

遺物 出土していない。



第54図 10号溝実測図

所見 遺物の出土もなく、また1号墳との切り合い関係も確認できなかったため、時期・性格については不明である。また、2・3号道路状遺構とは特に関係性は考えられない。

(大井 和実)

9 道路状遺構

本調査では、道路状遺構が検出された。1号道路状遺構・4号道路状遺構・5号道路状遺構が南北に走り、2号道路状遺構・3号道路状遺構が東西に走る。道路状遺構に関係する13号溝も検出された。これらの道路状遺構のいくつかは、明治20年以降の地籍図に記載されている。

1号道路状遺構〔第56図 P.L.10-1～2〕

位置 調査区東部、N-2、M-3グリッドにかけて位置する。南北方向に走り、北側は調査区外に続いている。

重複関係 13号溝によって切られる。

規模と形状 重機による削平の上、13号溝・2号道路状遺構・芋穴に切られており、正確な規模は不明である。残存部で長さ7.30m、最大幅1.30m、最小幅1.20m、北壁土層断面での硬化層の厚さは0.47mを測り、上下2層に分かれる。最初に造られた断面は皿状を呈し、底面は若干凹凸がみられる。

主軸方向 N-9°-Eである。

道路面 砂混じりの整地層で、硬化面をなす。

遺物 出土していない。

所見 関東ローム層を掘り窪めて道路面を造り、その上に硬化層0.47mを測ることから、長い間道路として使用された。明治13年に作成された迅速図には記載されておらず、また表土から深い位置に造られているため、近世に造られたと考えられる。北壁の土層断面では、東側にある13号溝に1層上面で切られており、13号溝が掘られたときには道路としての機能は失っていた。さらにその後、芋穴によって切られている。時期的順位としては道路硬化面→13号溝→芋穴である。

(正木 未央)

2号道路状遺構〔第55図〕

位置 調査区東部、F-5からN-3グリッドにかけて位置する。3号道路状遺構にほぼ並行して東西方向に走り、N-3グリッドでは南北方向に走る。西側・南側は調査区外に続いている。

重複関係 13号溝によって切られる。重機により上部が削平されているため、3号道路状遺構との切り合い関係は確認できなかった。

規模と形状 重機による削平の上、芋穴に切られており、正確な規模は不明である。M-3・4グリッドで途切れているが、土層・位置関係から同一の道路と判断した。逆L字状を呈し、残存部で東西の長さ38.30m、南北の長さ4.20m、最大幅1.04m、最小幅0.34m、遺構確認面からの硬化層の厚さは0.04mを測る。南壁・西壁で硬化層を確認しており、延長して東西の長さ約66m、南北の長さ約20m、西壁土層断面から確認できる硬化層の厚さは0.36mである。1号道路状遺構に直交し、南に曲がる。最初に造られた断面はほぼ皿状を呈し、底面は若干凹凸がみられる。

主軸方向 全体はほぼN-81°-Eであるが、N-3グリッドでN-131°-Eに変わる。

道路面 砂混じりの整地層で、硬化面をなす。

遺物 出土していない。

所見 全体的に関東ローム層を掘り窪めて道路面を造っているが、南方部分では黒色土層を掘り窪めている。H-H'ライン土層断面より、上面では3号道路状遺構と一つの道路として使われたとみられる。南に曲

がる付近に位置する南北方向に延びる芋穴に切られるが、芋穴の埋め戻し層にまた道路として使われた硬化層が確認でき、本道路状遺構が長い期間にわたって使われていたことが判断できる。1号道路状遺構に繋がっていることから、1号道路状遺構とはほぼ同時期に造られたと考えられる。また、明治20年以降の地籍図には同位置に道路が記載されているため、本道路状遺構は主要な道路の一つであると考えられる。

(正木 未央)

3号道路状遺構〔第55図〕

位置 調査区東部、F-5からO-4グリッドにかけて位置する。2号道路状遺構にはほぼ並行して東西方向に走り、また南に折れ曲がり、4号道路状遺構に繋がる可能性がある。西側・南側は調査区外に続いている。
重複関係 重機により上部が削平されているため、2号道路状遺構との切り合い関係は確認できなかった。
規模と形状 重機による削平で途切れているが、残存部で長さ38.50m、遺構確認面からの硬化層の厚さは0.06mを測る。西壁で硬化層を確認しており、延長して東西の長さ約66m、西壁土層断面から確認できる硬化層の厚さは0.36mである。最初に造られた断面はほぼ皿状を呈し、底面は若干凹凸がみられる。

主軸方向 N-81°-Eである。

道路面 砂混じりの整地層で、硬化面をなす。

遺物 出土していない。

所見 関東ローム層を掘り窪めて造った最初の道路面があり、その上に1層の硬化層が確認できる。上面では2号道路状遺構と一つの道路として使われたとみられる。明治20年以降の地籍図には同位置に道路が記載されているため、本道路状遺構は主要な道路の一つであると考えられる。

(正木 未央)

4号道路状遺構〔第56図〕

位置 調査区東部、M-3、N-3グリッドにかけて位置する。1号道路状遺構の南に南北方向に走り、交差点で西から延びる3号道路状遺構と繋がる可能性がある。南側は調査区外に続いている。

規模と形状 重機による削平で途切れているが、残存部で長さ19.50m、最大幅0.60m、最小幅0.35m、遺構確認面からの硬化層の厚さは0.17mを測る。南壁で硬化層を確認しており、延長して南北の長さ約20mである。断面はほぼ皿状を呈し、底面は若干凹凸がみられる。

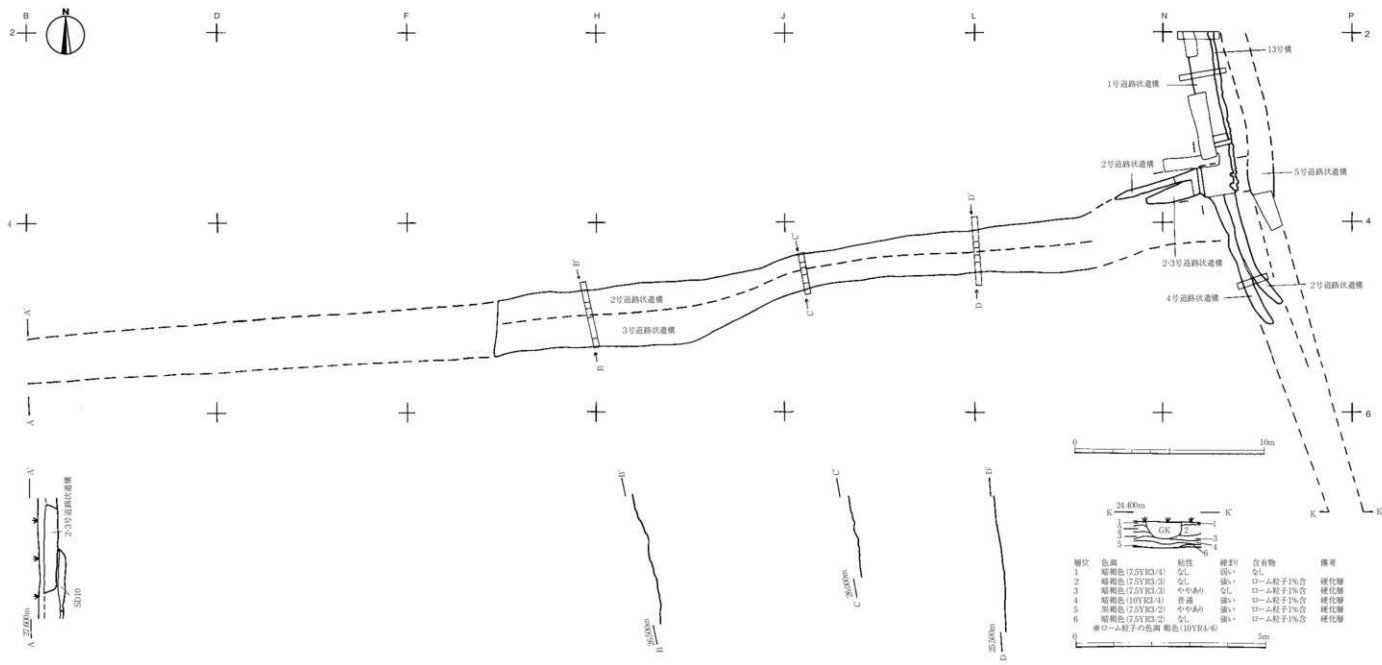
主軸方向 N-81°-Eである。

道路面 砂混じりの整地層で、硬化面をなす。

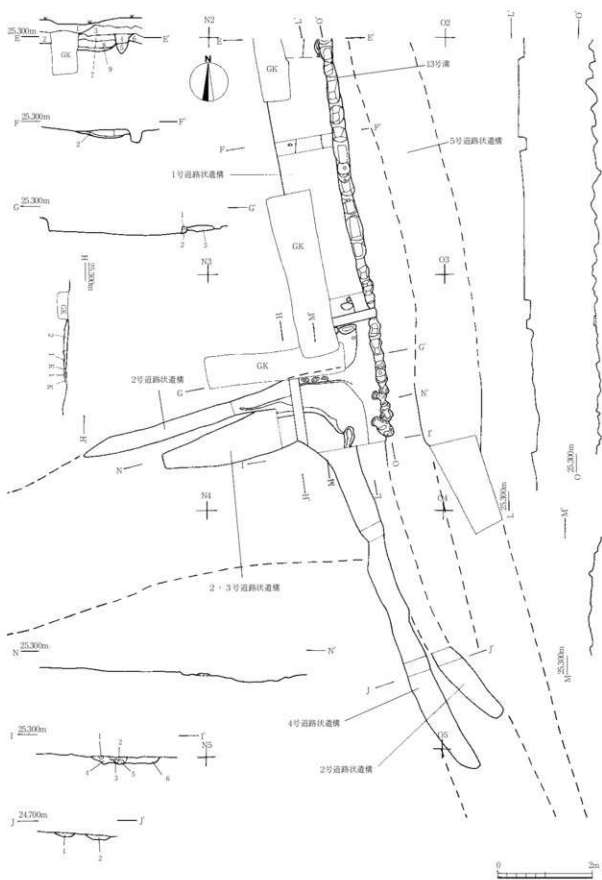
遺物 出土していない。

所見 関東ローム層、または黒色土層を掘り窪めて造った最初の道路面があり、その上に1層の硬化層が確認できる。明治20年以降の地籍図には同位置に道路が記載されているため、本道路状遺構は主要な道路の一つであると考えられる。

(正木 未央)



第55図 道路状遺構全体図(10m間隔でグリッド表示)



第56图 道路状遺構・区画図

1号道路状遺構・13号溝 E-Eライン				
層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	褐色(75YR4/3)	なし	弱い	ローム粒子1%含
2	暗褐色(7.5YR3/4)	なし	やや弱い	ローム粒子1%含
3	暗褐色(7.5YR3/3)	あり	やや弱い	ローム粒子1%含
4	褐色(7.5YR4/6)	あり	やや弱い	ロームブロック50%含
5	暗褐色(7.5YR3/4)	あり	弱い	ロームブロック10%含
6	褐色(7.5YR4/3)	ややあり	やや強い	ローム粒子1%含
7	暗褐色(10YR3/4)	あり	やや強い	ローム粒子1%含
8	暗褐色(10YR3/4)	あり	強い	ローム粒子1%含
9	褐色(10YR4/4)	あり	強い	ロームブロック5%含

○2・8層は硬化層

1号道路状遺構 F-Fライン				
層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	暗褐色(10YR3/4)	なし	強い	なし
2	褐色(10YR4/4)	なし	強い	ロームブロック5%含

○1・2層は硬化層

2号道路状遺構 G-Gライン				
層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	暗褐色(7.5YR3/2)	普通	強い	ロームブロック2%含
2	暗褐色(7.5YR3/2)	普通	弱い	ロームブロック2%含
3	褐色(10YR3/4)	なし	強い	ローム粒子5%含

○1・3層は硬化層

2号道路状遺構 H-Hライン				
層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	にじみ-黄褐色(10YR4/2)	なし	強い	ローム粒子3%含
2	暗褐色(10YR3/4)	なし	強い	ローム粒子2%含

○1・2層は硬化層

2・4号道路状遺構 I-Iライン				
層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	にじみ-黄褐色(10YR5/3)	なし	強い	なし
2	黒褐色(10YR2/3)	なし	強い	ロームブロック1%含
3	黒褐色(10YR2/3)	ややあり	強い	ロームブロック1%含
4	黒褐色(7.5YR3/2)	なし	強い	ロームブロック5%含
5	褐色(7.5YR4/4)	ややあり	強い	ロームブロック20%含
6	暗褐色(10YR3/4)	なし	強い	ロームブロック5%含

○2～6層は硬化層

2・4号道路状遺構 J-Jライン				
層位	色調	粘性	締まり	含有物
1	暗褐色(10YR3/4)	なし	強い	ロームブロック7%含
2	黒褐色(10YR2/3)	ややあり	強い	ロームブロック2%含

○1・2層は硬化層
※ローム粒子・ブロックの色調 褐色(10YR4/6)

5号道路状遺構〔第56図〕

位置 調査区東部、N-2、O-3グリッドにかけて位置する。1号道路状遺構に平行して南北方向に走り、北側は調査区外に続いている。

規模と形状 重機による削平のため途切れ途切れにしか残っていないが、残存部で長さ8.60m、最大幅1.38m、最小幅1.15mを測る。

主軸方向 N-10°-Eである。

道路面 砂混じりの整地層で、硬化面をなす。

遺物 出土していない。

所見 表土から掘り込み、一部関東ローム層を掘り窪め、道路面を造った。トレンチを設定できるほど残存していなかったため、北壁の断面から確認した。北壁の土層断面で1号道路状遺構より高い位置に硬化層を確認でき、1号道路状遺構が放棄された後、新たに造られたと考えられる。

(正木 未央)

13号溝〔第56図〕

本遺構は道路状遺構と関係するため、本項で報告する。

位置 調査区東部、N-2グリッド、M-3グリッドにかけて位置し、1号道路状遺構の東に並行する。

重複関係 1号道路状遺構を切っている。

規模と形状 長さ8.50m、最大幅0.23m、最小幅0.15m、北壁の土層断面での深さは0.85mを測る。横断面はU字形、または鍋底形を呈する。縦断面では、鍬先が斜めに入り、鍬先によって連続した穴が作られたことが分かる。底面には掘削時の鍬痕が確認できる。

主軸方向 N-10°-Eである。

覆土 流れ込みによる自然堆積である。

遺物 出土していない。

所見 時期は北壁の土層断面から判断して、近現代と考えられる。性格は、鍬による凹凸があることから排水の溝ではなく、1号道路状遺構廃絶後、地境に沿って掘られたと考えられる。

(正木 未央)



第57図 神明遺跡付近の明治時代地籍図

10 遺構に伴わない遺物及び遺構外出土遺物

明らかに遺構の時期の対応しない流れ込みと考えられる遺物、また明確に遺構に伴わない遺物を「遺構に伴わない遺物及び遺構外出土遺物」として整理した。これらの遺物は天箱1箱分に相当し、そのうち縄文土器が13点と古墳時代の土器を10点、中世以降の遺物を18点図示し、報告する。

(1) 縄文時代の遺物〔第58図 P.L.15-1〕

縄文土器は表土や9号溝、1号地下式坑からの出土が多い。図示し得た遺物は13点あり、1～10は深鉢、11・12は浅鉢である。そのうち1～5・11・12は口縁部、13は底部、6～10は体部である。

口縁部のうち1～4・5・11・12は沈線を有する。5・11・12は、口唇部に沈線を有し、1は外面に斜

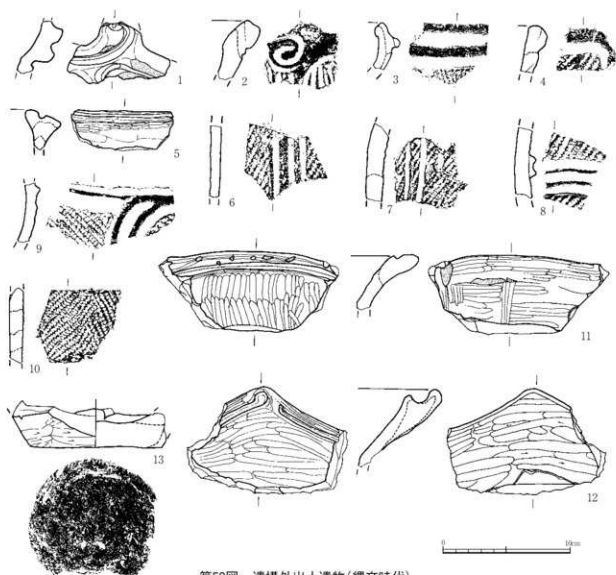
位の沈線と渦巻文を有する波状口縁である。2は沈線により渦巻文が施された波状口縁である。3・4は降帯と沈線によって区画や渦巻き文が構成されており、4の区画内に施されている縄文は磨り消し縄文である。3は外面口唇部下に凸帯を貼り付けている。

13の底部は、底部周縁に網代痕を有するが中心部は指ナデによって消されている。

6～10のうち、8・9は降帯を有する。8は2条の横方向の降帯が施されている。9は降帯と沈線によって渦巻文が施されている。6・7は縦方向の縄文施文後に縦方向に2条の懸垂文が施されている。懸垂文間の縄文は磨り消し縄文である。10は単節縄文L RとR Lによる結束のない羽状縄文が施されている。

これらのうち4・6・7・9は加曾利E I・II式期に相当し、他の遺物も縄文時代中期に相当する。

(植田 雄己)



第58図 遺構外出土遺物(縄文時代)

第20表 遺構外出土遺物(縄文時代)観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・特徴	製作技法・施工方法	焼成・色調・胎土	備考
第58図 1	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 残存高：4.0 器厚：1.1～1.8	深鉢口縁部破片。 やや内湾する。	粘土結作り。 口縁部下外面に斜位の沈線文。 胎土、漆痕状沈線を施文。 口唇部は横方向ナデ。	黒 緑(7.5YR6/6) 黒(7.5YR6/6) 石炭2%、金雲母1%、 長石1%含ま	SK37 髹土一括
第58図 2	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 残存高：4.8 器厚：1.3～2.5	深鉢口縁部破片。	粘土結作り。 胎土を作り出した後、漆痕状の隆帯区画文。 数本の縦位沈線文を施す。内面に横方向ミガキ。	良好 にぶい黄褐色(10YR5/4) にぶい黄褐色(10YR5/4)石炭 2%、白雲母1%含ま	赤土
第58図 3	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 残存高：3.6 器厚：1.0～1.7	深鉢口縁部破片。	粘土結作り。 単筋縄文(RL)斜回転。 口縁部外面に1条の突帯を貼り付け後、突帯部ナデ。	黒 明赤褐色(2.5YR5/8) 明赤褐色(2.5YR5/8) 石炭3%、金雲母1%、 白雲母2%含ま	赤土
第58図 4	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 残存高：3.7 器厚：1.0～1.6	深鉢口縁部破片。	粘土結作り。 沈線文による区画内に単筋縄文(RL)縦回転 後、磨り消し。	黒 黒(10YR4/4) 黒(10YR4/4) 石炭2%、白雲母1%含ま	赤土 加賀利EⅠ式 期
第58図 5	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 残存高：3.2 器厚：0.8～2.5	深鉢口縁部破片。 口唇部に内側に肥厚する。 口唇部の一部に黒痕有り。	粘土結作り。 口唇部に沈線文施文後、横方向ナデ。その後 横方向ミガキ。口縁部内外面横方向ナデ後、 横方向ミガキ。	黒 にぶい黒(7.5YR6/4) にぶい黒(7.5YR6/4) 石炭1%、長石2%含ま	SK37 髹土一括
第58図 6	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 残存高：5.6 器厚：0.8～0.9	深鉢体部破片。	粘土結作り。 単筋縄文(RL)斜回転後、懸垂文3条を施文。 懸垂文間を磨り消し。 内面横方向ナデ。 一面に横方向ナデ。	黒 黄褐色(2.5Y5/4) 黄褐色(2.5Y5/4) 石炭2%、 白雲母1%含ま	赤土 加賀利EⅡ式 期
第58図 7	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 残存高：6.2 器厚：1.3～1.5	深鉢体部破片。	粘土結作り。 にぶい黄褐色(10YR6/4) にぶい黄褐色(10YR6/4) 石炭2%含ま	赤土 加賀利EⅡ式 期	
第58図 8	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 残存高：5.5 器厚：1.1～1.8	深鉢体部破片。	粘土結作り。 外面に単筋縄文(RL)縦回転の後、1条の隆帯 を貼り付け、隆帯部をナデによって、磨面 ノ字状に調整。	黒 にぶい黄褐色(10YR7/4) 黒灰(10YR5/1) 石炭2%、金雲母2%、 白雲母1%含ま	赤土
第58図 9	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 残存高：4.7 器厚：0.8～1.2	深鉢体部破片。	粘土結作り。 単筋縄文(RL)横回転。その後横方向の隆帯1 条、底状の隆帯2条を貼り付け、胎土に沿っ て沈線文を施文。 最後に隆帯部ナデ。	黒 黒(10YR5/1) 明赤褐色(10YR6/6) 石炭3%、白雲母2%含ま	SD9 2層一括 加賀利EⅠ～ EⅡ式期
第58図 10	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 残存高：5.9 器厚：1.0～1.2	深鉢口縁部破片。	粘土結作り。 単筋縄文(RL)と単筋縄文(RL)の縦回転による 結束のない縦位羽状縄文。	黒 黒(10YR4/4) にぶい黄褐色(10YR4/3) 石炭2%、金雲母1%、 黒雲母1%含ま	赤土
第58図 11	縄文土器 浅鉢	口径：— 底径：— 残存高：5.1 器厚：1.0～2.3	深鉢口縁部破片。 外反する。内面の一部 に黒痕有り。	粘土結作り。 口唇部に沈線文が流らせ、その後横方向ナ デ。外面はヘラケズリ後、横・縦方向ミガキ。 内面は縦方向ミガキ。	良好 明褐色(7.5YR5/6) 黒(7.5YR4/3) 石炭1%、金雲母2%、 黒雲母1%、長石2%含ま	赤土
第58図 12	縄文土器 浅鉢	口径：— 底径：— 残存高：8.4 器厚：1.1～2.4	深鉢口縁部破片。 底状口縁を呈する。内 面の一部に黒痕有り。	粘土結作り。 口唇部に沈線文が流らせ、その後横方向ナ デ。外面はヘラケズリ後、横方向ナデ。一面 横方向ミガキを施す。 内面に横方向ミガキ。	良好 にぶい黄褐色(10YR5/3) にぶい黄褐色(10YR5/3) 石炭1%、金雲母2%、 黒雲母2%、長石2%含ま	赤土
第58図 13	縄文土器 深鉢	口径：— 底径：— 残存高：3.7 器厚：1.4～2.1	深鉢底部片。 底面の一部に黒痕有り。	粘土結作り。 円盤状の粘土に粘土紐を巻き付けて成形。体 部下部に横方向ヘラケズリ。底部外部ナデ。	不良 にぶい黄褐色(5YR5/4) 黒褐色(10YR3/3)、 石炭5%含ま	SD9 髹土一括

(2) 古墳時代の遺物(第59図 P.L.15-2・16-1)

9号溝より1点、1号地下式坑より2点出土した時期の対応しない土師器と、表土から出土した土師器7点を図示した。以下、図示し得た遺物の特徴及び時期について示すことにする。なお、古墳時代の編年に関しては比田井克仁氏(註1)・櫻村宣行氏の編年に従った。

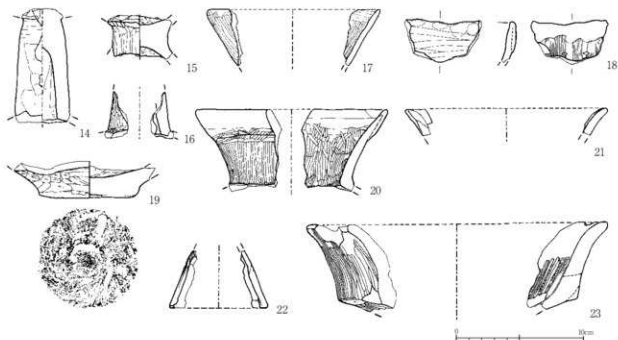
17～21・23は壺である。19は上げ底状の底部である。18は折り返し口縁である。20は貼り付け口縁である。23は有段口縁である。

22は台付甕であり、脚部外面の上部にハケ目、下部に指ナデがあり、裾部が内側に折り返されている。

14～16は高坏である。14は脚部外面にヘラケズリを施し、脚部が中彫らみする形状である。16は外面に丁寧なミガキがあり、脚部から裾部にかけて「く」の字状に屈曲している。

これらの特徴から14は、古墳時代前期末に相当すると考えられる(註1)。

(瀧音 大)



第59図 遺構外出土遺物(古墳時代)

第21表 遺構外出土遺物(古墳時代)観察表

図版番号	器種	流量 (cm)	形態・特徴	製作技法・施文方法	焼成・色調・胎土	備考
第59図 14	土師器 高杯	口径：— 底径：— 残存高：9.1	高杯胴部片。 胴柱部は中斷らみする。	粘土紐作り。 外面は縦方向ヘラケズリの後、横方向ナデ。内面は縦方向ナデ後、下位を横方向ナデ。	並 橙(7.5YR5/8) 石灰2%含	SK37 覆土一様
第59図 15	土師器 高杯	口径：— 底径：— 残存高：3.5	高杯胴部破片。	粘土紐作り。胴部内面は杯部との接合後、粘土を新たに詰め、紐で引手伸ばして接着する。外断縁合部粘土拂で打け。内面は杯部横方向ナデ。外面は接合部・胴部縦方向ミガキ。	並 明赤褐色(10YR6/6) 石灰1%含	SK37 覆土一様
第59図 16	土師器 高杯	口径：— 底径：— 残存高：3.7	高杯胴部から杯部にかけての破片。	粘土紐作り。 胴部内面縦方向ナデ。外面ヘラケズリ後、縦方向ミガキ。胴部下縁から杯部にかけて横方向ミガキ。	並 橙(7.5YR4/4) 石灰1%、白色粗砂5%、 糠5%含	SK37 覆土一様
第59図 17	土師器 埴	口径：(13.6) 底径：— 残存高：4.4	用口縁部破片。	粘土紐作り。 内外面ともに口唇部横方向ナデの後、内外面ともに縦方向ミガキ。	並 明赤褐色(5YR5/8) 石灰1%、白炭粉1%含	表土
第59図 18	土師器 壺	口径：(12.2) 底径：— 残存高：4.3	唇口縁部破片。	粘土紐作り。折り返し口縁。 内外唇口縁部に指頭痕有り。外面横方向ナデ。内面横方向ハケ調整。	並 褐(10YR4/6) 石灰2%、白色粗砂2%含	表土
第59図 19	土師器 壺	口径：— 底径：7.9 残存高：2.8	唇高部片。 底部分が突出する。底面にくぼみ有り。	粘土紐作り。 外面は底部から体部へ縦方向ヘラナデの後、底部ヘラケズリ。体部は一部横方向ヘラナデ。内面は斜め方向ヘラナデ。一部横方向ヘラナデ。	並 に濃い黄褐色(10YR5/4) 石灰3%、小糠2%含	SD9 覆土一様
第59図 20	土師器 壺	口径：(14.8) 底径：— 残存高：6.4	唇口縁部破片。 外反する。内面の一部に黒痕有り。	粘土紐作り。貼り付け口縁。 口縁貼り付け後、内面横方向ナデ。その後縦方向ミガキ。外面ナデ後、貼り付け部ヘラケズリ。その後縦方向ミガキ。体部の接合部横ナデ。	並 明褐色(7.5YR5/6) 石灰4%、白色粗砂1%含	表土
第59図 21	土師器 壺	口径：(16.2) 底径：— 残存高：2.2	唇口縁部破片。 口縁部は外反する。	粘土紐作り。 内外面ともに横方向ナデ。	並 橙(7.5YR4/3) 石灰1%含	表土
第59図 22	土師器 台付壺	口径：— 底径：(7.8) 残存高：4.6	台付壺胴部破片。	粘土紐作り。杯部を内側に折り返す。 外面横方向ナデの後、ハケ調整。内面横方向ナデ。	並 灰褐色(7.5YR5/2) 石灰2%、黒色粗砂2%含	表土
第59図 23	土師器 壺	口径：(23.8) 底径：— 器高：6.9	唇口縁部破片。 口縁部は外反する。	粘土紐作り。 内外面とも口唇部横方向ナデ。外面ハケ調整後、縦方向ミガキ。口縁部下縁外面横方向ヘラケズリ後、ミガキ。	並 橙(7.5YR6/6) 石灰1%、白色粗砂10%、 糠5%含	SK37 覆土一様

(3) 中世以降の遺物〔第60図 P L.16-2〕

表土から出土した中世から近世にかけての遺物18点を図示した。また、土師質土器の編年に関しては川村満博氏(註7)と比毛君男氏(註6)の編年に、常滑の編年は中野晴久氏の編年(註8)に、瀬戸美濃の編年は藤澤良祐氏の編年(註9)に従った。

30～36は土師質土器小皿である。30～34・36はロクロ成形回転糸切の小皿、35は手捏丸底土器小皿である。30はロクロ成形後、内外部に指ナデが施されている。30は急激な立ち上がりとは法量から15世紀に属すると考えられる。31は底部周縁が歪んでいる。33は底部が薄く、体部が厚くなっている。34は緩やかな立ち上がりの様子とは法量から13世紀に属すると考えられる。32は高台と緩やかな立ち上がりの様子とは法量から、35は立ち上がりの様子からそれぞれ14世紀に属すると考えられる。

28と37は常滑産である。37の口縁部はN字状を呈しており、6b期(1275～1300)に属するものと考えられる。

24・25・26は瀬戸美濃産と考えられる。26は播鉢の貼り付け口縁部で、口縁部に一条の沈線を有し、鉄軸が施されており、18世紀に属すると考えられる。24・25は播鉢の体部で、鉄軸が施されている。

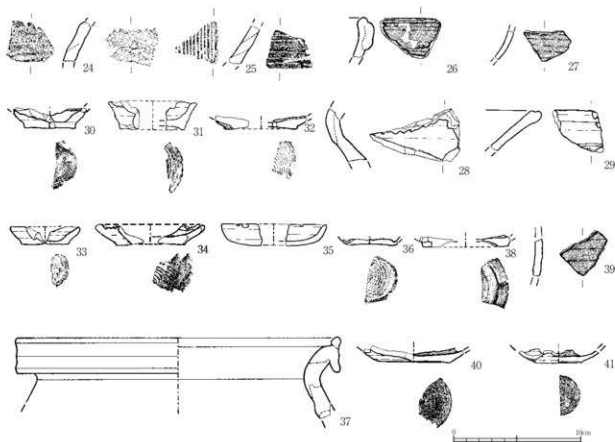
39は徳利の体部で、灰軸が施されている。40・41は灯明皿の底部である。2点とも鉄軸が施されており、重ね焼きの跡が窺える。39・40・41はいずれも近世後期に属すると考えられる。

27・29・38はいずれも器種は不明である。27には内外面に鉄軸が施されている。29の口縁部には棒状工具による押捺痕が施されている。38は削り高台を持つ底部で、軸が施されており、近世後半に属すると考えられる。

(新津 尚之)

第22表 遺構外出土遺物(中世以降)観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	形態・特徴	製作技法・施文方法	焼成・色調・胎土	備考
第60図 24	陶器 (瀬戸美濃) 播鉢	口径：－ 底径：－ 残存高：3.2	播鉢口縁部破片。	粘土紐作り。貼り付け口縁。 上部に1条の沈線を有する。外面ナデ。 内外面ともに鉄軸が施される。	良好 暗赤褐(5YR3/2) 石英2%、白色粗砂3%含	表土
第60図 25	陶器 (瀬戸美濃) 播鉢	口径：－ 底径：－ 残存高：3.0	播鉢体部破片。 すり目の凸面はやや窪み、凹面は半円形を呈する。	粘土紐作り。 くし状工具によるすり目。 内外面ともに鉄軸が施される。	良好 にぶい赤褐(5YR4/3) 石英1%、黒色粗砂2%含	表土
第60図 26	陶器 (瀬戸美濃) 播鉢	口径：－ 底径：－ 残存高：3.0	播鉢体部破片。 すり目の凸面はやや窪み、凹面は半円形を呈する。	粘土紐作り。 くし状工具によるすり目。 内外面ともに横方向ヘラナデ後、鉄軸が施される。	良好 にぶい赤褐(5YR4/3) 石英1%含	表土
第60図 27	陶器	口径：－ 底径：－ 残存高：2.3	体部破片。	粘土紐作り。 内外面に鉄軸が施される。	良好 オリーブ褐(2.5YR4/4) 石英1%含	表土
第60図 28	陶器 (常滑) 壺	口径：－ 底径：－ 残存高：4.2	壺頸部から肩部にかけての破片。 頸部は直立する。外面全体自然粘付着。	粘土紐作り。 内面横方向ナデ。	良好 オリーブ黄(7.5Y6/3) 石英1%、黒色粗砂2%含	表土
第60図 29	瓦質土器	口径：－ 底径：－ 残存高：4.8	口縁部破片。 丸味をおびる。	ロクロ成形。 口縁部に棒状工具の押捺の痕。 内外面横方向ヘラナデ。	良好 にぶい褐(10YR5/3) 石英1%含	表土
第60図 30	土師質土器 小皿	口径：－ 底径：(4.0) 残存高：1.6	小皿体部から底部にかけての破片。	ロクロ成形(右回転)。 底部回転糸切。 内外面ナデ。	並 橙(5YR6/6) 金雲母1%含	表土
第60図 31	土師質土器 小皿	口径：(7.0) 底径：(5.2) 残存高：2.2	小皿体部から底部にかけての破片。	ロクロ成形(左回転)。 底部回転糸切。	並 橙(5YR7/6) 石英1%、白雲母1%含	表土
第60図 32	土師質土器 小皿	口径：－ 底径：(6.0) 残存高：1.1	小皿体部から底部にかけての破片。	ロクロ成形(左回転)。 底部回転糸切。	並 橙(7.5YR6/6) 石英1%、金雲母1%含	表土



第60図 遺構外出土遺物(中世以降)

図版番号	器種	流量 (cm)	形態・特徴	製作技法・施文方法	焼成・色調・胎土	備考
第60図 33	土師質土器 小皿	口径：－ 底径：3.6 器高：1.4	小皿体部から底部にかけての破片。	ロクロ成形(右回転)。 底部回転未切。	並 にぶい褐(7.5YR6/3) 石英1%含	表土
第60図 34	土師質土器 小皿	口径：(7.1) 底径：(5.4) 器高：1.6	小皿体部から底部にかけての破片。	ロクロ成形(左回転)。 底部回転未切。 内外面ナデ。	並 にぶい黄橙(10YR7/2) 石英1%、金雲母1%含	表土
第60図 35	土師質土器 小皿	口径：(8.4) 底径：－ 器高：1.7	小皿体部から底部にかけての破片。	手揉ね。 横方向ナデ。	並 明赤褐(5YR5/6) 白雲母1%含	表土
第60図 36	土師質土器 小皿	口径：－ 底径：(4.4) 残存高：0.5	小皿底部破片。	ロクロ成形(右回転)。 底部回転未切。	並 橙(7.5YR6/6) 石英1%、金雲母1%含	表土
第60図 37	陶器 (常滑) 壺	口径：(25.0) 底径：－ 残存高：6.3	壺口縁部破片。 N字を呈する。	粘土紐作り。 口縁部貼り付け後、ヘラナデ。	良好 栗褐(5YR2/1) 石英2%、長石1%、 白色粗砂3%、礫1%含	表土 6 b 期
第60図 38	陶器	口径：－ 底径：(6.4) 残存高：0.9	底部から高台にかけての破片。	ロクロ成形(左回転)。 高台は削り出しの後、ロクロナデ。 内面の一部に釉が施される。	良好 黄褐(2.5YR5/3) 石英1%含	表土
第60図 39	灰釉陶器 徳利	口径：－ 底径：－ 残存高：2.9	徳利体部破片。	ロクロ成形。 外面と内面の一部に灰釉が施される。口 クロナデ整形が施される。	良好 オリーブ黄(5Y6/4) 石英1%含	表土
第60図 40	陶器 灯明皿	口径：－ 底径：(5.4) 残存高：1.2	灯明皿底部破片。 内面に重ね焼きの痕が見られる。	ロクロ成形(左回転)。 底部回転未切後、ヘラズリ。 鉄釉が施される。	良好 にぶい赤褐(2.5YR5/3) 石英1%含	表土
第60図 41	陶器 灯明皿	口径：－ 底径：(3.4) 残存高：1.1	灯明皿底部破片。 内面に重ね焼きの痕が見られる。	ロクロ成形(左回転)。 底部ヘラナデ。 鉄釉が施される。	良好 黄橙(7.5YR7/8) 石英1%含	表土

第3節 まとめ

今回の調査は神明遺跡の約2,000㎡を調査した。北西原遺跡や神明遺跡第3次調査区からも確認された古墳時代前期の竪穴住居跡、山川古墳群や北西原遺跡からは確認されていたが神明遺跡では初めて確認された古墳、神明遺跡第3次・第4次調査区から確認された中世の遺構群と同時期の掘立柱建物跡、過去の地図から近世・近代に使用していたと判断された道路状遺構など様々な時期・性格の遺構が確認された。

竪穴住居跡は、調査区東北部に存在する北西原遺跡、及び南部に存在する神明遺跡第3次調査区で確認された集落と同時期である古墳時代前期のもので、12号住居跡と同じような焼失住居や主軸方向、規模に類似する住居跡が北西原遺跡で確認されている。両遺跡は同一の集落であり、本調査区は集落の東側に位置する。時期は、常名台遺跡群で多く確認される古墳時代前期であるが、12号住居跡は出土遺物から前期後半と考えられる。また12号住居跡出土の炭化物の自然科学的分析から、木材はどれも樹齢の高い大木を建材に加工して使用していたことがわかり、それまでに台地上に二次林化していない大木が生えていたことや、大木を加工する技術を持つ集団が住んでいたということが考えられる。

前期以降は台地上から集落が消え、終末期にかけての古墳が多くみられる。1号墳は、神明遺跡で初めて確認された古墳である。遺物も少なく、破壊されているが、その形態の特徴から終末期の箱式石棺であると考えられる。昭和48年(1973)に発見され、前回は調査された山川古墳群3号墳も箱式石棺である。

掘立柱建物跡は、本調査区南部の第4次調査区内からもピット群とともに確認されている。本調査区の掘立柱建物跡と同じく13世紀代の遺構であり、何らかの関係があると考えられる。調査区内の掘立柱建物跡の変遷は、9号溝の時期が出土した土師質土器から13世紀前半とすると、溝に切られる16号掘立柱建物跡が最も古く13世紀前半以前、溝と主軸方向を同じくする12号掘立柱建物跡が同時期の13世紀前半、12号掘立柱建物跡を切る11号掘立柱建物跡は13世紀半ばから後半と思われる。11号掘立柱建物跡を切る13号掘立柱建物跡は13世紀後半、主軸方向が同じ15号掘立柱建物跡も同様に13世紀後半と推測した。11・13号掘立柱建物跡は溝をまたいでいることから、これらの掘立柱建物跡が営まれていたときにはすでに9号溝が埋没していたことがわかる。11・12号掘立柱建物跡は礎石と庇を持つ構造になっている。柱穴の規模や礎石を持つことから重厚な建物を支えていたことが窺える。13・15・16号掘立柱建物跡は、どれも柱穴の規模が11・12号掘立柱建物跡に比べて明らかに小さく、礎石を持たないことから性格の違いが窺い知れる。調査区北よりに掘立柱建物跡が集中することから本調査区の北側に中世の遺構が拡張する可能性がある。

1号地下式坑は、14世紀前半以前に天井崩落が起こったと考えられているため、時間的に掘立柱建物跡との関係は否定できない。

道路状遺構は調査区全域を巡っている。明治時代の迅速図、地籍図からその実態を把握できた、興味深い遺構である。東の谷に沿った南北に走る道と西の平坦部に東西に走る道があり、地籍図と1号道路状遺構の消長から、T字の交差点から逆十字の交差点へと変遷していることがわかる。また1号道路状遺構は地籍図から近世まで遡ることができた。

今回の調査によって常名台遺跡群の古代・中世を解明する重要な資料を提示できたといえるだろう。

最後に、この調査と整理作業には、数多くの方のご協力や御教授、励ましを頂きました。一人一人の御芳名を記すことはできませんが、ご厚意を賜った方々に心よりお礼を申し上げます。

(中田 徹)

- 註1 比田井克仁 1994「南関東における庄内式併行期の土器」[庄内式土器研究]Ⅲ 庄内式土器研究会
- 註2 石橋充 1995「常総地域における片岩使用の埋葬施設について」
[筑波大学先史学・考古学研究]第6号 筑波大学歴史・人類学系
- 註3 中野晴久 1997「瓷器系中世陶器の生産」[瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要]第5巻 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 註4 1号地下式坑片口跡(6)については中野晴久氏に御教授いただいた。
- 註5 1号地下式坑平坑(11)については伊藤嘉章氏に御教授いただいた。
- 註6 比毛君男 2003「神明遺跡における中世遺物と遺構の検討—土器皿と堀、建物の界内事例との比較—」
[山川古墳群確認調査・西谷津遺跡・北西原遺跡第6次調査・神明遺跡第4次調査] 西谷津遺跡調査会
- 註7 川村満博 2003「茨城県南部を中心に見た12世紀後半～15世紀のロクロ成形かわかけについて」
[研究ノート]12号 茨城県教育財団
- 註8 中野晴久 1995「〔2〕常滑・渥美」[概説 中世の土器・陶磁器] 真陽社
- 註9 藤澤貞祐 1988「赤津村・窯跡の編年の研究」[瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要]Ⅲ 瀬戸市歴史民俗資料館

第23表 神明遺跡第5次調査遺構一覧表

種類	遺構名称	表記記号	時代	性格・特徴	出土遺物
住居	11号住居跡	SH11	古墳時代前期前半	緑泥石製の勾玉出土	土器器1、石製勾玉1
	12号住居跡	SH12	古墳時代前期後半	捨矢住居	土器器11
	13号住居跡	SH13	古墳時代前期後半	捨て替えの遺跡有り	土器器1
	5号住居跡	SI 5	古墳時代前期	粘土敷きの炉	土器器1
孤立柱建物	11号孤立柱建物跡	SB11	13世紀前半	不明 瓦、礎石あり	瓦葺1
	12号孤立柱建物跡	SB12	13世紀前半～中頃	不明 瓦、礎石あり	なし
	13号孤立柱建物跡	SB13	13世紀後半～14世紀前半	不明	なし
	15号孤立柱建物跡	SB15	13世紀後半～14世紀前半	13号孤立柱建物付属施設	なし
	16号孤立柱建物跡	SB16	13世紀前半以前	不明	なし
古墳	1号墳	TM 1	古墳時代終末期	楕円石棺 人為的破壊を受ける	なし
地下式坑	1号地下式坑	SK37	14世紀前半以前	不明	土器質土器1、陶器(常滑)13、(渥美)2、(他)1、礎石1
土坑	39号土坑	SK39	縄文時代中期以降	不明	縄文土器5
	41号土坑	SK41	縄文時代	不明	縄文土器1
	47号土坑	SK47	不明	不明	なし
	51号土坑	SK51	縄文時代以降	不明	縄文土器1、陶器(常滑)1
	56号土坑	SK56	縄文時代以降	不明	なし
	52号土坑	SK52	古墳時代中期以降	不明	土器器2
	57号土坑	SK57	古墳時代前期後半	不明	土器器1
	16号土坑	SK16	中世	粘土採掘坑	なし
	42号土坑	SK42	中世	不明	なし
	53号土坑	SK53	中世以降	不明	陶器(渥美)1
	30号土坑	SK30	不明	不明 粘土が詰まっている	なし
	38号土坑	SK38	不明	炉	なし
	40号土坑	SK40	不明	不明 崩壊されている	なし
	38号土坑(A・B)	SK38	不明	不明	なし
	43号土坑	SK43	不明	不明	なし
	44号土坑(A・B・C)	SK44	不明	不明	なし
	45号土坑	SK45	不明	不明	なし
46号土坑	SK46	不明	不明	なし	
48号土坑	SK48	不明	不明	なし	
55号土坑	SK55	不明	不明	なし	
54号土坑	SK54	不明	不明	なし	
溝	9号溝	SD 9	13世紀前半前後	区画溝	土器質土器1
	1号溝	SD 1	近世以降	地権溝	なし
	11号溝	SD11	近世以降	不明	なし
	10号溝	SD10	不明	不明	なし
	13号溝	SD13	近現代	地権溝	なし
道路状遺構	1号道路状遺構		近世	明治13年作製測量図記載無	なし
	2号道路状遺構		近世以降	明治20年以降の地籍図記載	なし
	3号道路状遺構		近世以降	明治20年以降の地籍図記載	なし
	4号道路状遺構		近世以降	明治20年以降の地籍図記載	なし
	5号道路状遺構		近現代	1号道路放棄後に構築	なし

第5章 考察

第1節 古墳時代前期の住居跡

今回の神明遺跡第5次調査の発掘調査の結果、縄文時代から中世までのいくつかの遺構が検出された。第1節では検出された遺構のうち、検出状況の良い12号住居跡について、住居構造や出土遺物の性格・時期について考察していきたい。

12号住居跡の上屋構造と埋没過程の時間幅について

12号住居跡の立地、規模、内部構造についてはp17～23の報告文と図を参照していただきたい。ここでは12号住居跡が焼失住居であることから、焼土や炭化物を含めた覆土堆積状況と遺物出土状況より、住居の火災状況の把握と上屋構造の復元を行い、本住居の使用時から埋没完了までの時間幅について考えていきたい。

12号住居跡の堆積層の分類は、①住居の最終生活面より古い貯蔵穴2の堆積層を最も古い層とし、②最終的な生活面の堆積層、③住居使用終了時から火災までの堆積層、④火災時の堆積層、⑤火災以降の堆積層となる(第1表)。①は貼り床の下から検出されたため、最も古い堆積層として捉えた。②は最終的な生活面を判断するものであり、③は使用終了から火災までの時間幅を示す手掛りとなる。④は火災の状況と上屋構造の復元を可能とし、⑤は火災後の住居跡地の二次的使用の有無を知ることができる。

No	堆積層分類名	対応層
①	住居最終使用時以前の堆積層	貯蔵穴2-黒褐色土
②	住居最終使用時の堆積層	貼り床-住11～13層、炉-住8層・炉1～2層・焼土1～2層
③	住居使用終了時から住居火災直前までの堆積層	壁溝-住9～10層、貯蔵穴1-貯4・5層
④	住居火災時の堆積層	上屋構造-焼土1層・住3～7層 貯蔵穴1-貯4層・焼土層、貼り床-焼土2層
⑤	住居火災以後の堆積層	遺構外からの流入土-住1～3・7層 貯蔵穴1-1～3層

※本調査では、住3・7層は火災以前、以後のどちらの堆積にも分け難いため、④・⑤の両方に属することにする。

※焼土2は、火災時に貼り床が被熱したため発生したので、④に入れた。

第1表 堆積層分類表

堆積層の特徴としては、②に位置する貼り床層の上面が被熱しており火災の影響を直に受け、特に住居中央に著しく見られること、③の壁溝の堆積層には遺構外からの流入土の混入がみられないこと、④に位置する焼土塊や炭化物が床面直上付近に堆積し、住居中央を囲むように壁際付近にみられること、⑤の堆積層に遺物が集中して出土するような状況が検出されなかったことである。

以上のことから、住居の火災状況と上屋構造の復元を考える。堆積層の特徴より、③の壁溝の堆積層の状況から本住居は火災まで倒壊していないため、遺構外からの流入土が入り込まない構造であったことが窺える。②の床面の被熱状況や④の焼土塊や炭化物の堆積状況より、本住居の火災はほぼ全焼であり、住居中央では完全燃焼、壁際付近では不完全燃焼であったことが推測できる。火災状況に踏まえ焼土と炭化物の在り方より、上屋構造は上部に草葺、下部に土葺(註1)がなされた堅穴住居であると想定できる(註2)。宮本長二郎氏の分類(宮本 2004)によると、二段伏屋式住居(挿図1)という住居形態であり、この住居形態の存続期間を弥生時代前期から古墳時代後期に位置づけていることから、本住居の構造として矛盾しないといえよう。

次に12号住居跡の使用から時間幅について考えていきたい。第2表は本住居の遺物の出土状況と上記の層分類との対応を示したものである。



挿図1 住居断面模式図(宮本2004一部改変)

No	住居共伴	出土位置	出土堆積層の状況	位置確定時期	層分類との対応
1	○	床面直上	火災時に落下した上屋構造の構築土	～火災直前	③
2	◎	床面直上、壁溝直上、貯蔵穴1直上	壁溝の9層、貯蔵穴1の5層	～廃棄直前	③
3	○	床面直上		～火災直前	③
4	○	床面直上		～火災直前	③
5	△	黒褐色土中	火災時に落下した上屋構造の構築土	～火災時	④
6	○	貯蔵穴1焼土層上位	上部は貯蔵穴1の3層、下部に焼土層	～火災直前	④
7	○	黒褐色土中、貯蔵穴1底面直上	焼土を含む黒褐色土、貯蔵穴1の5層	～火災直前	③⑤
9	◎	貯蔵穴2底面直上	貼り床の下の黒褐色系の土	～使用時	①
10	○	床面直上	火災時に落下した上屋構造の構築土	～火災直前	③
11	○	住居6層	火災時に落下した上屋構造の構築土	～火災直前	③

※◎・・は確実 ○・・可能性高 △・・可能性低 ※No.1・5・10・11の構築土、No.7の黒褐色土は床面直上である。

※No.7は再流入のため再流入の前後の位置を示した。

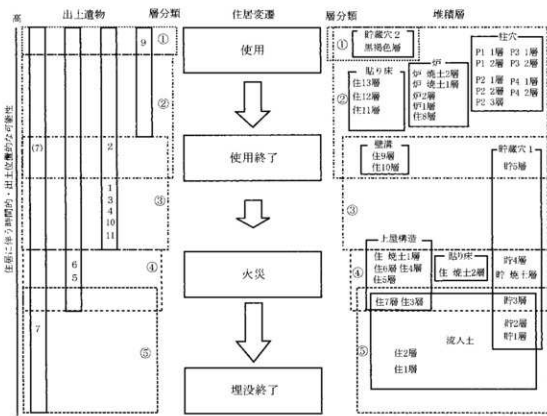
第2表 遺物出土状況

①の遺物は、本住居での生活時、またはそれ以前の時期と関わる可能性が高いと考えられ、それに値する時期を導く可能性が高い。②として明確に示せる遺物はないが、住居の最終的な使用時期を示すことができる。③の遺物は住居使用時に使用されていた可能性は高いが、住居の使用が終了してから火災までの間に遺棄された可能性もある。④の遺物は住居火災時に混入した可能性が高い遺物であり、本住居に伴う可能性は低い。⑤の遺物は住居火災後に遺構外からの流入土に紛れた遺物であり、本住居に伴う可能性は極めて低い。また、出土遺物の時期については後に詳細な検討しており、それによると古墳時代前期後葉に値すると考えている。

では、これまで述べた本住居に関する覆土堆積状況、遺物出土状況、住居構造より、使用時から埋没完了までの時間幅を考えていきたい(挿図2)。遺物出土状況と覆土堆積状況より、本住居の上限年代を示す最終的な使用面以前の堆積層に位置する増(9)と火災時の堆積層に位置する高坏脚部(5)の時期の差はなく、各々の出土層の時間的間隔は短く考えられる。堆積層は①→②→③→④の過程でたどる。②の時間幅は不明であるが、③の時間幅は壁溝の堆積状況を考えて短時間であると想定できる。住居構造では、③の状況から上屋構造が壊れていないことや柱穴が4本のみであること、貼り床の貼り直しなど住居構造の作り直しの痕跡がみられないことより、建て直しの可能性が低いと考えられる。したがって、①-④までの時間幅を長時間として捉えることはできないとするのが妥当である。

つまり、12号住居跡は古墳時代前期後葉を上限とし、本住居の使用時から火災までの一連の過程は比較的短い時間であったと想定でき、住居使用終了後に時間を置かず火災に至ったと考えられる。また、火災後の住居跡地の二次的使用痕跡は見られないことより、自然堆積による埋没であると考えられる。しかし、住居の掘り方の掘り込み面が不明であることより、時間幅の追求はできなかった。

(林 紘太郎)



挿図2 住居変遷図

註

(1) 土葺屋根の構造について、宮本氏は「垂木を地上面から桁や棟木に間隔狭く配り、垂木の間から土がもれ落ちないように茅や草の束を垂木上に敷きつめ、土を覆う方法」と述べている。「草葺のように垂木上に木舞を配って縄で草を結える手間が省ける」ことより、長く存続し、広く普及したという(宮本2004)。

(2) 住居中央の被熱が著しいのは、上屋構造の上部は草葺であり、燃えている最中に床面に落下し中央部の床面で完全燃焼したためであろう。そのため焼土塊や炭化物がみられない。

参考・引用文献

- 宮本長二郎 2004「遺跡から推測する古代建築の形(1)住まいの形式」『建築土』日本建築士連合会
 高橋泰子 2002「焼失住居の一考察—堅穴建物の上部構造復元をめぐる—」『土壁』第6号 考古学を楽しむ会
 石野博信 1990『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館

12号住居跡出土の土器について

時期の検討 柱状脚高環、小型埴が出土することから、比田井氏編年(註1)の古墳時代前期Ⅲ段階であると考えられる。この段階は小型器台・小型高環・元屋敷系高環が消失し、畿内系の柱状脚高環、まれにX字器形台が出土しはじめる。前段階に波及した畿内系の小型埴も引き続き使用されている。

集落内での類別 ここでは、同一の集落である北西原遺跡と神明遺跡(註2)で検出された同時期(比田井氏編年Ⅲ段階)の住居跡出土土器と比較を行い、12号住居跡の集落内での位置付けについて考察する。

(1) **高環** 12号住居跡の高環は、柱状脚高環と「八」の字状脚柱部を持つもの二種類に分類できる。

5(註3)は柱状脚高環である。2も環部のみが残存であるが、同種のものと考えられる。常名台集落から出土する柱状脚高環の脚柱部は、中央部が若干膨らむ特徴を持つ。同様のものが、常名台集落のⅢ段階に

属する住居跡17軒中15軒より合計25点出土しており、集落での主体的な高坏の形態と考えられる。

一方、「ハ」の字状に広がる脚柱部を持つものは1である。坏部の形状・裾部の形状・内外面の調整技法は、主体的な柱状脚高坏と共通することから、柱状脚高坏の影響を受けていると考えられる。しかし、脚柱部の形状が異なることや、脚柱部の内面を棒状の工具で刺突した痕跡を残すことなど異なる点がある。よって、柱状脚高坏だけではなく、系統の異なる高坏の影響も受けている可能性が考えられる。1と同形態の高坏は常名台集落では出土しておらず、客体的なものであったと判断できる。

(2) 罎・小型罎 6は、口縁部が外反する特徴を有する。この罎は常名台では出土例がなく、客体的なものである。10はミニチュアとでも呼ぶべき小型罎であるが、法量・形態の面で言えば、これも常名台集落では客体的なものと考えられる。9は小型罎で、口縁部に稜を持つ。9も常名台集落で主体的なものではない。

(3) 壺 7は面取り口縁の壺である。常名台集落で出土する壺の口縁部は、折返し口縁・二重口縁・単口縁の三種が確認できるが、面取りした壺は見られない。器種は異なるが、甕では数点面取りを行ったものがある(註4)。これらの甕はいずれも比田井編年Ⅰ・Ⅱ段階に該当するものであり、7と同時期の甕は確認できない。7の口縁部を面取りする特徴は、先行する時期にあった甕の要素を残したものと思われる。

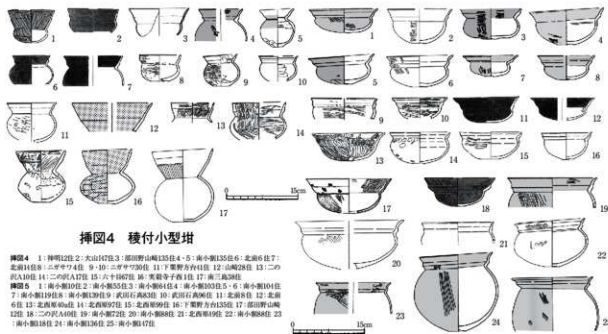
器種を超えた類似性 12号住居跡出土遺物は個別の検討から、常名台集落では客体的なものが多い傾向にあることが分かる。細部の顕著な特徴から客体和判断したが、その点を除けば主体的な製品と共通する点が多い。では、細部の違いはどのような要因によるものであろうか。小型罎を例に考えてみたい。

12号住居跡出土の小型罎(挿図4:1)は、畿内からの波及期(比田井編年Ⅱ段階)の形態的特徴を強く受け継いでおり、この時期の一般的なものである。しかし、本例は報告の通り口縁部にゆるい稜をもつ(以下、仮に稜付小型罎と呼称する)という点で常名台では客体的なものである。この点に注目すると、茨城県内で管見

に触れた類例は14遺跡42例である(挿図3)。例示したものは器形から大きく小型罎と鉢の二つに分けられる。ひたちなか市部田野山崎遺跡出土の一例(挿図4:3)は全体的な器形・調整方法においても本例と酷似し、相伴遺物から時期的にも並行する。しかし、その他の稜付小型罎を見ると、形態は様々で、一部中期に下る例(挿図4:15~17)も含まれており、罎形のものも県内でも稀な例である。そこで、鉢形のものに注目してみると42例のうち25例が該当する(挿図5)。これらは畿内系の「屈曲口縁鉢」(註5)と呼ばれる一群である。立花実氏によれば、屈曲口縁鉢は布留Ⅰ時期には関東地方に波及し、柱状脚高坏の盛行するころには消滅するという。これは、比田井編年のⅡ段階からⅢ段階に相当する。出土数が突出する茨城町南小割遺跡を除けば、罎形のものと同様、類例は少ない。茨城県域の屈曲口縁鉢はⅡ~Ⅲ段階を通して、体部付近が内湾し、口縁部が高くなる立花分類のD類(挿図5:2・14~16・22など)が最も多く、体部がやや浅く、屈曲に著しい崩れが見られ、ゆるい稜のようになるB類(挿図5:13・17)がⅢ段階に現れる(註6)。常名台集落では屈曲口縁鉢が4例確認されており(挿図5:13~15・21)、集落の人々々は屈曲口縁鉢に接する機会があったであろう。さらに、北西原遺跡40a号住居からはB類に相当する屈曲口縁鉢(挿図5:



挿図3 本節関連遺跡



挿図4 稜付小型埴

挿図4 1: 神明12住2・大山147住3・原山野山崎135住4・5・南小瀬135住6・北原6住7・北原14住8・ニギサワ4住9・10・ニギサワ30住11・下栗野方倉11住12・山崎28住13・二の尻A10住14・二の尻A17住15・六十1467住16・美濃寺子西1住17・南三島38住18
 挿図5 1: 南小瀬10住2・南小瀬35住3・南小瀬6住4・南小瀬103住5・6・南小瀬104住7・南小瀬119住8・南小瀬129住9・西沢116南30住10・武田在西原住11・北原8住12・北原6住13・北原野山崎住14・北原99住15・北原野山崎15住16・下栗野方倉135住17・原山野山崎12住18・二の尻A10住19・南小瀬2住20・南小瀬8住21・北原499住22・南小瀬88住23・南小瀬18住24・南小瀬136住25・南小瀬17住

挿図5 屈曲口縁鉢および関係資料

13)が出土しており、ゆるい稜、上げ底、ヘラミガキや赤彩など神明12号住居例との関連性が窺える。以上から、屈曲口縁鉢B類のようなゆるい稜を削出す手法が神明12号住居の稜付小型埴に採用された可能性がある。そのような現象を示唆する一例を挙げると、南小瀬遺跡(註7)では、甕にも屈曲口縁が採用されているものが確認できる(挿図5:19・23~25)。しかも、このような甕は口縁部の形態だけでなく、ヘラミガキや赤彩など、細部の技法においても屈曲口縁鉢との共通性を見せる。当該期に一般的な単口縁ハケメ甕やS字甕とは一線を画すものである。

このような器種を超えた類似性は出土状況からも窺える。①通常的小型埴、②稜付小型埴、③屈曲口縁鉢(甕含む)それぞれの共伴関係を図示したものの中で確認すると、①+②が7例、①+③が14例、②+③が1例、①+②+③が1例である。肝心の屈曲口縁鉢と稜付小型埴、3器種全ての共伴例はわずかに1例ずつである。しかし、小型埴と屈曲口縁鉢、小型埴と稜付小型埴は共伴例も多く、同時期に相互の情報を密に共有していることは間違いない。したがって、他地域に系譜が求められる可能性も十分にあるが、神明12号住居の稜付小型埴も屈曲口縁鉢からの影響を受けている可能性が考えられる。

まとめ

- ①火災状況から二段伏屋式竪穴住居であり、廃棄から火災までの期間は短かった。
- ②出土土器は比田井編年Ⅲ段階に位置付けられ、集落内では客体的な性格をもつ。
- ③小型埴(挿図4:1)については屈曲口縁鉢から何らかの影響を受けた可能性がある。

(清地 良太・浅間 陽)

註

- (1)比田井克仁 1994「南関東における庄内式併行期の土器」『庄内式土器研究会』
- (2)本書第二章参照。常名台、あるいは常名台集落といった場合、ここでは神明遺跡と北西原遺跡を指す。

- (3) 本書p22第15図、12号住居跡出土遺物の遺物番号と対応する。
- (4) これらは北陸東部系の「千種甕」と呼ばれる甕である。比田井編年1段階には北陸系の土器を用いた人々が強く関与していた可能性が指摘されているが、Ⅲ段階にははは、そのような影響は見られない(赤坂亨 2002「神明道跡出土遺物の検討—古墳時代前期の土器を中心に—」『常名台遺跡群確認調査・神明道跡(第3次調査)』土浦市・常名台遺跡調査会・土浦市教育委員会)。
- (5) 他にも「S字口縁鉢」、「小型丸底鉢」などの名称があり、小型器台・小型型とあわせて「小型精製土器群」とも呼ばれている。
- (6) 立花氏は体部の深いA類から体部の浅いC類へおおよそに変遷するとしているが、氏も指摘する通り、関東の土師器編年が畿内編年の細分に追いついていないため、あくまで目安でしかない(立花実 1992「東日本の屈曲口縁鉢」『西相模考古』第1号 西相模考古学研究会)。本節では比田井編年に準拠する。
- (7) 南小淵道跡では出土する甕の多数が波状口縁を呈する点や高坏にも透かし孔が入るなど県内でも異質な性格をもつことには注意を要するが、比田井編年の基準となる小型埴、小型器台、柱状脚高坏等も出土しているため極端な年代の逸脱はない。

第2節 神明道跡検出の11・12号掘立柱建物跡について

神明道跡5次調査で検出した中世の遺構は地下式坑1基、掘立柱建物跡5棟、溝1条を検出した。特に5棟の掘立柱建物跡のうち2棟は、柱穴内に礎石を有するものであり、神明道跡では、今まで検出されていないものであった。今回は11・12号掘立柱建物跡(註1)を取り上げ、当掘立柱建物跡の性格および特徴を茨城県下の掘立柱建物跡および礎石建物と比較、検討することを目的とする。

1 11・12号掘立柱建物跡の年代 11・12号掘立柱建物跡は、柱穴内から掘立柱建物跡に伴う遺物が出土していないため、近接する9号溝から出土した土師質土器から年代を導いている。土師質土器の年代は比毛君男氏の編年に従い、13世紀前半に位置すると判断した。12号掘立柱建物跡の年代は、主軸方向が9号溝の主軸とほぼ平行であることから、13世紀前半～13世紀中頃であると考えられる。また、11号掘立柱建物跡はピットの切り合い関係から12号掘立柱建物跡および9号溝よりも新しいことから、13世紀中頃～13世紀後半の時期であると考えられる。なお、pit3から元豊通寶(1078年初鑄)が出土しているが、年代に直接的には関係しない。

2 11・12号掘立柱建物跡の特徴 県下で検出されている掘立柱建物および礎石建物との比較の前に、再度11・12号掘立柱建物跡の特徴を確認したい。詳細は報告文に譲るが、①柱穴内に礎石が据えられている。②礎石下に版築(註2)が施されている。③建物の北側に庇を持つ。④身舎2間×3間、庇を含め3間×3間の建物である。⑤平面形は方形を呈する。以上の点が、11・12号掘立柱建物跡に共通する特徴である。また、報告文に記載していないが、補足として、11号掘立柱建物跡の総面積は36.72㎡、12号掘立柱建物跡の総面積は36.84㎡である(註3)。

3 茨城県内の掘立柱建物跡及び礎石建物(挿図1) 県下で報告されている掘立柱建物跡で、11・12号掘立柱建物跡と同様に柱穴底面に礎石を据えている建物は以下の建物である(註4)。

境内向山遺跡[川村2003] 中世では、掘立柱建物跡の他に欄列・井戸・溝が検出されており中世集落の様相を呈している。大型の掘立柱建物が検出されていることから、屋敷跡であると考えられる。

第3号掘立柱建物跡の規模は、桁行14.7m、梁行8.1mの7間×4間で、平面は長方形を呈する。身舎は桁行14.7m、梁行3.9mの7間×2間であり、庇または縁が南北に1間(2.1m)伸びている。総面積は119.07㎡である。石材は雲母片岩を用いており、礎石下は版築されていない。

第5号掘立柱建物跡の規模は桁行8.90m、梁行4.20mの4間×2間で平面は長方形を呈する。総面積は37.38㎡である。礎石の石材は雲母片岩が用いられており、pit2・3・10・11では柱穴底面からさらに一

段低い位置に礎石が埋め込まれている。

第6号掘立柱建物跡の規模は北側が調査区外となっているために不明である。礎石の石材は雲母片岩を用いている。

第9号掘立柱建物跡の規模は、桁行4.50m、梁行3.30mの2間×1間であり、平面は長方形を呈する。総面積は14.85㎡である。礎石の石材は雲母片岩を用いている。

小泉館跡〔大関他1989〕 中世後期までの館跡である。館の存続期間は13世紀～15世紀までと考えられており、堀・溝・欄列・土坑・地下式坑・井戸・掘立柱建物跡が検出されている。館の中心部である1曲輪中心部(G区)では、無数の柱穴が検出されており、計8棟の掘立柱建物跡が復元されている。8棟の掘立柱建物跡は4期に区分されており、2～4期の掘立柱建物跡には雲母片岩の礎石が柱穴底面に据えられている。また、一部の柱穴については雲母片岩ではなく花崗岩が礎石として用いられている。しかし、概観内では復元した各掘立柱建物跡を図示していないため、建物の規模・面積等を比較することはできない。

神出遺跡〔土生他1999〕 中世では、掘立柱建物跡・地下式坑・火葬墓・溝が検出されている。また、如宝寺という寺の前身地の可能性がある。

9号掘立柱建物跡の規模は、桁行10.6m、梁行8.8mの4間×5間であり、平面は長方形を呈する。また、西側に桁行2.1m、梁行2.1mで2間×1間の張り出し部を持つ。総面積は97.69㎡である。礎石の石材は雲母片岩を用いている。

1号礎石建物跡の規模は不明であるが、東西2間以上、南北3間(6.30m)の総柱建物であり、石東列が西側を除く3面に確認されている。礎石の石材は礎石・根石ともに筑波石を加工したものである。礎石は遺構確認面上に据えられており、礎石下には細かい根石が据えられている。

日向遺跡〔増田1981〕 12世紀後半以降の廃寺跡である。2棟の総柱の礎石建物が検出されており、2棟の礎石建物は基壇上に礎石を据えている。1棟は花崗岩質で造り出しを有する礎石を用いた建物である。この礎石建物は一回り小さな雲母片岩を廊部の礎石として用いている。もう1棟は棟瓦を根固めとする礎石で、寺跡に重複する小型の建物の礎石として使われている。礎石の石材は雲母片岩である。両礎石建物とも概観内では復元した各掘立柱建物跡を図示していないため、建物の規模・面積等を比較することはできない。

長峰城跡〔小澤他2002〕 存続期間は14世紀～16世紀までである。主郭に相当するI郭では、虎口跡から門と思われる礎石建物跡とそれに続く土橋、井戸が検出されている。

第1号虎口跡の規模は、桁行3.12m、梁行2.62mの2間×1間であり、平面は長方形を呈する。総面積は8.17㎡である。礎石の石材は雲母片岩であり、遺構確認面上に据えられている。しかし、報告の中では、礎石が浮いているので、版築をしている可能性がある。また、礎石の間は逆台形の溝によって結ばれている。

4 11・12号掘立柱建物跡との比較

礎石の石材 礎石については、梶内山向遺跡の第3・5・6・9号掘立柱建物跡、小泉館跡、神出遺跡の第9号掘立柱建物跡と第1号礎石建物、日向遺跡、長峰城跡の第I号虎口跡で礎石に雲母片岩を用いている。11・12号掘立柱建物跡も同様に礎石に雲母片岩が用いられており他の遺跡とも一致する。これは、茨城県内では筑波山系が雲母片岩の主な産出地であることから、入手や加工の容易な雲母片岩が石材として広く用いられていた。雲母片岩以外の石材としては、小泉館跡では花崗岩を、11号掘立柱建物跡では、砂岩を用いている。花崗岩も雲母片岩と同様に筑波山系で容易に採取される石材の一つである。一方、砂岩は筑波山の雲母片岩が風化、堆積したもので、河原などで比較的容易に入手できる石材である。雲母片岩に比べ非常にろい状態で出土したが、これは、雨や地下水など水分の影響を受けて劣化したためである。この砂岩は、

ある程度の強度を保持すると推測できるが、入手当初においても雲母片岩よりもろいと考えられる。花崗岩や砂岩など雲母片岩以外の礎石が、意図的に据えられていたかどうかは、今回検出した神明遺跡と小泉館跡以外に事例がないため現段階では不明である。しかし、可能性として1棟の掘立柱建物内で異なる石材を用いていることから、使用石材は雲母片岩を基本とするが、何らかの理由で石材が不足した場合は、周辺で入手可能な石材で補ったと考えられる。礎石の据え方については、基本的に平坦面を上にして据えている。12号掘立柱建物跡のpit1では、礎石が人為的に割られ、片方を反転して据えられていた。これは、柱を礎石の上に載せる際により安定する面を選択したと考えられる。

礎石下の版築 礎石下の版築については11・12号掘立柱建物跡以外では梶内向山遺跡の第6号掘立柱建物跡のpit4が同様に礎石下に版築を持つ。版築はロームブロックや黒褐色粒子を含有しており、柱穴を掘る際に出た掘削土を版築の土として利用している。版築の厚さは柱穴ごとに異なり、11号掘立柱建物跡では1～15cm、12号掘立柱建物跡では1～27cmを測る。版築上に据えられている礎石面の標高は11号掘立柱建物跡では26.40～26.64m、12号掘立柱建物跡では26.57～26.84mである。全体の数値の差は11号掘立柱建物跡では1～24cm、12号掘立柱建物跡では0.8～27cmを測る。最小値と最大値とでは、ずれが大きいものの近接するピット間では、16cm以下と小さくなる。しかし、順序良く版築の厚さが異なるわけではない。県内の掘立柱建物跡では、礎石は柱穴底面直上に据えられており、礎石面の標高は、神田遺跡の第9号掘立柱建物跡で20.16～20.20m、梶内向山遺跡の第3号掘立柱建物跡で18.00～18.28m、第5号掘立柱建物跡で17.84～18.00m、第9号掘立柱建物跡で17.86～17.96m、長峰城跡の第1号虎口跡の礎石建物で24.30～24.40mである。建物の立地により標高は異なるが、誤差の範囲は全体で6～28cmを測り、礎石下に版築を持つ柱穴とほぼ同様の傾向を示す。

標高に関して同様の傾向を示すので、11・12号掘立柱建物跡で版築を用いる要因は、柱の長さによるものではなく、むしろ礎石にあると考えられる。礎石の裏面には表面と異なり加工による凹凸があり、そのまま据えたのでは安定せず、柱を載せることはできない。掘削土を柱穴に詰め、その上に礎石を据えて礎石面を水平に保っている。礎石面の標高を合わせていたとも考えられるが、版築が礎石下のみならず周囲にまで施されているので、版築の目的は礎石を水平に固定するためであると考えられる。

庇 礎石を持つ建物で北側のみ庇を持つ建物は、県内において報告されていない。柱穴内に礎石を持つ建物で庇を持つ建物は梶内向山遺跡の第3号掘立柱建物跡であり、南北に庇を持つ。礎石を持たない掘立柱建物跡では白石遺跡の第4号掘立柱建物跡のみである。他の礎石を持つ掘立柱建物跡では庇を持つ建物は報告されていない。

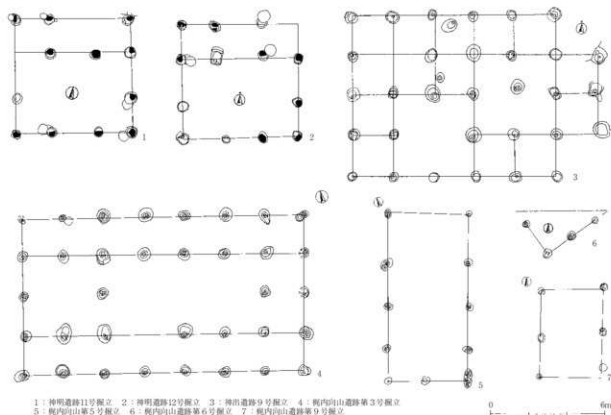
桁行と梁行 11・12号掘立柱建物跡の規模は、身舎3間×2間、庇を含め3間×3間のほぼ正方形を呈する建物である。県内の掘立柱建物跡は、梶内向山遺跡の第5・9号掘立柱建物跡を除き、桁行・梁行ともに11・12号掘立柱建物跡を超える。

建物の面積 11号掘立柱建物跡の総面積は36.72㎡であり、12号掘立柱建物跡の総面積は36.84㎡である。県下の礎石をもつ掘立柱建物跡の総面積は、第9号掘立柱建物跡の14.85㎡を除き、神田遺跡第9号掘立柱建物跡では97.69㎡、梶内向山遺跡第3号掘立柱建物跡が119.07㎡であり、11・12号掘立柱建物跡よりも大きい。総面積において近い数値を示すのは、梶内向山遺跡の第5号掘立柱建物跡の37.38㎡である。県下の礎石を持つ掘立柱建物跡で、総面積において11・12号掘立柱建物跡が相対的に規模の大きい建物に入るかどうかは、事例が少ないため不明である。

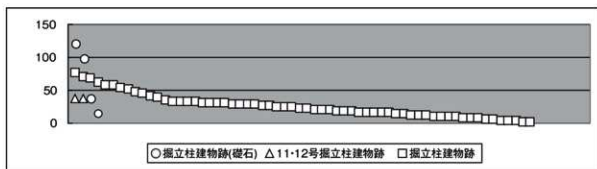
以上、県下の他の事例と比較しながら11・12号掘立柱建物跡の特徴を考察した。その結果、11・12号掘

立柱建物跡は茨城県下の礎石を持つ掘立柱建物跡と石材・面積の点では同じ様相を示すのに対し、礎石下の版築・庇・桁行・梁行の点では、他の掘立柱建物跡とは異なる様相を示した。これが、11・12号掘立柱建物跡のみに見られる特徴かどうかは、現状では不明であり、さらなる発掘調査による資料の増加に期待したい。

また、本論の趣旨とは離れるが、県下で礎石を持つ建物と掘立柱建物との面積を比較した結果、県下の12世紀後半～16世紀前半までの礎石を持たない掘立柱建物の面積は一部の例外はあるが、40㎡以下の建物の割合が非常に高い(挿図2)。この40㎡という数値が一般の建物と非一般的建物とを分ける一つの基準となる可能性があるが、礎石を持つ掘立柱建物跡の資料数が少ないため、現段階では可能性に過ぎない。



挿図1 県下の柱穴内に礎石をもつ掘立柱建物跡



挿図2 12世紀後半～16世紀前半までの礎石・掘立柱建物跡面積比較

5 まとめ 今までの考察から、今回検出した11・12号掘立柱建物跡の性格について考えて行きたい。まず、礎石を用いる建物は、日向遺跡・神出遺跡の礎石建物を始めとして、寺社建築などに用いられ、面積の上からも一般的な掘立柱建物より規模的に大きいので、11・12号掘立柱建物跡は一般の建物とは一線を画する建物であると考えられる。また、11号掘立柱建物跡の柱穴から銭貨が礎石直上で出土していることも、11・12号掘立柱建物跡の性格を考える上で重要である。他県の掘立柱建物跡では、館跡の中核となる建物や寺の柱穴に銭貨が埋納されている事例が報告されている。端的に結びつけることには若干の問題があるが、11・12号掘立柱建物跡の非一般性を補強する根拠となる。

県下の館跡の中核となる建物は、小泉館跡・鳥名前野東遺跡・白石遺跡・屋代B遺跡(註5)を初めとして、館の中核となる建物は溝または曲輪に周囲を囲まれる配置となっている。寺社、館を囲う溝の形態は薬研堀あるいは、断面逆台形の箱薬研状を呈する場合が多く、小泉館跡・鳥名前野東遺跡・白石遺跡・屋代B遺跡なども主体となる建物、または館の周囲を箱薬研堀が巡っている。今回検出した11・12号掘立柱建物を何らかの主体となる建物と仮定するならば、9号溝が断面逆台形を呈していることから、建物を区画する区画溝であった可能性がある。しかし、9号溝は南北どちらに伸びるかは不明であり、可能性にすぎない。また、11号掘立柱建物跡は、9号溝をまたいで北側に立て替えられているので、北側へ館の拡張があった可能性がある。

以上、11・12号掘立柱建物の性格について考察したが、資料的制約が大きく現状では11・12号掘立柱建物は何らかの主体となる建物であった可能性があるとした。

(近藤 貴徳)

註

- (1) 柱穴底面に礎石を用いているので、礎石建物跡と呼称することができるが、柱穴を掘りその底面に根石を据えている。礎石を用いているが、柱を立てる構造自体は掘立柱建物と同様なので、本論では掘立柱建物跡と呼称する。
- (2) 礎石下の土層は、礎石の据えられている範囲よりも広い範囲が硬化している。通常のアタリ痕であるならば、接地している範囲のみが硬化する。しかし、今回は礎石の据えられている範囲よりも広い範囲が硬化しており、明らかに人為的に固めたと考えられるので、版築と呼称した。
- (3) 本論で取扱う掘立柱建物の面積は身舎・下屋・庇を含めた、建物の総面積である。
- (4) 掘立柱建物および礎石建物の年代については、報告書内で記載のあるものについてはその記載に従った。

参考文献

大関武他 1989「小泉館跡—発掘調査概報—」茨城県つくば市教育委員会／小澤重雄 2002「長峰城跡(長峰遺跡・長峰古墳群)」茨城県教育財団／櫻村宣行 1993「白石遺跡」茨城県教育財団／川村満博他 2003「堀内山遺跡」茨城県教育財団／平岡和夫他 1999「東出・神出・中居遺跡」土浦市教育委員会／佐々木義則 1998「茨城における掘立柱建物跡の概観」『常総台地』14 常総台地研究会／佐藤正好 1988「屋代B遺跡」茨城県教育財団／出土銭貨研究会 1997「—特集「地鎮めと銭貨」—」『出土銭貨』第7号出土銭貨研究会／出土銭貨研究会 2004「—特集「銭貨の呪力」—」『出土銭貨』第20号 出土銭貨研究会／寺門千勝 2002「鳥名前野東遺跡・鳥名境松遺跡・谷田部津遺跡」茨城県教育財団／福島県考古学会中近世部会 2001「東北南部に中近世集落の諸問題—掘立柱建物跡を中心として—」『福島考古』第42号 福島県考古学会中近世部会／増田精一他 1981「日向遺跡—昭和54・55年度発掘調査概報」筑波町教育委員会／北陸中世考古学研究会 2004「掘立柱建物から礎石建物へ—北陸中世考古学研究会 第17回資料集—」北陸中世考古学研究会

第6章 総括

土浦市常名台遺跡群神明遺跡の第5次調査の報告書を刊行することができた。土浦市教育委員会のご指導により、駒澤大学考古学研究会を中心とした学生の努力によるものである。発掘調査は2004年8月2日から9月3日まで、土浦市教育委員会のご理解により駒澤大学考古学研究室の発掘実習、および考古学研究会の野外実習として実施することができた。その成果はすでに記述されているように竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡5棟、ピット群、古墳1基、地下式坑1基、土坑19基、溝5条、道路状遺構5条である。

竪穴住居跡は神明遺跡から北西原遺跡に広がる古墳時代前期の集落跡と関連し、集落南東端に位置する一群であることが確認できた。古墳は北西の北西原遺跡と南東の山川古墳群の中間に1基だけ離れて確認されたが、今後、未調査区も含め両者との関連が待たれる。掘立柱建物跡はほぼ南北に軸を取るが、掘立柱建物跡と重複する9号溝とともに、神明遺跡第4次調査の掘立柱建物跡、溝跡とも関連するようであり、中世遺構の北への広がりが確認できた。また、掘立柱建物跡2棟は庇を伴い、版築・礎石を備える重厚な建物であったことが判明し、地下式坑の発見も含めこの地の中世遺構群が、複合的な様相を見せ始めたことで重要性を増したといえよう。道路状遺構は遺構の精査、地籍図や地図の検討から近世に遡る可能性があり、この台地と谷を結び縦横に走る道の変遷の一端が垣間見え、近世・近代の道跡復元に地籍図が重要な意味を持ち、今後発掘調査との摺り合わせにより地域の様相も復元できよう。

発掘調査は夏の炎天下、整理調査はその後、大学における授業の合間に続けてきた。この発掘調査の機会を与えていただいた土浦市教育委員会ならびに上高津貝塚ふるさと歴史の広場の方々には感謝申し上げます。また、調査中には筆舌に尽くせないご指導をいただき、学生の実習の場として多大な成果を上げることができましたことを重ねて感謝申し上げます。

(酒井 清治)



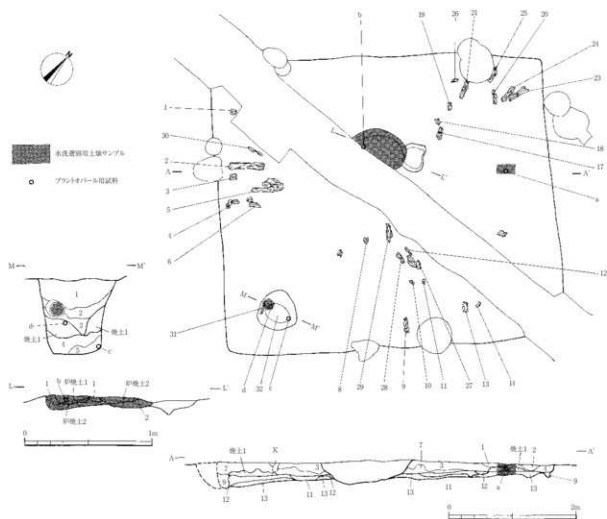
付編：自然科学的分析

神明遺跡第5次調査において、11号住居跡から出土した勾玉及び12号住居跡から出土した炭化物・焼土の自然科学的分析を行った。その成果を示す。

11号住居跡から出土した勾玉については、国立歴史民俗博物館研究部情報資料系の小瀬戸恵美氏に、蛍光X線分析による材質の同定と、穿孔方法の分析を依頼した。

12号住居跡から出土した炭化物と焼土については、榎バレオ・ラボの鈴木茂氏・植田弥生氏に分析を依頼し、炭化物は樹種の同定を、焼土はそれに含まれる植物珪酸体と花粉化石の分析を行った。炭化物は住居から総数32点出土したが、それらのうち状態の良い29点を分析した。焼土は住居跡の東西土層観察用ベルト上(a)、炉跡断面(b)、貯蔵穴最下層(c)、貯蔵穴4層(d)にそれぞれフィルムケースを打ち込んで採取したものを分析した。また、東西土層観察用ベルトの焼土が多く確認できる地点に設定した20cm×30cmの土柱、炉の焼土、貯蔵穴出土層内の焼土を水洗選別用の土壌サンプルとして採集した。水洗選別とその分析は現在進行中であり、報告は後日を期待したい。

下図は、12号住居跡の平面図と土層断面図であり、試料の採取位置を示したものである。



12号住居跡分析試料採取位置

I 神明遺跡出土勾玉の自然科学的分析

国立歴史民俗博物館研究部情報資料系 小瀬戸恵美

1. 目的

11号住居跡から出土した勾玉を対象に、自然科学的手法による分析を行うことにより、制作材料の同定および、その組成を明らかにする。また、X線透過写真により、孔の作成法の検討を行う。

2. 資料

分析を行った勾玉は古墳時代前期前半のものである。緑色不透明であるが、光透過性がある。

3. 分析手法

3-1. EPMAによる含有元素の定性・半定量分析

勾玉構成物質の同定を目的として電子線プローブ・マイクロアナライザー (EPMA) による含有元素の定性・半定量分析を行った。EPMAは真空中で固体試料表面に電子線を照射することにより、試料から2次電子、反射電子、特性X線などが発生することを利用し、発生する特性X線を分光器でわけ、元素の定性定量分析をするものである。本調査ではJEOL社製JXA8200を使用し、第1表の条件で測定をした。

第1表 EPMAの測定条件(EDS)

測定条件項目	摘要
検出器	エネルギー分散型 SiLi半導体
電子ビーム走査範囲	120 μ m \times 120 μ m (500倍設定)
加速電圧(KeV)	15.0
プローブ電流(A)	3 \times 10 ⁻⁷
測定時間(秒)	100
試料室雰囲気	真空

3-2. XRDによる素材の同定

素材の同定を目的としてX線回折法(XRD)により、結晶構造の測定をおこなった。X線回折法はX線の波としての性質とその波長が物質の結晶面内距離に近いことを利用し、物質にX線を入射することにより得られる回折現象を測定することにより、物質の結晶構造を測定するものである。本調査ではRigaku社製RINT2500VPC-MWを使用し、管電圧40kV、管電流300mA、CuK α 線を用いて測定を行った。

3-3. X線透過撮影法

X線透過撮影法はX線が物体を透過するときに物体の密度や厚みによって、透過するX線量が変化することを利用し、物体の内部構造を知るものである。本資料の撮影は国立歴史民俗博物館、永嶋正春助教によって行われた。

4. 結果と考察

4-1. 含有元素の定性・半定量分析

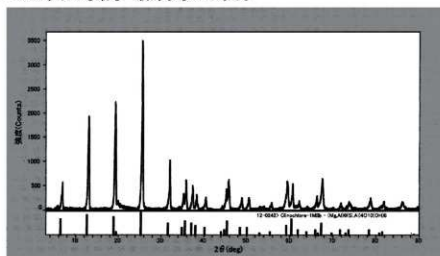
EPMAによる定性・半定量分析の結果、第2表にみられるように、マグネシウム、アルミニウムが30%前後含まれることなど、通常のガラスの組成とは極めて異なる値を示している。ただし、非破壊での測定のため、この元素組成は勾玉表面のものであり、真の値を示しているとは限らない。

第2表 神明遺跡勾玉の分析値(wt%)

資料番号	色調	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	Fe ₂ O ₃
SI-11	緑	0.83	31.28	27.07	37.06	1.27	2.49

4-2. 素材の同定

XRDにより勾玉のX線回折を行ったところ、第1図上-の結果を得た。XRD測定によって回折パターンを示すことより、この勾玉は非晶質なガラスではなく、結晶構造を持つもの、この場合は鉱物を材料として製作されたことが明らかとなった。また、この毛結晶構造を既存のXRDパターン（第1図-下）と照合してみると、ClinochloreのX線回折パターンと酷似していることが明らかとなった。Clinochloreは和名を斜緑泥石といひ、マグネシウム、鉄、アルミのケイ酸塩鉱物であり、その属する緑泥石グループのなかでも最も一般的なものである。



第1図 神明遺跡勾玉のX線回折パターン

4-3. X線透過写真

X線透過写真を第2図に示した。勾玉の孔に対して垂直に撮影された写真（第2図：右）を見ると、孔の中央左付近に不連続な部分が見受けられる。これは勾玉の両方から孔を作成した際にできたものと考えられる。



第2図 神明遺跡勾玉のX線透過写真

5. まとめ

茨城県土浦市常名台遺跡群神明遺跡11号住居跡から出土した勾玉に関して、EMPAによる含有元素の定性・半定量分析及び、XRDによる結晶構造同定を行ったところ、この勾玉の回折パターンはClinochlore（斜緑泥石）の回折パターンと合致し、含有元素及び含有量もその結果と矛盾しないものであった。また、X線透過写真により、勾玉の両面から孔をあけるという手法を用いていることが明らかとなった。

II 神明遺跡焼失住居跡(12号住居跡)出土炭化材の樹種同定

バレオ・ラボ 植田弥生

1. はじめに

ここでは、共存する考古遺物から古墳時代前期後半と考えられる焼失住居跡から出土した炭化材28点の樹種同定結果を報告する。2点は住居内角隅の貯蔵穴から出土したものであるが、26点の多くは住居縁辺から中央部に材の軸方向を向けて出土しており建築部材の可能性が高い炭化材であった。

2. 同定方法

同定は炭化材の一部破片を試料として、まず横断面を手で割り実体顕微鏡で細胞の特徴や配列を観察して分類や種類を予察し、次に材の接線断面と放射断面を片刃の剃刀で弾くように割り各断面を作成し、3断面を走査電子顕微鏡でさらに拡大して材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子㈱製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

当試料は横断面の管孔配列が特徴的で実体顕微鏡レベルで識別可能なコナラ節がほとんどであった。しかし、年輪幅が狭い試料が多くあり材組織が類似するクスギ節との誤同定を避けるため、このような試料は走査電子顕微鏡で晩材部の管孔部を拡大して同定を決定した。

3. 結果

建築材と考えられる26点からは、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節25点と常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属1点が検出された。コナラ節はカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワを含む分類群であるが、これらの材組織は類似性が高く材組織から種類を特定することはできない。アカガシ亜属も同様で、アラカシ・アカガシ・シラカシ・イチイガシ・ツクバネガシ・ウバメガシ・ウラジロガシなどを含む分類群であるが、材組織からは種類を特定できない。コナラ節の材は、年輪幅が1mm前後で年輪幅が狭い材が目立った。また、コナラ節は角材状に加工されたものがあること、破片の一部で年輪数が30~50年輪以上数えられるものがあることから、原材は太く樹齢がかなりある材を利用してたと推測される。アカガシ亜属は管孔配列などから細い材または樹芯部分の材と思われる。しかし、アカガシ亜属の出土位置や産状は、コナラ節と特に違いは見られないので、コナラ節と同様に建築材として利用されていたと考えられる。

貯蔵穴から出土した2点も、コナラ節であった。

同定結果の一覧を、第1表に示した。また、以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材組織の写真を提示する(図版1)。

①コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 1a-1c:(試料番号8) 2a:(試料番号9) 3a:(試料番号12) 4a:(試料番号10)

年輪の始めに中~大型の管孔が1~2配列し、その後は急に径を減じて薄壁で角形の非常に小型の管孔が火炎状・放射状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースが発達している。放射組織は単列のものと同細胞幅が広い放射組織がある。

②コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版1 6a-6c(試料番号20)

集合放射組織を挟み小型の単独管孔が放射状や樹状に配列する放射孔材である。道管の壁孔は小さく交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織はほぼ同性、単列のものと同細胞幅が広い放射組織がある。

4. まとめ

南関東では、古墳時代の住居建築材に同じコナラ属コナラ亜属のクスギ節とコナラ節が多用されていた事例が多いことが知られている(千野1991、山田1993など)。

当遺跡の古墳時代前期末の焼失住居跡(12号住居跡)では、コナラ節の材が主要建築材として利用されていたことが判り、樹種選択性は時代を反映していた。また今回の試料では、コナラ節の炭化材の形状観察から、ある程度大きな原材から板状や角材に加工してから利用していたものが複数検出された。年輪幅の観察からは、年輪幅が狭く材の肥大成長が遅い材が目立ち、一部破片の年輪数だけでも50年輪以上が数えられるものがあったことから、厳しい環境下で、または樹齢が多く長期間生育し続けていたコナラ節の木の材が利用されていたようである。コナラ節は、開けた明るい環境下に多く生育する樹木であり、災害跡地や人為管理下におかれた二次林に普通に生育する。コナラ節が多く利用されていた遺跡の場合、遺跡周辺に二次林が成立していたと解釈されることが多いが、当住居跡のコナラ節の材からは、少なくとも現在行われているような人為的管理下におかれたコナラ節の材ではなく、自然林で生育していた材のように思われた。なお、1点だけであったが検出されたアカガシ亜属は、当地域の自然植生である照葉樹林の主要構成樹種である。

引用文献

- 千野裕道 1991 「縄文時代に二次林はあったかー遺跡出土の植物性遺物からの検討ー」
『研究論集』X p214-249 東京都埋蔵文化財センター
- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成ー用材から見た人間・植物関係史」
『植生史研究』特別第1号 p1-242 日本植生史学会

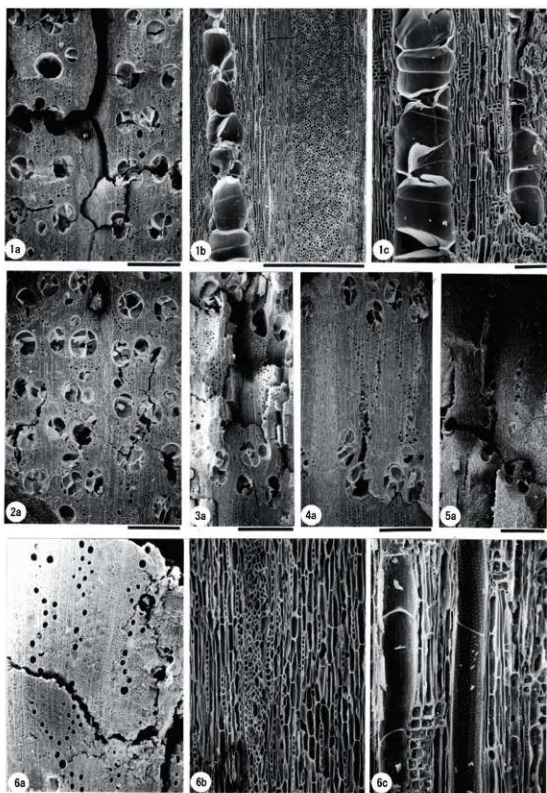
第1表 神明遺跡焼失住居址 SI-12(古墳時代前期後半か中期初頭)出土炭化材樹種同定結果

試料番号	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	木取り	樹種	年輪幅の観察		備考
						連続計数可能部分 を記録した	平均 年輪幅	
1	不能	不能	不能	不明	コナラ節	1年輪2.5mm前後	2.50mm	
2	24.0	9.0	2.5	柱目	コナラ節	13mmで20年輪	0.65mm	ぬか目
3	11.5	6.0	2.5	割材	コナラ節	5mmで4年輪	1.25mm	
4	11.0	3.5	3.5	柱目	コナラ節	5mmで6年輪	0.83mm	芯なし角材状、ぬか目
5	38.5	7.5	2.5	柱目	コナラ節	22mmで22年輪	1.00mm	板状、ぬか目
6	8.0	3.0	4.5	みかん割り	コナラ節	9mmで17年輪	0.53mm	
8	不能	4.0	不能	割材	コナラ節	37mmで54年輪	0.69mm	ぬか目
9	12.0	13.0	2.0	柱目	コナラ節	18mmで31年輪	0.58mm	板、ぬか目
10	8.0	2.0	1.8	割材	コナラ節	1年輪2.5mm前後	2.50mm	ぬか目
11	5.0	1.5	0.2	割材	コナラ節			
12	51.0	3.7	4.4	みかん割り	コナラ節	18mmで9年輪	2.00mm	芯なし角材状
13	19.5	4.0	7.5	みかん割り	コナラ節			芯なし角材状
14	不能	4.0	不能	割材	コナラ節	15mmで13年輪	1.15mm	ぬか目
17	11.0	3.5	3.5	割材	コナラ節	1年輪2.5mm前後	2.50mm	
18	9.0	5.3	2.5	柱目	コナラ節	45mmで55年輪	0.82mm	芯なし角材状、ぬか目
19	不能	不能	不能	割材	コナラ節	1年輪2.5mm前後	2.50mm	
20	13.0	4.0	2.5	不明	アカガシ亜属			細枝または樹芯部の材
21	23.0	4.3	2.7	みかん割り	コナラ節	21mmで32年輪	0.66mm	芯なし角材状、ぬか目
23	32.0	8.0	3.5	柱目	コナラ節	4mmで4年輪	1.00mm	ぬか目
24	23.0	7.0	2.0	みかん割り	コナラ節	20mmで27年輪	0.74mm	芯なし角材状
25	9.5	4.5	3.0	柱目	コナラ節	20mmで28年輪	0.71mm	ぬか目
26	不能	不能	不能	不明	コナラ節			根?または節部?
27	10.5	4.0	1.2	割材	コナラ節	29mmで51年輪	0.57mm	ぬか目
28	6.5	3.0	1.5	割材	コナラ節	24mmで33年輪	0.72mm	ぬか目
29	15.0	4.3	不能	割材	コナラ節	38mmで34年輪	1.12mm	ぬか目
30	9.5	2.0	1.5	割材	コナラ節	1年輪2.5mm前後		
31	39.5	3.3	1.2	柱目	コナラ節			ぬか目、貯蔵穴出土
C-1	不能	不能	不能	不明	コナラ節			貯蔵穴出土

*丸木ではないことは確実だが、遺存が悪く木取りが確定できないものは割材とした。

*碎片で木取りが不明なものを不明とした。

*遺存が悪く計測ができないものを不能とした。



図版 1 神明遺跡焼失住居跡SI-12出土炭化木材組織の走査電子顕微鏡写真

1a-1c: コナラ節 (試料番号8) 2a: コナラ節 (試料番号9) 3a: コナラ節 (試料番号12)
 4a: コナラ節 (試料番号10) 5a: コナラ節 (試料番号26) 6a-6c: アカガシ亜属 (試料番号20)
 a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面 bar: 0.5mm ただし 1c・6b・6cは0.1mm

Ⅲ 神明遺跡の植物珪酸体

パレオ・ラボ 鈴木 茂

1. はじめに

イネ科植物は別名珪酸植物ともいわれ根より大量の珪酸分を吸収し、葉や茎の細胞内に沈積させることが知られている。こうして形成されたものを植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）といい、機動細胞珪酸体については藤原(1976)や藤原・佐々木(1978)など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。

茨城県土浦市に所在する神明遺跡において行われた発掘調査で古墳時代前期後半の焼失住居跡が検出され、炉跡などから炭化材や焼土試料が採取された。以下にはこの土壌試料について行った植物珪酸体分析結果を示し、焼土および土壌中のイネ科植物について検討した。

2. 試料と分析方法

試料は焼失住居跡(12号住居跡)のセクション上の焼土(a)、炉内焼土(b)、貯蔵穴最下層土壌(c)、同貯蔵穴内4層焼土(d)の4試料である。これら4試料について以下の手順に従って植物珪酸体の検出を図った。

試料約1gをトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約40 μ m)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いてプレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

3. 観察結果

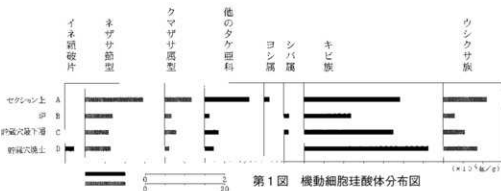
同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各機動細胞珪酸体個数を求め(第1表)、それらの分布を第1図に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料1g当りの検出個数である。

観察の結果、貯蔵穴焼土(d)よりイネの穎(初殻)に形成される珪酸体の破片(図版:写真番号1-b)が若干認められた。また泡状の珪酸体(図版:写真番号2・3)も若干認められた。この珪酸体はコムギの葉の部分で観察されるものの、これがコムギのみで観察されるものであるかどうかは不明であることから現時点では同定根拠には至っていない。さらに写真番号4で示した珪酸体(c)はコムギの穎と同様の形状を示すが、これも同様で同定根拠には至っていない。

最も多く検出されているのはネザサ節型であり、試料aでは100,000個を越えている。ウシクサ族もaで100,000個を越えるなど多く検出されている。クマザサ属型もaで最も高い数値を示しており、他の試料で

第1表 試料1g当たりの機動細胞珪酸体個数

試料番号	試料備考	イネ穎部破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
A	セクション上	0	146,400	68,200	11,400	1,400	0	24,200	110,900	37,000
B	炉	0	69,800	17,100	1,300	0	1,300	11,800	29,000	9,200
C	貯蔵穴最下層	0	59,200	28,400	3,500	0	1,200	22,500	54,400	26,000
D	貯蔵穴焼土	2,200	63,500	11,100	2,200	0	0	31,200	85,800	24,500



第1図 機動細胞珪酸体分布図

も10,000個を越えている。キビ族も全試料ほぼ20,000個以上を示しており、生産量の小さいキビ族としては高い数値を示している。その他ヨシ属やシバ属が若干検出されている。

4. 食料起源のイネ科植物

イネの穎部破片が若干検出されており、古墳時代前期には神明遺跡にイネが存在していたと判断される。またコムギについては同定に至っていないものの、その可能性はあると思われ、これについてはさらに検討したいと考える。

多く検出されているキビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明である。

5. 遺跡周辺のイネ科植物

最も多く検出されているネザサ節型について、関東地方ではアズマネザサを代表とするササ類と考えられる。またウシクサ族についてはススキやチガヤなどが考えられ、遺跡周辺の日のあたる開けたところにアズマネザサ-ススキ群集といった草地が形成されていたとみられる。またこれに雑じる様にエノコログサやイヌビエなどのキビ族やシバ属も成育していた可能性が考えられる。

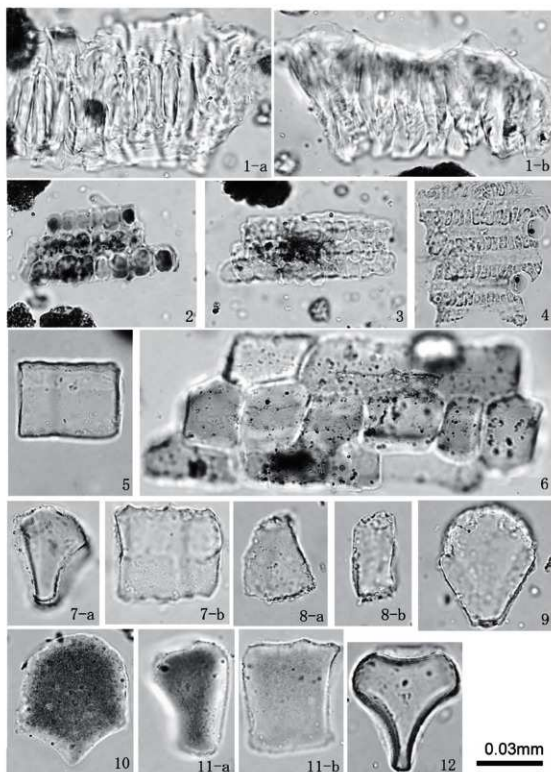
一方クマザサ属型のササ類はおもに森林の下草的存在での生育が推測され、ミヤコザサやスズグケといったクマザサ属型のササ類が遺跡周辺の森林の林下に分布していたと推測される。

6. おわりに

先にも記したが、イネの存在は示されたが、コムギやキビ族について現時点では断定できなかった。よって炉周辺や貯蔵穴内の土壌について種実分析を行うことによりそれらを支持する結果が得られる可能性が期待される。このように多方面からの検討・支持によりその確実性が増すと考えられ、今後種実分析をあわせて検討が望まれる。

引用文献

- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 -」『考古学と自然科学』9 p. 15 - 29
- 藤原宏志・佐々木 彰 1978 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(2) - イネ(Oryza)属植物における機動細胞珪酸体の形状 -」『考古学と自然科学』11 p. 9 - 20



図版 神明遺跡の植物珪酸体 (scale bar:0.03mm)

- 1 : イネ類部珪酸体破片 試料4
 2・3 : 泡状の植物珪酸体破片(コムギ?) 試料4
 4 : 鎖部?珪酸体(コムギ?) 試料3
 5・6 : キビ族細胞珪酸体(5:側面, 6:塊状) 試料3
 7 : ネザサ節型細胞珪酸体(a:断面, b:側面) 試料4
 8 : クマザサ型細胞珪酸体(a:断面, b:側面) 試料3
 9 : 他のタケ亜科細胞珪酸体 (scale bar:0.03mm) 試料3

- 10 : ヨシ属細胞珪酸体(断面) 試料1
 11 : ウシクサ属細胞珪酸体(a:断面, b:側面) 試料3
 12 : シバ属細胞珪酸体(断面) 試料2

IV 神明遺跡産出の花粉化石

パレオ・ラボ 鈴木 茂

1. はじめに

神明遺跡においては古墳時代前期後半の焼失住居跡が検出され、炉跡などから炭化材や焼土試料が採取された。この焼土試料について植物珪酸体分析が行われており、イネの頸部破片が検出されている（植物珪酸体の節参照）。以下にはこの焼土試料を用いて行った花粉分析結果を示し、当時の遺跡周辺の古植生および食べ物に関する手掛かりについて検討した。

2. 試料と分析方法

試料は焼失住居跡（12号住居跡）のセクション上の焼土（a）、炉内焼土（b）の2試料を使用した。この2試料について以下の手順に従って花粉分析を行った。

試料（湿重約5g）を遠沈管にとり、10%の酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体や小レキなどを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混液を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランニンにて染色を施した。

3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉8、草本花粉8、形態分類で示したシダ植物胞子2の総計18である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を第1表に示したが、両試料とも花粉化石の産出状況は悪く、分布図の作成は控えた。

観察の結果、樹木類ではa・b両試料ともに検出されたのはコナラ属コナラ亜属とコナラ属アカガシ亜属のみで、その他試料aからはヤナギ属やシノキ属などが、また試料bからはハンノキ属やカエデ属などがそれぞれ1個体得られている。

最も多く検出されたのは草本類のヨモギ属で、（ヨモギ属を除く）他のキク亜科やタンポポ科を含めキク科が多くを占めている。次いでイネ科が多く、その他キンポウゲ科やアブラナ科などが若干検出されている。

4. 遺跡周辺の古植生

a・b2試料ともに観察されたのはコナラ属コナラ亜属とコナラ属アカガシ亜属のみであった。また同焼失住居より採取された炭化材の樹種同定結果をみると大半がコナラ属コナラ節で他1点はアカガシ亜属であった（炭化材樹種同定の節参照）。栃木県小山市の寺野東遺跡で行われた花粉分析結果をみると、弥生時代以降から古墳時代前期頃の森林植生は落葉広葉樹のコナラ亜属を主とし、常緑広葉樹のアカガシ亜属及び針葉樹のスギ、モミ属からなる森林が形成されていた（吉川 1997）と考えられている。こうしたことから神明遺跡では針葉樹花粉は検出されていないが、ほぼ同様な森林が遺跡周辺に形成されていたとみられる。すなわちコナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林が広がり、常緑広葉樹のアカガシ亜属やシノキ属などの照葉樹林も一部に成立していたと推測されよう。

一方草本植生について、ヨモギ属、(ヨモギ属を除く)他のキク亜科、タンポポ亜科などのキク科やイネ科を主体に、カラムツソウ属を含めたキンボウゲ科やアブラナ科などが生育する雑草類が住居周辺に生育していたものと思われる。また植物珪酸体分析から上記森林の林縁部や住居周辺にアズマネザサ-ススキ群落といった草地も形成されていたとみられ、キビ族やシバ属も成育していた可能性が考えられる。さらに森林の下草的存在でクマザサ属型のササ類が分布していたことが推測される。

5. おわりに

もともと花粉は丈夫な外膜を持つが、乾いた陸上に落下した花粉は紫外線による分解作用や土壌バクテリアの食害を受けるなどして残り難い。一方河川や湿地、海などの水域に落ちた花粉は上記のものから保護されるため良好な状態で保存される。今回の試料は焼土が主体であったことから、火という有機物にとってさらに悪い条件が加わり、産出状況が悪くなったと推測される。今後溝など水のついた環境で堆積した土壌試料について花粉分析を行うことにより、当時の植物についてより多い情報が得られるものと思われ、期待したい。

第1表 産出花粉化石一覧表

和名	学名	A	B
樹木			
ヤナギ属	Salix	1	-
カバノキ属	Butula	1	-
ハンノキ属	Alnus	-	1
コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen.Lepidobalanus	2	4
コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen.Cyclobalanopsis	1	1
シノキ属	Castanopsis	1	-
カエデ属	Acer	-	1
ウコギ科	Araliaceae	-	1
草本			
イネ科	Gramineae	19	9
クワ科	Moraceae	-	1
カラムツソウ属	Thalictrum	1	1
他のキンボウゲ科	other Ranunculaceae	4	1
アブラナ科	Cruciferae	1	1
ヨモギ属	Artemisia	22	46
他のキク亜科	other Tubuliflorae	6	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	2
シダ植物			
単状型胞子	Monolete spore	1	5
三状型胞子	Trilete spore	1	1
樹木花粉			
	Arboreal pollen	6	8
草本花粉			
	Nonarboreal pollen	55	62
シダ植物胞子			
	Spores	2	6
花粉・胞子総数			
	Total Pollen & Spores	63	76
不明花粉			
	Unknown pollen	17	11

引用文献

- 吉川昌伸 1997 「水場の遺構地点の花粉化石群」[寺野東遺跡V-小山市小山東部地区工業用地造成に伴う埋蔵文化財調査-(縄紋時代 環状盛土遺構・水場の遺構編-2)](理化学分析・写真図版)、栃木県教育委員会・栃木県文化振興事業団、p.24-29.

写真図版



1. 11号住居跡
遺物出土状況(東から)



2. 11号住居跡
完掘状況(東から)



3. 11号住居跡 勾玉出土状況(東から)



4. 11号住居跡 作業風景(東から)



1. 12号住居跡
焼土検出状況(南東から)



2. 12号住居跡
完掘状況(南東から)



3. 12号住居跡 南隅遺物出土状況(南東から)



4. 12号住居跡 貯蔵穴1遺物出土状況(南東から)

1. 13号住居跡
完掘状況(南から)

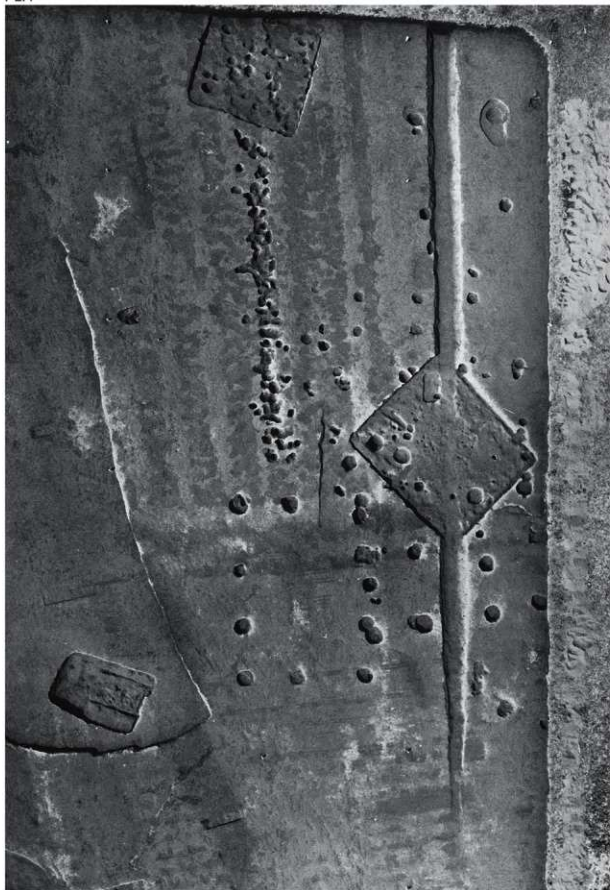


2. 13号住居跡
pit3遺物出土状況
(南から)



3. 5号住居跡
調査区内完掘状況
(南東から)





1. 遺構集中地点 俯瞰



1. 12号掘立柱建物跡 礎石検出状況(南から)



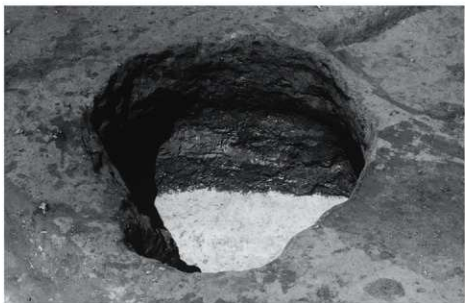
2. 13号掘立柱建物跡 完掘状況(南から)



1. 1号墳
石室検出状況
(南西から)



2. 1号墳
石室・掘り方完掘状況
(南西から)



3. 1号地下式坑
完掘状況(南東から)



1. 39号土坑 完掘状況(東から)



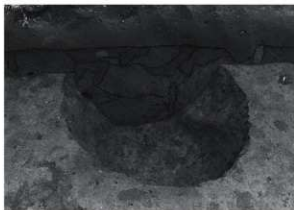
2. 41号土坑 完掘状況(南から)



3. 47号土坑 完掘状況(北から)



4. 51・53・54号土坑 完掘状況(南から)



5. 56号土坑 完掘状況(東から)



6. 52号土坑 完掘状況(東から)



7. 16号土坑 完掘状況(北から)



8. 42号土坑 完掘状況(北から)



1. 30号土坑 完掘状況(東から)



2. 36号土坑 完掘状況(北東から)



3. 38号土坑 完掘状況(南から)



4. 40号土坑 完掘状況(東から)



5. 43号土坑 完掘状況(北から)



6. 44号土坑 完掘状況(南西から)



7. 46号土坑 完掘状況(北から)



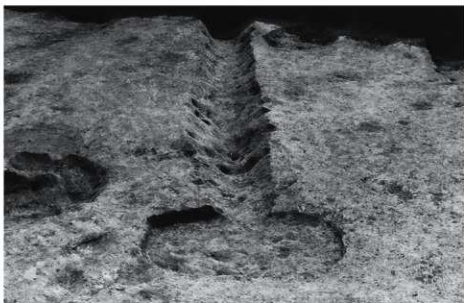
8. 48号土坑 完掘状況(北から)



1. 9号溝
完掘状況(東から)



2. 1号溝
完掘状況(北から)



3. 11号溝
完掘状況(北から)



1. 道路状遺構
調査進行状況
(南から)



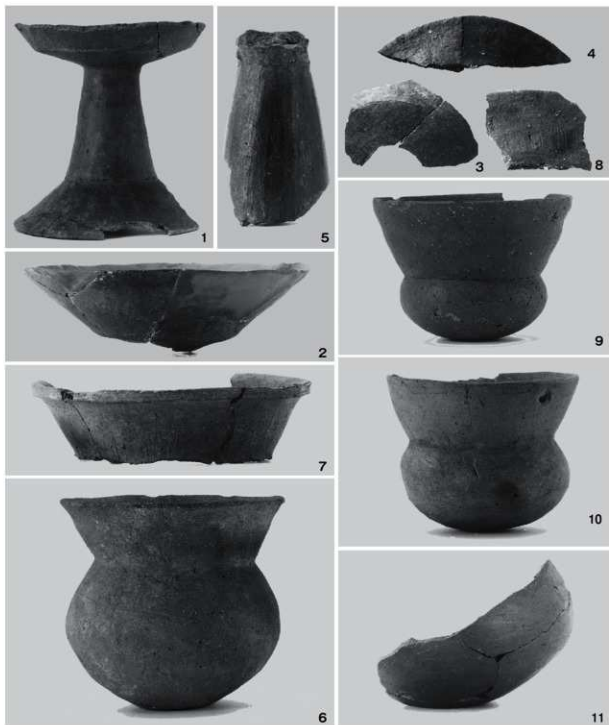
2. 道路状遺構
Eライン土層断面
(南から)



3. 調査区発掘状況
(南から)



1. 11号住居跡出土遺物



2. 12号住居跡出土遺物



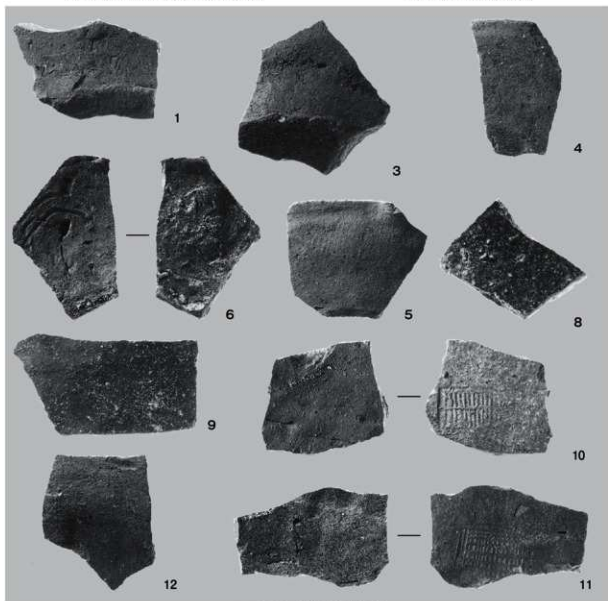
1. 13号住居跡出土遺物



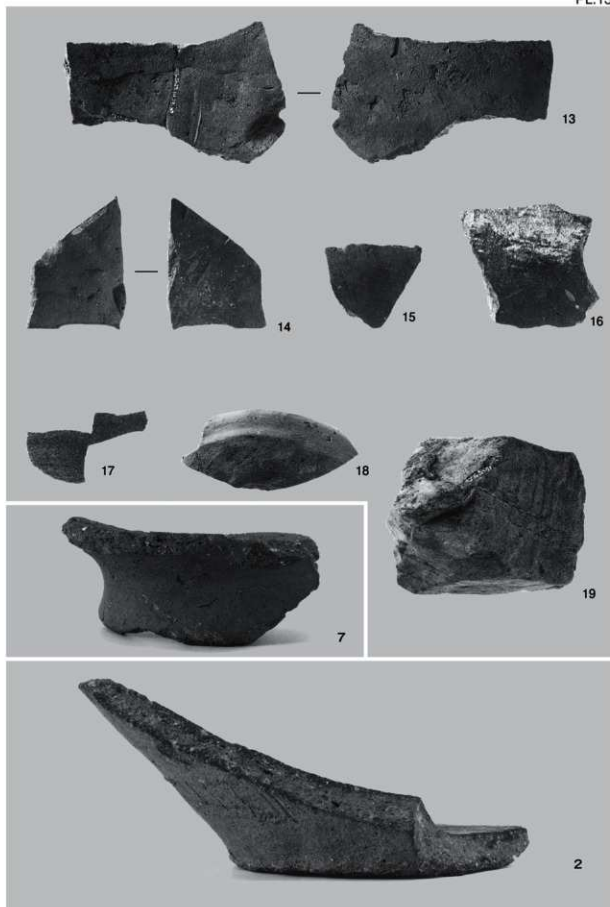
3. 11号据立柱建物跡pit 3出土遺物



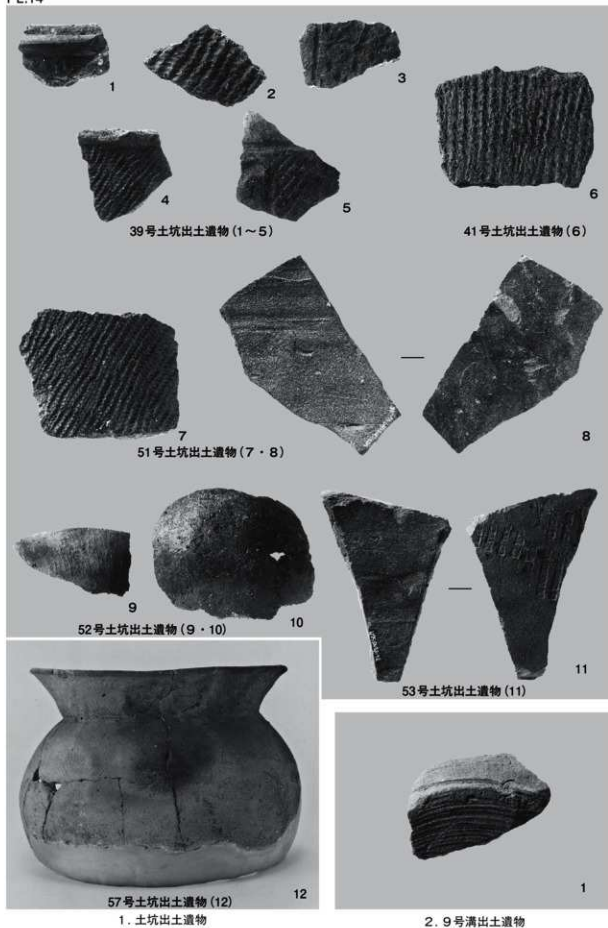
2. 5号住居跡出土遺物

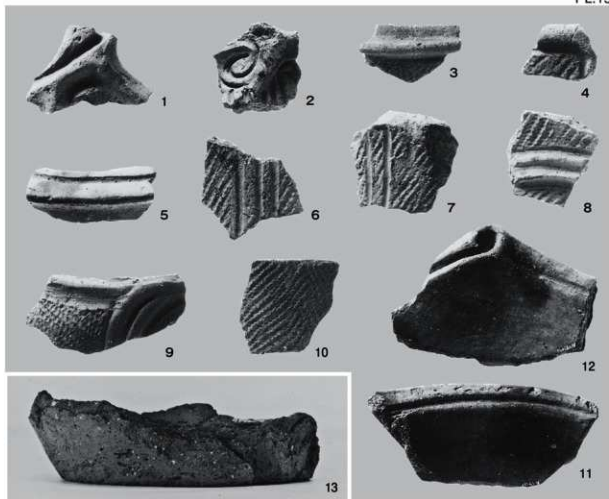


4. 1号地下式坑出土遺物 (1)

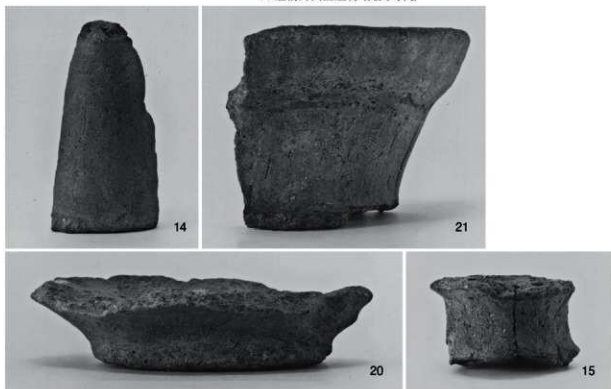


1. 1号地下式坑出土遗物(2)

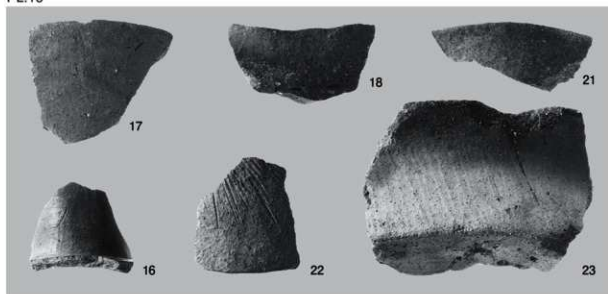




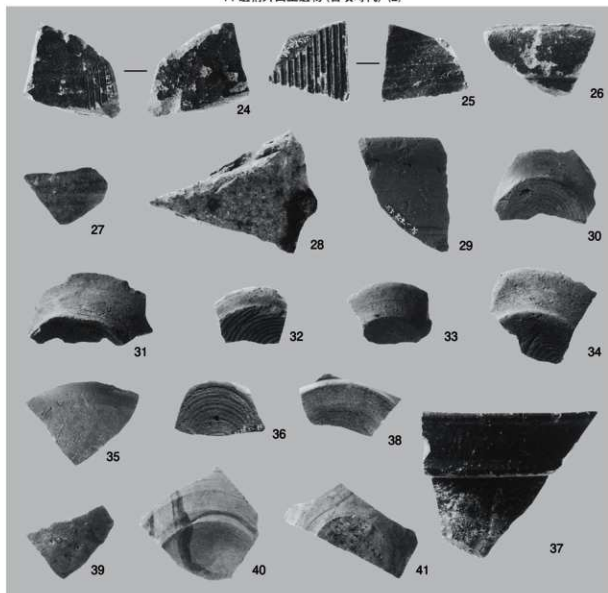
1. 遺構外出土遺物 (縄文時代)



2. 遺構外出土遺物 (古墳時代) (1)



1. 遺構外出土遺物 (古墳時代) (2)



2. 遺構外出土遺物 (中世以降)

報告書抄録

ふりがな	しんめいせいせき(だい5じちようき)						
書名	神明遺跡(第5次調査)						
副書名	土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集						
巻次	第9集						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編者名	酒井清治・駒澤大学考古学研究会・黒澤春彦						
著者名	酒井清治・駒澤大学考古学研究会・黒澤春彦・窪田恵一・比毛君男 小瀬戸恵美・鈴木茂・植田弥生						
編集機関	神明遺跡第五次調査会						
所在地	〒300-0811 茨城県土浦市大字上高津1843 上高津貝塚ふるさと歴史の広場内 Tel.029-826-7111						
発行機関	土浦市教育委員会						
発行年月日	2005(平成17)年3月15日						
(ふりがな) 所収遺跡	(ふりがな) 所在地	コード	北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
しんめいせいせき 神明遺跡	つちうらし 土浦市 おきあびのうらな 大字常名 あびのうらな 字神明 2919外	203237	36° 6' 19"	140° 11' 07"	2004年 8月2日～ 9月17日	2,000㎡	市総合運動公園 建設事業
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
神明遺跡	包蔵地	旧石器時代			剥片	古墳時代前期の竪穴住居跡と中世の掘立柱建物跡が中心である。竪穴住居跡からは斜縁泥石製の勾玉が出土した。2棟の掘立柱建物跡は礎石を使用している。遺物では北宋銭が柱穴に埋納されていた。	
	包蔵地	縄文時代 (中期)	土坑4基	縄文土器 (中期)			
	集落跡	古墳時代 (前期)	竪穴住居跡3軒 土坑2基	土師器・勾玉 (斜縁泥石)			
	古墳	古墳時代 (後期)	古墳1基 (箱式石棺)				
	建物跡	中世	掘立柱建物跡 5棟 地下式坑1基 土坑4基 溝1条 ピット群	陶器 (常滑・渥美) 宋銭 内耳鍋 土師質土器			
	道路跡	近世以降	道路状遺構				

神明遺跡(第5次調査)

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集

発行日 2005(平成17)年3月15日
編集 神明遺跡第五次調査会
発行 土浦市教育委員会
問い合わせ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811
茨城県土浦市大字上高津1843
TEL 029-826-7111
印刷 株式会社 横山印刷
